

# 和歌と日本文化

富山女子短期大学教授

廣瀬 誠 著

国文研叢書  
No.32

和歌と日本文化

社団法人 国民文化研究会

## 「はしがき」に代へて

国民文化研究会理事・亜細亜大名譽教授 夜久 正雄

(一)

広瀬誠さん（元富山県立図書館長・現富山女子短期大学教授・六十九歳）の生涯にわたる和歌の研究が『和歌と日本文化』といふ一書にまとめられたのは、まことにありがたいことである。

和歌と俳句は、日本の詩の代表のやうに云はれてゐる。俳句は最近、世界にひろがって、英語俳句とか漢俳（中国語俳句）とかが出来るやうになった。連句も国際的になつて、欧州の詩人たちと日本の詩人とが一卷を作つたといふことである。アメリカ留学から帰つてきた学生が、アメリカの大学で英語俳句を作らせられたと言つて、見せてくれたことがある。

ところが、俳句よりもっと歴史の長い、建国以来の和歌の方は、なかなか外国人作者を見出しがたいのである。

それは、俳句が二句一章を原則とすると云って、二句の対照が表現の骨子をなすのに対して、和歌は一首一文を原則として、一首のしらべ・声調の流れに作者の情意を托すからであらう。

日本語の語感や声調を他国語に訳すのは至難の業である。ために和歌の翻訳は俳句や詩の翻訳に比して、なかなか名訳が出ない。また和歌の外国研究者でも和歌は作りにくい。

しかし、和歌が日本文化の中核である、バックボーンであることに変わりはない。

戦後、相当期間、和歌は、軍国主義の表現であると云はれたり、私情の表現にすぎないから社会性思想性が無い第二芸術とさげすまれたが、戦後の混乱が落ちついて来るとともに、その存在価値が新たに見なほされるやうになった。

広瀬さんの今回の書は、戦後のさうした時期に、時流に抗しつつ、実作と研究とを通じて体得された、和歌についての確信をまとめられたものである。

いま日本文化の価値が国際的にも問はれてゐる時に、「和歌と日本文化」と題する本書は、正にその解答を示したものと云へるであらう。

(二)

さて、と云つて、昔話になるが、おゆるしねがひたい。

戦中・戦後の一番苦しかった時代に、私は、広瀬君と一緒に研究した。二人とも三井甲之先生を師とする日本学生協会の同志であったから、研究といふより、心のよりどころを求めた、と言つた方がよい、さういふ研究だった。終戦の年、私は数へ年三十一才、広瀬君は二十四才くらゐだった。

研究テーマの一つは、当時の「今上天皇」すなはち昭和天皇のお歌の研究であり、一つは川出麻須美（かはでますみ）（三井甲之主宰『アカネ』『人生と表現』同人）の詩歌の研究であった。

それからほぼ四十年以上経つてゐるから、昭和天皇のお歌については、今日知らぬ人はあるまい。しかし当時は、注目する人は少なかった。

広瀬君は、国学院大学の予科を病氣中退して郷里の富山に帰つて、療養中、研究に専念した。

『興風』といふ小雑誌（現在の国民文化研究会の機関誌『国民同胞』の前身の一つと言つてよからう）昭和二十二年三月号の巻頭に、昭和天皇の戦後の御製「災害地を視察した

る折に」その他、二十一年十月、二十二年二月各紙新聞発表の御製を掲げて、拝誦後の感想を述べてをられる。つづいて、「今上御製研究」を発表した（『興風』二十三年十一月号）。いづれも、天皇讃仰がタブー視されてゐた、共産主義全盛の占領治下であつた。つづけて広瀬君は、図書館勤務の傍ら丹念に御製を集録研究した。

この広瀬君の御製の集輯と研究と、ならびに「天皇御歌解説」（三井甲之著・謄写印刷・昭和二十七年頒布）とを基礎にして、昭和三十四年、拙編著『歌人・今上天皇』が、六十年安保反対闘争の前夜とでもいふべき時期に、刊行されたのである。

『歌人・今上天皇』（初版昭和三十四年明治書院、増補・改訂版昭和五十年日本教文社、増補新版昭和六十年同上）は、広瀬君と私との編著のやうなものである。

もう一つの共同研究は、川出麻須美先生（昭和四十二年逝去）の詩歌文章の集録と研究とであつた。

「川出麻須美」は、今日でもそれほど有名ではないが、私ども二人は、明治・大正・昭和三代第一等の歌人と信じて、その全詩歌文章の集録と歌集の発行に専念した。

これも『興風』昭和二十三年、四号にわたつて発表された広瀬論文「しひすがわたり鹿菅渡研究」が

ある。「鹿菅渡」とは「川出麻須美」の郷里の地名を採ったペンネームである。占領軍の検閲などをはばかって、編集段階で相当部分を私が削除した。広瀬君は勿論弾圧に負けな  
い決心であったと思ふが、雑誌そのものの存続を顧慮しての処置である。末尾に（二二・  
九・六）とある。二十二年九月六日擲筆の意味である。削除したところは、主として神道  
の真精神を宣揚した箇所であった。占領軍の神道弾圧中のことである。

この川出麻須美の研究は後に、川出麻須美詩歌集『天地四方』明治編・昭和編』（昭和  
二十七年）二冊の刊行となり、昭和四十七年集大成して『天地四方（川出麻須美遺稿集）』  
の大冊となった。

川出麻須美の詩歌は今日でも多くの若者に生くる力を与へてゐるのである。

○

終戦直後に広瀬君の発表した重要な論文はもう一篇あった。

「記紀歌謡研究」（昭和二十二年五月）である。これは共同研究とはいへない、広瀬君独  
自の少年時代からの万葉・記紀・古代歌謡への傾倒が、ほとぼしり出た雄篇であった。そ  
して少し時をへだてて「白鳳とアカネ」（昭和二十八年『新公論』）があった。

これらは、戦時中発表の場をもたず内にこもってゐた研究が、戦後、国の危きを見て、一気に爆発したやうな記紀万葉論であつた。

広瀬君はこの精神の緊張を、以後ずっと一貫して、記紀万葉・和歌史の研究に、持続した。(それに立山・白山をいただく富山県の郷土史の研究が加はるのである。)

(三)

昭和三十六年国民文化研究会(昭和三十九年に社団法人となる)の機関誌として『国民同胞』が創刊されると、昭和四十年六月号の「明治天皇と山」といふ題の文章をはじめとして、次々に広瀬さんの文章が発表されるやうになつた。

本書の主な内容はこれら珠玉の文章から成るのである。

記紀万葉・源実朝・明治天皇・昭和天皇・郷土の歌人の上杉謙信や五十嵐篤好たち・川出麻須美・三井甲之・斎藤茂吉・良寛などについて。

かうした文章に感動した私は、先年、これを国文研叢書の一本にまとめてほしい、と提案したことがあつた。

この提案が機縁となつて、小田村理事長が広瀬さんに、『万葉集』についての一書の作



成を依頼されたのである。

これを受けた広瀬さんは、病後にかかはらず、一気に書きあげたのが、前著・国文研叢書No30『萬葉集 その漲るいのち』である。

これは、全編書きおろしの雄篇で、癌をも克服した広瀬さんの、文字通り、いのちのみなざる万葉讃歌となった。

終戦直後、記紀万葉論となって爆発したいのちが、四十年の時をへだてて再び爆発したのである。

『万葉集』についての評論・解説は古今にわたって何千何万とあるであらうが、万葉の歌人たちが、いのちを復活して書中を闊歩し高唱するかと思はれるやうな書物は少い。

人麻呂・憶良・赤人・旅人・家持たち万葉の歌人たちが、国の運命を背負って活躍する姿、その心持が、広瀬さんのいのちと共鳴して、それこそ連嶺の峰々のやうに立ちあられ、黒部の溪の流れのひびきのやうにとどろきわたる、そんな万葉論は、これだけではなからうか、とさへ私には思はれる。

その意味で、昭和の復興の記念作ともいへよう。

前著について思はず筆が走ったが、本書は、最初の私の提案にもとづくものといへるかと思ふ。前著のあとをつぐ本書には万葉をつぐ歌人たちが登場する。また明治天皇・昭和天皇に対する讃仰のまごころが披瀝される。本書のもつ意義は冒頭にのべたのでくり返さない。

○

他に広瀬さんには歌集として癌との戦ひの記念作『坂の沼琴』(昭和五十八年)があり、富山県郷土史家として、大作『立山黒部奥山の歴史と伝承』(昭和五十九年)および立山・白山研究の入門書『立山と白山』(昭和四十六年)とがあることをつけ加へたい。

広瀬さんは、戦中・戦後・現在へと国民的緊張を一貫持続した稀有の人格である。

宮沢賢治が一生、花巻をはなれなかったやうに広瀬君も富山をはなれないが、やがて、宮沢賢治が日本全体の賢治となり世界の賢治となったやうに、広瀬さんの評価は今後さらにさらに広がり高まるに違ひない。

文集提案者の故であらう、「はしがき」を求められたので、常々蒙る学恩に対する謝辞を記して「はしがき」に代へさせていただきます。

広瀬さんのお人柄などについては、前著『萬葉集 その漲るいのち』の小田村寅二郎理事長の「はしがき」に詳しいので併せて読んでいただきたい。(平成二年七月二十五日)

## 例言

一、本書は正仮名遣（いはゆる歴史的仮名遣）を使用した。が、促音便の「っ」は小活字にした。

二、漢字の表記には、おほむね常用漢字の字体を使用した。

三、『萬葉集』『古事記』『日本書紀』等を訓み下すには、特定のテキストに拠らず、各種の訓読本を参考にしつつ、その時々で著者の好みに従った。

四、『萬葉集』の歌を引用した際、これに附記した数字は、所収巻数及び国歌大観（旧編）番号を示す。例（3・四六一）は第三巻所収、四六一番歌。

五、萬葉集歌人柿本人麻呂のマロの表記は、本書では「麻呂」で統一した。ただし書名や論文名中の「人麿」、神社名の人麿社・人丸明神、引用歌文中の「人丸」「人麿」等は、当然のことながらその固有表記のままとした。

六、明治天皇御製を引用した際、これに附記した数字は、御製作年代を示す。例（38）は明治三十八年の御製。

# 目次

「はしがき」に代へて——国民文化研究会理事・亜細亜大学名誉教授 夜久正雄

## 第一章 和歌と日本文化

### 一 古事記の世界と和歌

- 1 暁の雑声と日本の古伝承……………17
- 2 夏草と敷島の道……………26

### 二 萬葉調の歌びとたち

- 1 源実朝と萬葉集……………37
- 2 良寛の歌と萬葉集……………65
- 3 知られざる萬葉調歌人五十嵐篤好……………77

### 三 武人の歌——上杉謙信を中心に……………91

### 四 連作短歌論……………128

## 第二章 天皇の御歌

一 明治天皇

- 1 明治天皇御製と山……………159  
2 明治天皇巡幸と米大統領の辞……………169  
3 明治天皇の御連作について……………179

二 昭和天皇

- 1 霜夜の月の御製……………183  
2 植樹祭と天皇の御歌……………185  
3 残雪の御製をめぐって……………188  
4 桜の御製と恋闕の民……………194  
5 「あけぼのすぎ」の御製をめぐって……………203  
6 あかげらの叩く音……………210

第三章 川出麻須美とその周辺

- 1 川出麻須美の歌……………221  
2 川出麻須美とホイットマン……………248  
3 川出麻須美先生を憶ふ……………272  
4 三井甲之と斎藤茂吉……………283

第4章 「しきしまのみち」とわが人生

|               |     |
|---------------|-----|
| 1 天地のおのづからなる力 | 297 |
| 2 神社と地域社会     | 302 |
| 3 史学の底清水      | 305 |
| 4 古典読誦        |     |
| ① 本を読む声       | 309 |
| ② 声以伝意、書以伝声   | 311 |
| ③ 青春読書記、萬葉集   | 312 |
| ④ 心の一冊、古事記    | 314 |
| ⑤ 書物の魂        | 316 |
| あとがき（著者・廣瀬誠）  | 319 |





第一章 和歌と日本文化



## 一 古事記の世界と和歌

### 1 暁の鷄声と日本の古伝承

『古事記』を読み、天ノ岩屋戸の段にかかると、日の神が隠れ、常夜とこよゆく闇がつづき、その闇の中に荒ふる神のおとなひが無気味に湧きうごめき、妖気がたちこめてくる。

やがて天ノ安の川原の神議かんはかりの結果、そのまっ暗闇の中に常世とこよの長鳴鳥を鳴かせることになる。コケコッコーと長鳴くさはやかな声が闇を破ってひびき渡ると『古事記』の記述にはかに活気を帯び、鏡作り・玉作り・鹿骨焼き・サカキの根こじ……とあわただしく祭儀の準備が進み、おごそかなノリトが奏上され、オケを踏みとどろかせて天ノ細女うづめが踊り舞ふ。これを見て八百萬やばよろづの神々が天をゆり動かしてドツと笑ひ、その笑ひに誘はれて一条の光がほとばしり、みるみる赫灼かくしやくたる日輪の輝きは天地を浸してゆく。日本神話の最大の盛りあがりを示す場面である。

神々のあわただしい営みを、短く息をつぎつつ、たたみかけたたたみかけ記述してゆく、

あの『古事記』の緊張と興奮！ そのさきがけをなすのが常世の長鳴鳥の声である。（常夜も常世も現代では同じくトコヨと発音するが、古代では夜は甲類仮名、世は乙類仮名で、音韻も異なり意味も違つてゐた。常夜ゆく闇を破り、光明のさきがけとなるのが常世の長鳴鳥である）。

私はかつて名古屋に出張し、未明、名古屋駅に到着。次の熱田駅まで足を延ばし曉闇の熱田神宮に参拝した。神の森は黒々としづまり、空には有明の月が淡く光つてゐた。参道のここかして、森のくまぐまから鶏のさはやかな鳴き声がわきおこるのを聞きながら、ザクリザクリと玉砂利を踏みしめて歩き、古事記の長鳴鳥を回想したのであつた。あの清く爽やかな神苑の鶏声は今も耳底から消えない。

伊勢神宮の参道にも、神鶏がここかして居て、時折、美しい声を張りあげて鬨こゝろをつくつてゐる。神宮遷宮の儀式では、深夜、御神体が旧神殿からお出ましになる時を見計らつて、神官が鶏の鳴き声をまね、高らかにコケッコと唱へるといふ。天ノ岩屋戸神話の再演である。天照大御神のましますところには必ず鶏がある。みなければならぬのである。

歌人川田順は昭和十四年、建国神話のあとを巡って九州の笠沙岬かささきで壮大な夕日が海に落ちゆくのを眺め、そこで宿った。夜深く、はるかで一番鶏が鳴いた。どこで鳴いたのだからと考へてみるうちに、鶏鳴はたちまち伝播して、方々から鶏の声がわきおこり、笠沙の集落でも鳴き出したといふ。神話ゆかりの地につきつぎとひびきわたる鶏声、波の音にまぎれず澄みとほってひびきくるその鶏鳴は、思ひやるだに、すがすがしい。

富山県の八乙女山は高さわづか七五一メートルであるが、礪波平野となみを間近に見おろす山。天皇陛下（注、昭和天皇）が、

はてもなき礪波となみのひろ野杉むらにとりかこまるる家々の見ゆ

と詠まれた礪波の散居村落が眼下に展開する形勝の地。その八乙女山の上に塚があつて鶏塚といふ。塚には黄金の鶏が埋められて居て、その金鶏が元日の朝高らかに関の声をあげると伝へられてゐる。鶏鳴は旧年の邪気を払ひ、新しい年の光りかがやく訪れを告げるのである。

神通川のほとりの村里に住んでゐたゴウライ又兵衛といふ御扶持人が所用あつて夜深く

川ぞひの道をいそいでみたとき、妖氣に襲はれた。右にも左にも前にも後にも、地ひびきをたてて瀬の音が鳴り騒ぎ、迫ってくる。しまひには頭上にまで川瀬が鳴りとどろき、頭がふらふらとして来た。又兵衛は倒れさうになったが、ハッと気付いて腰の刀の柄に手をかけたとたんにコケッココと高らかな一声がひびきわたり、瀬音は消え、妖氣は退散した。先祖伝来のこの宝刀の柄にはみごとな鶏が彫ってあった。この名彫刻の鶏が妖魔を退散させ、又兵衛を正氣に返らせたのである。これは富山県大沢野町に伝はる伝説である。

(鶏鳴が妖氣を払ふといった伝説は全国各地に伝へられてゐる。また外国にも同様の信仰があつたらしく、シェークスピアの『ハムレット』に鶏鳴が聞えると亡霊が消えてゆく場面がある)。

「日本の神の観念は低級で、ありとあらゆる高低さまさまの雑神がゴツチャに崇拜されてゐる」と誤り説かれ、不当に蔑視されてゐるが、古代日本の神々の世界には揺らぐがままの秩序があり、暗黒を光明化してゆく不断の努力がある。鶏の一声によって退散し消滅する「あらぶる神のおとなひ」「よろづの妖ひ」と、鶏声によつておごそかに出坐まします日の大御神！ しかも邪神・悪神・暴神は永久に追放されるのでなく、言向けことひ和され、

守護神に転化し、日の神の光にとけこみ、八百萬の神の秩序の末座にくりこまれてゆくのである。親鸞は「氷多きに水多し、障り多きに徳多し」と述べたが、無数の塵埃がかへつて光を反射して大空を明るくするがごとく、すべての暗がりには日の大御神に摂取同化され、いよいよ日の大御神の輝きを増すのである。

葦原の中つ国には荒ぶる神がサバへのやうにさわぎ、湧きかへり、岩根・木立・草の片葉はにいたるまで物言ひ、ざわめいてみた。それを押ししづめ、日の大御神の清らかな御子が天降り、これを安らかな国として平和にしろしめすといふのが神道の根本的観念である。天ノ岩屋戸の段につづく天孫降臨の段、これが日本神話の中核的テーマである。

『日向国風土記』（逸文）の伝承では天孫降臨のとき天地晦冥であつたので、千穂の稻を粃としてまき散らしたところ天も地も明るくなつたといふ。暗黒のざわめきを光明に転じてゆくといふのがあくまでも天孫降臨伝承の中心のテーマである。この暗黒から光明への一大ドラマの序曲をなすのが常世の長鳴鳥である。暗黒と光明の交錯を貫いてひびきわたる清朗爽快の一声である。

一番鶏はまだまっ暗なうちに鳴く。明けてからではなく、暗闇の中で高々と関の声をあ

げる。古代語の「あかときの夜のほどろ」の時刻である。この暗がりこそ光明の母胎である。川出麻須美は昭和十二年「うぶすなの神に詣でて」と題して、

ほのぐらきみ社の奥したしげにほゝゑます神にぬかづきぬ吾は  
あめつちを照りとほす光しぬびつゝくらきにあれば心安けし

と詠じ、敗戦後の昭和二十三年には、

ひとり坐し心に思ふくら空にかくしゃくと照る日の大御神

と詠じたが、この暗黒にあつて、天地を照り通す光を実感し、安らぐ心こそ、古神道の神髓といふべきである。(注、かくしゃくは赫灼)

古代朝廷の政務は暁闇、すなはち夜のまだ明けぬ時間に執り行はれた。これを「朝まつりごと」といふ。

後醍醐天皇御製



みじか夜ははやあけがたと思ふにも心にかかる朝まつりごと  
露よりも猶ことしげし萩の戸のあくれば急ぐ朝まつりごと

後花園天皇御製

事しげき朝まつりごと思ひつつ寝ればや早きねざめなるらむ（文安五）

「露よりも猶ことしげし」といふ表現に、あの天ノ岩屋戸の段のあわただしい神々の営みを思ひ合せるのである。

『隋書倭国伝』に伝へていふ。隋帝が日本の使者に向つてその風俗を尋ねたところ、使者は「倭王は天を以て兄となし、日を以て弟となす。天未だ明けざる時出でて政を聴き、跌倒して坐し、日出づれば、便ち政務を停め、云ふ『我が弟にゆだねん』と」と答へたといふ。多少の伝聞の誤もあるらしいが、日本の朝廷の政務が、「天未だ明けざる時」を重視してゐた事実はまことに印象的である。

その早暁政務の時刻を告げ知らせたのが鶏声であつた。歴代天皇の御歌にしばしば暁の

鶏声が歌はれてゐるのは、その基づくところまことに遠くして深いのである。

後村上天皇御製

鳥の音におどろかさされて暁のねざめしづかに世を思ふかな

後花園天皇御製 暁鶏

鳥の音は時をたがへず聞ゆなりをさまらぬ世をおもふねざめに（長祿二）

桜町天皇御製 暁天鶏

おどろかす鳥の初音はつねにおきなれて夜深くいそぐ朝まつりごと（元文四）

今上天皇（注、昭和天皇）御製 暁鶏声

ゆめさめて我世をおもふあかつきに長なきどりの声ぞきこゆる（昭和七）

前述の後醍醐天皇の朝まつりごとの御製につづけて、心こめて拝誦すべき大御歌であ

る。目ざめてまづ世を思ひ民を憂へられる大御心に朗々と鶏の声が聞えてくる。「暁の夜のほどろ」に高々と関を告げる鶏鳴、私はそこに日本のいのちの脈動を実感する。

現在、鶏の飼育は鶏卵生産の企業と化し、鶏は産卵機械となってしまった。飼育箱にはメンドリが居るばかりで、田園を自由に闊歩しつつトサカをふりたてて朗々と鳴くヨンドリの姿など見られなくなった。川田順が笠沙の岬の宿で聞いたやうな、遠く近く鳴く鶏声は絶えて聞くことができなくなってしまった。単なる憐れな一動物としてではなく、私は日本のいのちを実感すべき貴重な生きものの喪失として、さびしく残念に思ふのである。ただ伊勢・熱田などの神域では、今もなほ神代ながらの鶏鳴を聞き、神話伝承の悠久を味はひ、歴代天皇の朝まつりごとを偲ぶことができるのである。明治天皇は

いにしへの姿のままにあらためぬ神のやしろぞたふとかりける（神社・45）

いそのかみふるきてぶりはいまもなほ神の宮居にのこりけるかな（社頭・40）

と詠ぜられたが、社殿のすがた・神域のただずまひ・祭儀のありさまのみならず、朗々と高鳴く鶏の声もまた古社に残り、日本のいのちを伝へてゐることを、うれしく尊くありが

たく思ふのである。

『国民同胞』一六六号 昭和五〇

## 2 夏草と敷島の道

### (一) 伊勢神宮と日本武尊

杉の太い幹が天地を貫く柱のやうにそそり立ち、その木下闇このしたやみに千木ちぎ・堅魚木かつをぎが金色にきらめき、草葺かやぶき白木造りの社殿がひっそりと鎮まつてゐる。伊勢の神宮こそは、日本の自然と日本の文化とが最も神々しく、最も力強く、最も淨らかに融合した聖域である。

神宮には、現在地に隣り合はせ同じ規模の旧殿地がある。二十年ごとの建替へのための御用地である。旧殿地には粒の粗い清浄な石が敷きつめられて居る。その石原を隔てて、社殿を横から拝観することができるのである。

ところが、明治初年の神宮のお写真では、この旧殿地に草が茂つてゐる。ぎっしり茂つた草原を隔てて神宮社殿の側面が写されてゐる。大粒の石を敷きつめた旧殿地の清浄簡素な感じはまことに尊いが、草茂る原もまたそれなりに万物を自然のままに生かす古神道の精神を深々と宿してゐたと思ふのである。

『古事記』『日本書紀』の伝へによると、東征を命ぜられた日本武尊は、まづ伊勢神宮に詣で、姨倭姫命をばやまとひめにいとま乞ひされた。倭姫命は齋宮さいぐう（さいぐう・いつきのみや）である。（未婚の皇女が齋戒潔斎して、天皇の御代理として伊勢皇大神宮に奉仕せしめられた。その皇女を齋宮と称した）。

倭姫命は、草薙ノ剣と囊ふくろを日本武尊に授け、「慎みて、な怠りそ」（紀）と戒め、「もし急とみの事あらば、この囊の口を解きたまへ」（記）と諭されたといふ。言葉は簡潔であるが、神の咒言そのままの威厳を帯び、しかも叔母の甥に対する人間的愛情、不安の影が宿ってゐる。強い祈念が短い言葉の間に、照りつ蔭りつして迫ってくる。（日本武尊を祀る大津市の建部大社の護符にはこの語、「慎莫怠」が記されてゐる）。

神剣を頂いた尊が神宮を退出する光景を思ひ描くとき、深々と茂った夏草がそこに浮かびあがってくる。幼少時代から度々拝見した草原を隔てた神宮の写真の印象が灼きついてゐるためであらうか、また草薙の剣のゆかりであらうか、日本武尊といふと、私はいつも夏草の茂みを思ふのである。

神宮の周辺も、古代の東国も、いたるところ未開拓の原野であつたらう。日本全土各所

に原野が拡がってゐたであらう。葦原の中つ国といはれたやうに、水辺には葦、野山には丈なす薄が茂りに茂ってゐたであらう。私にとつて日本武尊のイメージは、その深い草の中を歩みゆく白衣の姿である。

やがて尊は焼津で賊の放った野火の難に遭遇。神剣で草を薙ぎ、囊から取出した火打石で向火を打ち出し、火攻めを逆手に使つて切り抜けた。尊は煙にむせびつつ妃弟橘姫の名を呼び、姫をかばひつつこの野火攻めと戦はれたのであらう。打ちなびく夏草の青と、めらめら燃え寄せる火炎の赤と、尊の姿の白。その鮮明な色彩が幼少から私の脳裏に灼きつけられてゐる。これは、私の小学校時代の教科書に載せられてゐた尊の絵によつて形成されたイメージである。長じて記紀を読み、このイメージは一層強化された。(それについても思ふのは、幼少時代教科書の図から受ける感銘の強さである。その意味でも、民族共通の史的イメージと絶縁した現今の教育は深憂にたへぬのである)。

当時の軍装・旅装は白色ではなかつたかもしれぬが、尊の神性が白い衣装といふ民族的イメージを作り出したのであらう。『常陸風土記』は神が「白妙の大御服着まして」現れたと説く。神武天皇も日本武尊も白い服装で表現するのが心理的に自然だったのであら

う。野火攻めの季節も夏ではなかつたのかもしれないが、草薙といふ語からは、丈たけなす青草が印象鮮かに見えてくる。衣裳の白が夏草の青をいよいよひきたたせてゐる。

(二) 萬葉集の夏草・草深野

『古事記』の歌謡には「夏草の相寝の浜」といふ美しい語が出てくる。ぼうぼうと浜辺に靡き伏す夏草の青が目に見えてくる。『萬葉集』柿本人麻呂の歌には「玉藻刈るかみぬ敏馬を過ぎて夏草の野島の崎に舟近づきぬ」(3、二五〇)と歌はれてゐる。海の青と夏草の青とが色濃く相映じ、さはやかな潮の香が吹きつけてくる。人麻呂はまた、妻と別れて山路をたどったとき「夏草の、思ひしなえて、偲おもふらむ、妹が門かど見む、靡けこの山」(2、一三一)と歌つてゐるが、これは炎天下に力萎えた夏草である。大地から放射する熱気が草いきれとともに迫ってくる。うちしをれた妻の姿、その女体から発散する熱気、それが夏草と一つになって迫ってくる。

なかつたのち

中皇命の御歌には「たまきはる内の大野おほのに馬並めて朝踏ますらむその草深野」(1、

四)と歌はれてゐるが、「その草深野」といふさりげない表現に、露しとどに置く深い草

原の実感が息づいてゐる。朝霧の中から、その果しない草の茂みがありありと見えてくる。

大伴家持は任地越中の風土を「天さかる、鄙にしあれば、山高み、川遠白し、野を広み、草こそ茂き」(17、四〇一一)と歌つてゐる。「野を広み、草こそ茂き」広漠たる古代北陸の原野が印象的である。家持はこの鄙の草原に生の躍動を味はつてゐる。

後世では、芭蕉が奥州藤原氏の遺跡に立つて「夏草やつはものどもが夢のあと」と無量の感慨をこめて詠嘆してゐる。夏草はこのやうに民族の古典の中にたくましい姿を隠見させてゐるのである。

### (三) 草の伝承と言語

古代の祝詞では、葦原ノ中つ国は石も木も物を言ひ、草の片葉に至るまで言問ふ草味の世であつたが、これを鎮め、天孫降臨を実現したといふ。鳴りざわめく木草土石の世界に秩序と調和をもたらしたのが天孫降臨だと伝へてゐる。(紀元節唱歌の「高根おろしに草も木も靡き伏しけん大御世」といふ歌詞には、この古代祝詞の反映がうかがはれる)。



神代には、草といふ草は強い意思をもって野山も狭に鳴りざわめいてみたのである。ここに草に対する古代日本人の気持が濃く出てゐる。これをアニミズムと名づけて輕蔑するのが、現代のいはゆる文化人でもあるが、草木土石一切にひたひたといのちを感じた、その古神道的感覺こそ、やがて「草木国土一切に仏性あり」とする大乘仏教をとかしこみ、日本人の自然觀を奥深く幅広く形作つて来たのである。草木に対する原初の感覺をいきいきと保持しつつ、しかもそれを、天つ日のまばゆい光のもとに秩序あらしめ、調和あらしめて来たところに、日本独自の文化の形成がある。人のいのちのはかなく消えることを「草葉の露」になぞらへ、祖靈の冥覽を「草葉の蔭から見守る」といふ。このやうな幽顯の關係を示す重要な語に草が出てくることの深い意義を思ふべきである。

人民といふことを表現した最初の和言葉はこれまた草——「人草」「青人草」である。『古事記』のイザナギ・イザナミノミコトの傳承中に見える語である。後世には「民草」の語も生じた。人々を青々とうちなびく草にたとへた美しい語である。

いはゆる「進歩的」学者・評論家はこれを「個性のない草にたとへて人民を侮辱したものの」などと説くが、とんでもない偏見だ。古来、草が日本古典の上にどのやうな重要な意

味を帯びて登場したかを味はひかへしてみるべきである。幕末には「草莽さうぼう」の語が愛用され、草莽を自称する志士たちが強い個性と自覚をもって東西に奔走した。草莽とはいふまでもなく、草むらの意である。草深い田舎に居る在野の者の意である。

#### (四) 敷島の大和心

日本文化の伝統を古代から今に至るまで脈々と伝へて来たのは、和歌——敷島の道である。和歌から分化して別個の天地を切り開いたのは俳句である。物語文学も随筆文学も紀行文学も、和歌・俳句を織りまじへつつ書きつがれて来た。この和歌・俳句を主調とする国文学において、重要な要素となつてゐるのは日本の美しい自然である。

自然に対する詠嘆は、墮落すれば「月花のもてあそび」となる。月花のもてあそびを厳しく批判し、『古今集』的美意識を徹底的に打破したのは正岡子規であったが、その子規は六尺の病床から、自然の美しさをおびただしい和歌・俳句に詠み、絵筆をとって写生し、あくことを知らなかった。

日本の伝統に深々と根をおろし、根を張つてゐるのは日本の美しき自然である。この自

然が亡びたならば、日本人の精神も荒廃し、文化も伝統も衰弱し滅亡するであらう。健やかにして柔軟な日本人の魂——大和心は美しき自然とともに息づいて居るのである。（本居宣長も大和心の美はしきを「朝日に匂ふ山桜花」と詠じてゐる）。

「七八たび生れ變りて守らばやこの美しき大和島根を」、これは一特攻隊員の辞世である。いはゆる「自然保護」を断じて革新団体専用の旗印にさせてはならぬ。日本の伝統と一つにとけあつた自然を守らねばならぬ。敷島の道に基づく「美しき大和島根」の護持こそ急務である。その美しき自然はいはゆる景勝地にあるのではない、観光地にあるのではない。道ばたの夏草の中、丈なす青スキの中にも深々と息づいてゐるのである。

#### (五) 夏草と明治天皇

夏草と人とのかかはりあひは複雑である。花と人の関係のやうに平坦ではない。動的、多角的、起伏的である。時として刈り払ひ、薙ぎ払ひ、汗みどろになつて取り組まねばならぬ。み祖たちは草を刈り払つて田畑を拓き、刈り取つた草をもつて屋根を葺き、その草場を大切に守り、草と人とは不思議な調和を保つて来た。私は草と取り組みつつ、そのた

くましい力強き美しさに驚嘆するのである。「刈らるとも忽ち生ひむいきほひを示して草は刈られつつあり」、これは川出麻須美の一首である。繁き夏草はそのまま人生の繁忙を思はせる。人の世、人の務めに夏草を思ひうかぶるとき、自然と人とは一つに融合し、「国家の事業を煩わづらはしとなす」（聖徳太子『維摩経義疏』）その煩はしき思ひに清新の力がよみがへってくる。煩事に挫けざる力が湧き起ってくる。それが日本の伝統である。大和魂である。

#### 明治天皇は

宮の内もあつきこの日にしづのをが野べの夏草かりくらすなり（36）

夏草を車につみてをさなごをたづさへながらしづがゆくみゆ（35）

かたはらに眠るうなみは夏草を刈るしづのめがうまごなるらむ（40）

と、くりかへし夏草にいたつく民の辛勞を詠まれ、また

事しげき世にも似たるか夏草は払ふあとよりおひ茂りつつ（37）

国のため民のためには夏草のとしげくともつとめざらめや（38）

まつりごといでてきく身は夏草のとしげくともいとほざりけり (44)

夏くさのことしげき世にたたざらばたのしきこともあらじとぞおもふ (41)

と歌はれた。日露戦争中、明治天皇は炎暑のさ中でも軍服を脱がれず、玉汗淋漓たまあせとして国務に精励されたといふ。これらの御製を拝誦しつつ、そのお姿がありありと目に浮かんでくる。そして、夏草の道を踏み分けて西国・東国に奔走された古代の日本武尊の伝承をふと思ひおこすのである。

夏草に国事を偲おもばせたまひ、国事に夏草を思はせたまふ大御心に深く感銘しつつ、私はさらに天皇の御製、

夏草のしげみをわけてふく風にうちまじりたる百合ゆりの香かぞする (40)

の一首を思ひ出す。深く茂った夏草を動かす風、その風につれて漂渺とただよってくるユリの花の清香！ 私はそこに日本の美の至極を見るのである。敷島の道の至妙をかいま見るのである。

(『国民同胞』一九〇号 昭和五二)



## 二 萬葉調の歌びとたち

### 1 源実朝と萬葉集

#### (一) 不可思議の人実朝

萬葉の大山脈が大きくうねって傾き、天平宝字三年（七五九）正月五日、万感こめた家持の賀歌を最後として地平に没したあと、萬葉の調べは絶えた。平安時代の和歌は『古今和歌集』を原点として展開し、その余勢は近代にまで続いてゆく。

その地平を破って突如噴出し、萬葉の調べを天空高くかなでた大山塊があった。子規が、萬葉以来・人麻呂以来の第一人者と激賞した源実朝だ。実朝の征夷大將軍在任は建仁三年から承久元年まで（一一〇三〜一九）萬葉最後の歌から約四百五十年後になる。『金槐和歌集』にとどめた実朝の歌の、いのち漲る調べは、まさに奇跡としか言ひやうのないものであった。その実朝が二十八歳で凶刃に倒れたあとはまた萬葉調の空白時代が続く。

実朝没して五百年後、賀茂真淵（元禄十年〜明和六年、一六九七〜一七六九）は古道を説

き、萬葉・実朝のますらをぶりを唱道したが、つづいて田安宗武・良寛・平賀元義らが『萬葉集』を模範として作歌し、また国学者たちも、近世調の和歌を作るあひまに萬葉調を試みた。

明治初期、天田愚庵・福本日南らが萬葉調で作歌。つづいて正岡子規は明治三十一年、「貫之は下手な歌よみにて古今集はくだらぬ集に有之候」と大上段にふりかぶって宣言、ここに萬葉復古の時代が到来、七百年を隔てて実朝の魂を呼び起こし、千二百年を隔てて『萬葉集』と呼応しあつたのであつた。

かうして見ると、実朝とはまことに不思議な存在だ。その前後に各数百年の大キレットを切り落して孤聳し、俗界をはるか眼下に霞ませて、天辺の風に山の額ひたひを吹かせてゐる。(注。「山の額」の語は実朝の歌「我のみぞ悲しとは思ふ波の寄る山のひたひに雪の降れば」から取った。キレットは切れつ所、山稜の大きく断絶した地形をいふ語。槍ヶ岳・穂高岳の間の大断裂を大キレットといふ)。



(二) 鄙の荒野

『夫木和歌抄』所載の実朝の歌に、

しなざかる越の国辺にありしかば都のでぶり知らずなりにき

といふ一首がある。「しなざかる」は「はるかに山坂隔てた」の意で、「越」にかかる枕詞。越の田舎ひなかに長らく居たため、都の風俗もわからなくなってしまうといふ慨嘆だ。

・実朝は越（北陸）に住んだことはない。これは『萬葉集』の同伴家持が越中国守として五年間も越の国辺に居たことを思ひ、家持の心になりかはって嘆息したのだ。

もつとも、家持は越中ではむしろ潑刺として勤めを尽くし、広大な北陸の山河に親しみ、力強く生きて居た。「天ざかる鄙いづとせに五年住まひつつ都のでぶり忘らえにけり」(5、八八〇)と嘆き、早く都へ返して下さいと嘆願したのは、家持でなくて、筑前守山上憶良であった。この憶良の歌を家持へ転換させて、実朝は歌ったのであらう。

実朝は征夷大將軍、すなはち鎌倉幕府の首長、形の上では東国武士の代表であったが、

心は深く都へ傾いてゐた。それは近代的な都会志向とは全く別の心情だ。日本のいのち、日本のみやびの伝統が、朝廷を根源として脈々と息づくことに対する憧憬であった。そして、朝廷とは別個の政権として、東国武士を基盤に成立した幕府の存在に違和感をいだいて居た。(皮肉にも、実朝自身がその幕府の長官なのだ)。その鬱屈した気持を、家持の境涯に投影してこの一首を詠じたのだ。

「ありしかば」といふ強い不満は、萬葉の人麻呂が吉備津采女うづなめの死を悼んで「そら数ふ大津おほつの児が逢ひし日におほに見しかば今ぞ悔しき」(2、二一九)と悲嘆した、その「しかば」を思はせる表現だ。(萬葉には、この他にも「ありしかば」が二例ある)。

更に、「にき」は『萬葉集』に四例があるが、うち三例までは歌の中途に使用されてゐる。結句に「にき」と強く言ひ切つたのは、大伴坂上郎女さかのうえのいらつめが尼理願りくわんの死を悼み、

とどめえぬ命にしあればしきたへの家ゆは出でて雲隠りにき(3、四六一)

と詠んだ、ただ一例だ。しかも、実朝の歌は「知らずなりにき」と否定の形を「にき」で強く押さへつけるやうに言ひ切つてゐるが、これは萬葉にもなかつた表現だ。この強い調

べから、実朝の鬱々として晴れやらぬ心情が激しく迫ってくる。越中に関して詠んだ実朝の歌といふ点でも、心に残る一首だ。

実朝はまた「旅」の題で、

天さかる鄙ひなの荒野に独り寝ばもの思ふよりわびしかるべし

と詠んでゐる。妻が亡くなった時、萬葉の大伴旅人は「人もなき荒れたる家に独り寝ば旅にまさりて辛苦くるしかるべし」(3、四四〇)と、旅よりも、妻のなき都の家が苦しかるべしと断腸の悲しみを歌ったが、実朝はこれを裏返しにして、旅の独り寝のわびしさを歌った。ここにも、都から隔絶した「鄙」に対する実朝の心情が強く出てゐる。北条一族の陰険な目に囲まれて、しばしも心安からぬ実朝にとって、関東、鎌倉はまさに「鄙の荒野」であった。そこに実朝は「独り」居たのだ。

(三) 神さびてはるかなるもの

やはり『夫木和歌抄』収録の実朝の歌に、

天地の開けし世より神さびてはるかになりぬたかひこの崎

とある。たかひこの崎の、天地開闢以来の、神々しく悠久なるを讚嘆した一首だ。

萬葉の山部赤人は富士山を讚へて「天地の分れし時ゆ神さびて高く貴き……」(3、三一七)と歌った。垂直的に雲を貫いてそばだつ高山に対しては「天地の分れし時」がふさはしいが、水平的に広大な海に横たはる崎に対しては、むしろ「天地の開けし世」が的確だ。

赤人と実朝、山と海、剖判と開闢、その絶妙の対照を思ふのである。

萬葉の作者不詳歌「いしにへのことは知らぬを我見ても久しくなりぬ天の香具山」(7、一〇九六)は、たかひこの崎の歌とやや似た調べであるが、昔のことは知らぬがと足踏みした萬葉歌よりも、素直に天地開闢から詠みくだした実朝の歌の方が私は好きだ。

「たかひこの崎」は所在不明。「日本古典集成」本の頭注で樋口芳麻呂氏は「たかひこの崎は垂たも姫の崎たも富山県氷見市南部にあった布勢の湖の岬のこと∨の誤りであろう」と考証された。なるほど『萬葉集』には「神さぶる垂姫の崎」(18、四〇四六)と歌はれ、似た

感じだ。「神さびて」「神さぶる」は同じ語の連用形と連体形)。とすると、これも越中関係の一首といふことになるが、なほ慎重に検討したい。崎名の「ひこ」と「ひめ」は男と女。「たか」と「たる」も上向きと下向きで、「たかひこ」と「たるひめ」はまさに対偶的だ。実朝は、萬葉の垂姫を意識して、別に高彦崎を設定したのではなからうか。実朝が、いくたびか見て、その神さびたたずまひに感動した、相模・伊豆あたりのいづれかの無名の崎を、心ひそかに高彦の崎と名づけ、天地開闢の神代を想ひ描き、縹渺たる神韻を味はつてゐたのではなからうか。(高彦の名からは、記紀のアジスキタカヒコネの神名も連想される。そしてこのタカヒコネの神の妹はシタテルヒメ。下照姫は垂姫を思はせる)。私はそんな気がしてならないのである。殺伐陰惨の幕府の実力者うごめく中で、実朝はひとり天地悠久の神気を思ひ、無窮のいのちに心を寄せてゐたのであらう。

#### (四) 豪快と繊細

源実朝は「あら磯に波のよるをよめる」と詞書して、

大海の磯もとどろに寄する波われて砕けて裂けて散るかも

と詠んでゐる。豪快極まる歌でありながら、同時に、繊細だ。浪が荒磯に砕け、しぶきと成つて飛び散る、その無数の泡がシューッと消えてゆく、その微音までが幾百幾千重なりあつて、巖を打つ荒波の大音響もろとも読者の耳にひびいてくる。

「大海の磯もとどろに寄する波」は『萬葉集』に前例がある。笠女郎いづつめが大伴家持に贈つた二十四首中、

伊勢の海の磯もとどろに寄する浪かしこき人に恋ひわたるかも（4、六〇〇）

の一首である。これは「畏き人」を言ひおこすための序詞として「伊勢の海の磯もとどろくばかりに打ち寄せる浪は恐ろしい」と前置きして「その恐ろしい浪のやうに、身分高く、近づき難い、恐れ多い人に恋してゐることだ」と歌つたものだが、実朝のは現実に荒磯にたつての実景歌だ。萬葉の歌詞を利用してながら、それを現実に引き戻したのだ。

また『萬葉集』には「我が胸は破われて摧とこけて鋒心とこころもなし」（12、二八九四）と「われてく

だけで」の用例があるから、実朝はこれを取って活用したのであらうが、萬葉は「われてくだけで」であるが、それを実朝は「さけてちる」まで細かく観察表現した。「われ」「くだけ」「さけ」「ちる」と四つも動詞を連続させて浪の動態を活写したのは、実朝が初めてだ。しかし、これは単なる自然の描写ではない。征夷大将軍の虚位につき、北条氏の恐るべき陰謀に手も足も出せなかつた実朝の悲痛な心情、「われて、くだけで、さけて、ちる」思ひが、おのづから荒浪となつて表現されてゐるのだ。その悲歎懊惱が打ち沈んだ弱々しい調べとならず、豪放な、調子の張つた歌となつてゐるところに、実朝の魂の強さが思はれる。『萬葉集』の古語を活かし、己の人生を力の限り歌ひ上げた稀有の作だ。

(五) 忠誠心の絶唱

山は裂け海はあせなむ世なりとも君にふた心わがあらめやも

「太上天皇御書下預時」と題する三首中の一首。この歌の言葉の運びに似た例を『萬葉集』に求めるならば、人麻呂の

ささなみの志賀の大わだ淀むとも昔の人にまたも逢はめやも（1、三二）

がある。「淀むとも」と声を落とし、ここから急に強く「昔の人にまたも逢はめやも」と、還らぬ昔を断腸の思ひで歌ひ上げた人麻呂に対して、実朝も「世なりとも」と声を呑み、ここから一挙に「君に二心わがあらめやも」と内心の激しい高まりを直叙した。

「とも」は仮定の語であるが、人麻呂は現実に琵琶湖の大きな淀みを見つめてゐる。実朝もまた「山はさけ海はあせなむ世」を実感してゐる。朝幕の対立は活断層の危機を孕み、幕府自体も凄絶な内紛を重ねてゐた。そして『金槐集』の成つたのが建保元年（一二二二）十二月、実朝が暗殺されたのが承久元年（一二二九）一月、そのわづか二年後の承久三年五月、承久の大乱が起こつたのだ。朝幕間に、山は裂け海はあせなむ程の大事が到来することを、実朝はひしひしと予感してゐたのだ。

であるからこそ、討幕戦を決意されてゐた後鳥羽上皇から賜つた御書に対して、感激嗚咽し、どのやうなことがあらうとも大御心に背く心は持ちませんと宣誓した。上皇に対する宣誓であつて、同時に自分自身の心に固く言ひきかせた「言立て」であつた。他の二首



は「大君の勅を畏みちちわくに心は分くとも人に言はやめも」「ひむがしの国に我が居れば朝日さすはこやの山の蔭となりにき。」この三首連作、肚の底からの忠誠心を歌ひあげ、天地をも揺さぶるばかりの絶唱である。まさに、正岡子規が「人丸の後の歌よみは誰かあらん征夷大將軍みなもとの実朝」「はたちあまり八つの齡を過ぎざりし君を思へば愧ぢ死ぬわれは」と絶讃したやうに、実朝とはまことに不思議な人物であつた。

(注。「ちちわくに心は分くとも」は「心がちちちに乱れようともの意。「ちちははに」と書いた写本がある。これだと「父母の心に背いても」の意となる。

「はこやの山」の原義は仙人の住む山だが、ここでは上皇の御所の意に用ひ、後鳥羽上皇の大きな御恵みに浴してゐる感激を歌つた。

(六) 月かたぶきぬ

実朝には『萬葉集』を超える歌がいくつかあるが、萬葉に即き過ぎ、その古詞を利用しすぎて、いささか気になる作もある。その例を一つ引く。

ぬば玉の夜はふけぬらし雁がねのきこゆる空に月かたぶきぬ

晩秋の冷えびえとした夜氣が伝はってくるやうな作だが、これは『萬葉集』の

さ夜中と夜はふけぬらし雁がねのきこゆる空に月わたる見ゆ（9、一七〇二）

ぬば玉の夜はふけぬらし玉くしげ二上山に月かたぶきぬ（17、三九五五）

の二首をつきまぜて一首に組立て直したやうな歌だ。前者は「弓削皇子に献る歌」とあるのみで作者名を記さぬが、人麻呂作ではなからうか。後者は土師宿禰道良の作。一首中に「ぬば玉の」「玉くしげ」と枕詞が二つもあって、実景は「二上山に月かたぶきぬ」だけだが、簡素で、歌柄大きく、堂々たる一首だ。二上山にしづしづと沈む月が目に見えるやうだ。ところで、実朝の「雁がねのきこゆる空」は頭上高き宙天を思はせるが、「月かたぶきぬ」は低い西空だ。高天と低空との整合はこれでいいのかと、ちょっと気がかりになる。二首のミックスのため生じた欠陥であらうか。

## 付、土師道良と菅原道真

なほ「二上山に月かたぶきぬ」の作者の道良は、越中国史生、つまり国庁の実務を担当した下役人だ。天平十八年（七四六）大伴家持が越中守に赴任した時、八月七日、新長官の歓迎宴が開かれ、主客歌を詠みかはした。夜も更けたので、道良がこの一首を詠み、これを最後として宴を閉じた。「二上山に月も傾き、夜は更けましたぞ、さあ宴もお開きにいたしませう」といった語気の歌だ。単なる自然諷詠でなく、宴会終了宣言の機能を持った歌だ。

ところで、土師道良については諸注釈書すべて「伝不詳」としてゐる。読み方はミチヨシとなつてゐるが、土屋文明の『私注』だけは「ミチナガと訓むべきか」と別案を付記してゐる。『寧楽遺文』<sup>なら</sup>には、天平宝字五年（七六一）正月、土師宿禰道長の名が見え、『続日本紀』にはこの道長が天応元年（七八一）六月、同族の土師宿禰古人とともに願ひ出て、土師から菅原に改姓することを許されてゐる。即ち菅原道真一族の祖先だ。道長は延暦九年（七九〇）には朝臣の姓を賜はり、菅原朝臣道長となつてゐる。古代では、繩麻呂

を繩万侶とも繩丸とも書き、安万侶を安麻呂とも書き、北里を北理とも書いてゐるやうに、人名表記は必ずしも一定の用字に固定されなかつたのであるから、道良・道長同一人物の可能性は高い。

とすると、道真のゆかりの人物が、大伴家持の部下として越中国庁に勤務してゐたわけだ。道真の母が大伴氏の出であることも偶然ながら興味深く、また越中常民の間で後世、天神信仰（菅原道真信仰）が根強かつたことも思ひ合はせ、興味いよいよ津々たるものがある。道真は『新撰萬葉集』も編集してゐるが、家持・道真といふ、藤原氏（政權独占担当者）と対立した古代名族兩人の冥々のつながりを思ふのである。

道良・道長同一人物説は『富山県史、通史編、古代』（昭和五十一年刊）の中で、私が初めて示した見解だが、その後、私とは別個に佐伯有清博士が『朝日新聞』の「研究ノート」欄で同様の見解を発表された。（その切抜を見失つたので、年月日不詳）。

実朝はこのやうにして萬葉を模倣し、習作しつつ、心ゆさぶるものに触れた折には、時には萬葉を凌ぐ絶唱を成し、『金槐和歌集』一卷をとどめ、二十八歳にして凶刃に倒れた

のであった。

(七) 沖の小島

箱根路をわが越えくれば伊豆の海や沖の小島に波の寄る見ゆ

この有名な一首には「箱根の山をうち出て見れば、波のよる小島あり、供の者に此うらの名はしるやとたづねしかば、伊豆のうみとなむ申すと答侍りしをききて」といふ比較的長い詞書きがあつて、題詠ではなく、二所詣での道での囑目即興の作だ。

これと比較されるのが『萬葉集』卷第十三の作者未詳歌、

逢坂を打ち出でて見れば淡海あふみの海白木綿花しらゆふに浪立ち渡る (三三三八)

だ。おそらく、風の強い日で、日ごろは穏やかな琵琶湖の湖面に白波がたちしきつてゐたのだ。風があるから遠景も近々と鮮明に見える。その強い印象がこの一首を太く貫いてゐる。両首の優劣をめぐって伊藤左千夫と長塚節が論争した。節は、実朝の作はきちんとし

てゐるが萬葉の逢坂は茫漠としてゐると評し、左千夫は全く反対の評価を下した。

たしかに、『萬葉集』の歌が太く、ずばりと歌ひおろしてゐるのに対して、実朝の歌は「伊豆の海や」と「や」を入れて多少やさしくなつてゐる。ただ萬葉の歌は、白木綿花のやうに立つ波がどこからどこへ立ち渡つてゐるのか、当然沖から岸を打ちつけてゐるのであらうが、表現としては不明だ。その点、実朝の歌は、沖の小島に向かつて波が集中してゆく。長塚節はこれをきちんとしてゐると評したのであらう。その遠い一点への集中に、実は実朝の心の姿が映し出されてゐる。調べの強さといふ点では萬葉に劣るこの歌に不思議な魅力があるのはそのためであらう。

左千夫は、実朝の歌を改作した試案として「箱根山霞晴れくるそはち岨路より伊豆の小島に波のよるみゆ」を示し、「調子もいくらか緊まつたつもり、模倣の点も少なくなつたと思ふけれど、とてもよい歌とはならぬ」と手厳しい。しかし、左千夫の改作は道具立てが多く（富山方言でいふと「五百立て」みたいで）、ごてごてとして原歌よりも遙かに劣つた作だ。

「わが越えくれば」の「我」を左千夫は不要としたけれど、実朝にとってこの場合

「我」は欠くことのできぬ大切な語であつた。左千夫は「沖」も不要と批判したが、遠い一点を表現するため、これも重要な語だ。「や」を入れて「伊豆の海や」とした初句の詠嘆も、左千夫のごてごてした改作と比較してみると、この詠嘆が一首を単純化するため必要なのだと気づく。単純であるからこそ「沖の小島」への一点集中ができるのだ。

最後に、伊豆の海を詠じた川出麻須美の上京の車中詠を二首引いておく。

山畑に橋ありてをちかたにあなすがすがし伊豆の海見ゆ

沖つべに日は照りながら伊豆の海は大きな山の蔭に暮れたり

(八) 二国かけて中にたゆたふ

又の年、二所へ参りたりし時、箱根のみうみを見てよみ侍る歌

たまくしげ箱根のみうみけれあれや二国ふたかけてなかにたゆたふ

箱根の芦の湖が駿河・相模両国にまたがってゐることを、「けけれあれや」（何か心があつてのことだらうか）といふかつた歌。しかも静止してゐるのでなく、たゆたひ、動揺してゐる。実朝の政治的立場、その懊悩を偲ばせる沈痛な歌だ。擬人法などといふ技巧ではなく、外界がおのづから作者の心を映し出したのだ。

「けけれ」は「こころ」の東国訛りで、『古今和歌集』収載の東歌あづまに「かひがねをさやにも見しがけれなく横ほりふせるさやの中山」と歌はれてゐる。その語を取って活用した。東国居住の実朝が東国の箱根の水海を東国方言で歌った、地方色のにじみ出た歌だ。

『萬葉集』には、高市黒人の旅の歌に、



妹も我も一つなれかも三河なる二見の道ゆ別れかねつる（3、二七六）

「妻も自分も一身体だからだらうか、三河の二見の道から別れようとしても別れにくいことだ」の意だが、一・三・二の数字を弄んでの言語遊戯で、切実な感情のかけらもない。実朝の歌は一つの湖が二つの国の間にたゆたってゐることを歌つても、ただちに、やりどころない心情の告白として迫る力を持つてゐる。尊敬すべき『萬葉集』にも、こんなくだらぬ歌もまじつてゐるといふことも知っておいていい。作者高市黒人は旅の寂寥感沁みとほるやうな、すぐれた短歌をいくつも残した注目すべき歌人だが、その黒人にこんな駄作もあるのだ。

(九) 一つ松

物まうでし侍りし時、磯のほとりに松一本有しを見てよめる

梓弓あづさゆみいそべに立てる一つ松あなつれづれげ友なしにして

実朝の孤独を思はせる歌だ。友なしに立つ一つ松に己れの姿を見出でて実朝は「あなつれづれげ」と嘆息せずにはをれなかつたのだ。『萬葉集』大伴旅人の歌に、

君がため醸かみし待ち酒安の野にひとりや飲まむ友なしにして(4、五五八)

草香江の入江にあさる蘆わしたう鶴のあなたづたづし友なしにして(4、五七五)

「友なしにして」を結句に据ゑた二例だ。また遣新羅使一行が口誦した古歌(丹比大夫の亡妻悽愴歌)

鶴が鳴き葦辺をさして飛びわたるあなたづたづし独りさ寝れば（15、三六二六）

この「あなたづたづし」（ああ、たどたどしく、おぼつかないことだ）を四句目に据ゑる詠法に学んで、実朝は「あなつれづれげ」と詠んだのであらう。しかし形容詞終止形の「たづたづし」の力ある切り口に対して「つれづれげ」は弱い。

江戸時代の僧良寛も一つ松を歌ってゐる。

岩むろの 田中に立てる ひとつ松あはれ 一つ松 濡れてを立てり 笠かさましを  
一つ松あはれ

長歌といふよりも、旋頭歌に更に七音一句を添へた変体旋頭歌といった方がよいであらう。良寛のこの歌の手本になったのは、倭建命（日本武尊）御歌と伝誦された記紀歌謡だ。疲れた足を引き引き、尾津の一つ松のもとにたどりつかれたとき、ずっと以前中食の際、「そこに忘れたましひ御刀、失せずてなほありき、ここに御歌よみしたまひしく」と前置きして、

尾張に 直ただに向へる 尾津の埼なる 一つ松あせを 一つ松 人にありせば 大刀佩  
けましを 衣着きよせましを 一つ松あせを (古事記)

尾張に 直に向へる 一つ松あはれ 一つ松 人にありせば 衣着せましを 大刀佩  
けましを (日本書紀)

良寛の歌は『書紀』の歌とよく似てゐるが、「笠かさましを」だけで、『書紀』のやうに『衣着せましを、大刀佩けましを』と疊みかけてゆくリズムが失はれてゐる。『古事記』の歌は「一つ松あせを」が反復され、『書紀』の歌よりも一層声調豊かで美しい。

古代叙事詩的物語に抒情詩的節奏を添へ、これを美しく力強く、悲しく節づけてゐるのが記紀の一つ松、最後まで孤独なまま打ち沈んでゐるのが実朝の一つ松、濡れて立つてゐるけれども、近在の童が笠を持って来てくれさうな好々爺的な独り住まひが良寛の一つ松だ。最後に川出麻須美、明治期の「太平洋」二十一首から一首を引いておく。

枝そげしひとつ松あはれこの海にいで入る月を見つつくらすか

これは枝の引き裂かれた凄絶な一つ松だ。

(十) 紅の千入のまふり

山の端に日の入るを見てよめる

くれなゐの千入ちしほのまふり山の端に日の入る時の空にぞありける

山の端を真つ赤に染めた落日の夕映。それを真正面から「くれなゐの千入のまふり」と詠み据ゑた。「の如し」ではなく、そのものずばりなのだ。いくたびも、いくたびも、千たびも紅を振り出して染めた色が「くれなゐの千入のまふり」だ。

「萬葉集」遣新羅使が晩秋の対馬の山を見て「竹敷たかしきのうへかた山は紅の八入やしほの色になりけるかも」(15、三七〇三)と詠んでゐる。深紅の紅葉を「くれなゐの八入」と表現したのだが、実朝はこれを学びつつ、八入を千入に深め、この語を第一句・第二句に打ち出し

たのだ。やはり『萬葉集』に「くれなゐの濃染めのころも色深く染みにしかばか忘れかね  
つる」(11、二六二四)とある。第一・第二句に「紅の濃染めの衣」と打ち出した点は似て  
ゐるが、下半は全く違った趣の恋の歌だ。

夕焼空を「千入」と表現したとき、実朝にはおそらく「血潮」の連想があつたらう。内  
紛また内紛で、源氏の重臣たちは次々殺されていった。兄頼家も惨殺された。その凶刃が  
自分に向かつてくることも実朝は予感してゐた。夕焼空はそのまま血に彩られてゐたの  
だ。「今夜の月夜明らけくこそ」のやうな期待に満ちた夕映でなく、沈痛悲惨な血の夕映  
だったのだ。「ぞありける」の結びは『萬葉集』には比較的少ない。遣新羅使が妻と別れ  
て出発した時「妹とありし時はあれども別れては衣手寒きものにぞありける」(15、三五九  
一)と詠んでゐるが、この結び方はやや似てゐる。しかし、そんな部分的な類似などどう  
でもいい。ここに萬葉を突き抜けた鎌倉の歌人が、まっ赤な夕空を背にして黒々とそば立  
つてゐるのだ。

(二) 海人の藻塩火

浜へ出たりしに海士の藻塩火を見て

いつもかく寂しきものか葦の屋に焚きすさびたる海人の藻塩火

漁夫の焚いた藻塩火が勢ひ衰へ、燃え細ってゆくのを見て、「いつもこんなさびしいものか」と詠嘆した。芭蕉の「海士の屋は小海老にまじるいとどかな」(注、イトドはコホロギの一種)がふと連想される作である。この一首、(恐らくは実朝自身の作歌意図をも超えて)、海人の辛酸労苦の生活をしみじみと思はせる不思議な力を持つ、稀有の作である。また、はるか後代の明治天皇の御製「すなどりは子らにゆづりて蘆の屋に網すくおきなあはれ老いたり」(漁翁・40)も連想されるのである。

明治四十年代、細々と海に暮らす人々の上をしきりに歌ったのは川出麻須美であった。

「島の上の城あとに立てば海青く葉びろ芒の吹きみだれたり」に始まる「篠島」十首連作

中、

なつかしき島のみは提灯もち我呼びに來ぬさかもりせむと

磯浪のこともとゆすり戸の隙ひまゆ吹きこむしぶきにゆらぐかんでら

髪かみしろきおんな髪かみいたまし男おとこさびかち棍かちひくまねびて舟唄うたふ

ひとり子をいくさに死なせ老いの身の悲しき心はらすといふか

ひな人はまこといぢらし瓜むきて大きなるままに我にすすむる

提灯借りとちん唄うたみち來れば海くらく伊良湖いらぶが崎も見えわかずけり

と、日露戦争に一人息子を戦死させた老海女の悲しみを織りまじへつつ、「なつかしき島  
のあま」を歌つてゐる。間近に潮騒しほざわとどろき、戸の隙間から浪のしぶきが吹きこみ、かん  
てら（石油ランプ）が危うげに揺れてゐる、わびしい漁夫の住まひがその舞台だ。

暴風の夜、危険な海岸をさすらひ歩いた時の詩「細谷村」には「あめ まじりに ふき  
つくる かぜ すさまじく」「すげがさ も ちぎれ て とび さう だった」「一面に  
もえたつ 険悪なる うなばらは、 おほ琴の騒音を たてて、 あかつぽい あわが



なぎさに はしって むた」と記し、同じ時の連作短歌「太平洋」二十一首中、「をやみなくい注ぐ水に海原の胸あふるれかひびきのかなしき」につづけて、

この海に住まへる子らはかかる夜いづくの浦にやすいすらむか（注、やすいは安眠）  
なつかしのあまらにまじり浦々をめぐりて我世をへましものを

と歌ひ、「枝そげし一つ松あはれこの海にいでいる月を見つづくらすか」（前項にも引用）に続けてゆく。ここでも「なつかしのあまら」と歌ひ、その海人たちにまじり、海人たちと生涯を共にしたいとまで高唱してゐる。

「航海」二十七首連作中では、「酔ひし人むらがり出でてほめそやす池なす内海見るもうるさし」と、観光地的風景と観光客の態度に眉をしかめ、この歌に続けて、

さ夜ふけて風ふく海にみだれゐるこれのあま船神護りたまへ

と、漁船の安全を熱禱し、名も無き辛勞漁民のため切念し、更に「濃き水をゆたに湛へてとこしへにゆらめく海よわれは泣かゆも」と歌ひ添へてゐる。これら麻須美、明治期の歌

を、鎌倉時代の実朝の藻塩火の歌と照應させて味誦するのである。(麻須美の「これのあま船神護りたまへ」と歌った切実なしらべは、実朝が民のため止雨を祈念して「八大龍王雨やめたまへ」と歌った一首を想起させるものがある)。

麻須美を筆に費したが、実朝に戻らう。海人の藻塩火はまことにわびしいが、実朝はこのやうなわびしきものに心をとめ、わびしき者の境涯に深く心をそそぐ人であった。腰曲がり、杖を力に辛うじて歩いて来た老いたる朽法師くちほしを憐み、人々に命じて「老」をテーマにした歌を作らせ、みづからも、

われ幾そ見し世のことを思ひ出でつ明くるほどなき夜の寝覚に

思ひ出でて夜はすがらに音ねをぞ泣くありしむかしの世々のふること

なかなかに老いは呆ばれても忘れなでなかむかしをいと偲おもふらむ

道遠し腰はふたへに屈かまれり杖にすがりてぞここまでも来る

さりともと思ふものから日を経てはしだいしだいに弱る悲しさ

と、朽法師になり替って、俗語をもまじへた異色の五首連作歌を詠み、孤兒の泣くのを見て「いとほしや見るに涙もとどまらず親もなき子の母を尋ねる」と共に泣き、「乳房吸ふまだいとけなきみどり子とともに泣きぬる年の暮かな」と年の瀬の庶民の悲哀を歌ひ、鳥獸に対して、「ものいはぬ四方の獸すらだにもあはれなるかなや親の子を思ふ」と獸類親子の情に感動し、俎板まなの上に「あらぬさまに」切り裂かれた雁を見て、「あはれなり雲居のよそにゆく雁かりもかかる姿になりぬと思へば」と嘆息し、草木に対しても、「散り残る岸の山吹春ふかみこのひと枝をあはれと言はなむ」と散り残る一枝の花のあはれを歌ひ、「わづかに残れる」萩の花が、月が出てから見ると、「見えざりしかば」、

萩の花暮々までもありつるが月出でて見るになきがはかなさ

と、しみじみ詠嘆する人であった。

芦の屋に焚き捨てられた細々とした火は、実朝の心に転火して燃え、その火はまた、これを読む後代の読者われらの心に燃え移り、いつまでも消えぬのである。『金槐和歌集』一卷は実朝の心にくすぶりつづけた「火」の歌集である。その火は燠あきとなって、八百年後

の今なほ日本人の魂に深い感銘を与へつづけてゐるのである。

(『第五高志のうた』平成元。ただし「十一」は追加)

## 2、良寛の歌と萬葉集

### (一) 良寛と子規系歌人

正岡子規が和歌革新の火の手を赤々と掲げたとき、その火風ひみぜにはたはたと靡かせた旗指物には、墨痕淋漓ぼつこんりり「源実朝」「田安宗武むねたけ」「平賀元義もとよし」「橘曙あけみ覧」と大書されてゐた。萬葉調歌人として、この四人を強く押し立てたのであつた。

子規は「良寛」の旗は掲げなかつた。『良寛歌集』を一見して、「歌集の初にある筆蹟を見るに絶倫なり。歌は書に劣れども萬葉に学んで俗氣無し」として、その作二首を引用し、「所謂いはゆる歌人に勝ること万々」(明治三三『ホトトギス』四—三「病床読書記」)程度の讃辞を良寛に呈しただけであつた。

子規の門人伊藤左千夫は「猶、予の加へたる僧良寛」と、萬葉調歌人の系譜に良寛を加

へ、歌論「田安宗武の歌と僧良寛の歌」を明治四十年五月、六月の『日本』に連載し、強く良寛の歌を推した。

左千夫の門人齋藤茂吉は良寛の歌に惚れこみ、大正三年「良寛和歌集私鈔」を『アララギ』に連載し、のち「金槐集私鈔」と合せ、単行本『短歌私鈔』にまとめて刊行した。茂吉は「予は良寛を好む」「予の好きで好きでならないところである」「堪らなく好い」「涙を流して恭敬する」等、感嘆激賞の辞を頻発して良寛を讃へた。

なほ、茂吉の論敵であった三井甲之は、茂吉の『短歌私鈔』を「よい著書」と評価し、「氏の詩人的素質は序文の書きやうにも現れて居る」と讃めてゐる。（『日本及日本人』大正五年七月一日号）。両者は喧嘩ばかりしてゐたのではない。よきところはお互ひに素直に讃めあつてゐたのである。

実朝の萬葉調の歌は天地も動かすばかりの力作であるが、そのやうな作にまじつて、古今・新古今に学び、これを模倣した作が頻々と出てくる。これに対して、徹頭徹尾、萬葉調で作歌したのが良寛であった。然るに、子規が良寛を旗印に掲げなかつたのはどうしてであらうか。「山かげの岩間を伝ふ苔水のかすかにわれはすみわたるかも」といふやうな

隠棲的な良寛の生き方が、重い病気に臥しながらも、激動また激動、活動的現実的、「無疲倦不断防護戦闘意志」そのもののやうであつた子規と、呼吸が合はなかつたのであらうか。これは興味深い問題である。(子規は、西行をもあまり評価しなかつた)。

子規の後継者のうち、左千夫・茂吉らは前述のやうに良寛を絶讃したが、『アララギ』と対立した『アカネ』諸同人(三井甲之・川出麻須美等)は、殆ど良寛を取り上げなかつた。これまた興味深い問題である。

良寛の歌「秋の日にひかりかがやくすすきの穂この高屋にのぼりて見れば」は、光りかがやき、一面に靡くすすき原の光景、眼下に見ゆる如く活写されてゐて、名吟であるが、難点は第三句「すすきの穂」が弱いことであらう。この大観を結ぶ力がいささか不足してゐると私には思はれる。(この歌、上句下句転置されてゐるので、第三句は一首全体の重量をしっかりと受け止めねばならぬ要の<sup>かたみ</sup>ところである)。

しかし、同じ良寛の三句切れの歌でも、「いついつと待ちにし人は来たり来たり今はあひ見て何か思はむ」は力が漲つてゐる。「来たり来たり」と、激しい息づかひさながらに

同語を反復、貞心尼の来訪を迎へた時のあふるる喜びをうちつけに歌ったのである。まさに茂吉の評したやうに「堪らなく好い」。このやうな名吟も良寛はおびただしく残した。以下、良寛の歌の一端を、『萬葉集』の歌に対比させながら見てゆきたい。

(注。この歌、異本では、第三句が「来たりけり」あるいは「来たりたり」となっている。これでは息が抜けて、歌が弱くなる。「来たり来たり」と同語を疊みかけたところにこそ、あふるる感情そのままの魅力がある)。

## (二) まりつき歌と双六の歌

### 良寛の手まりつきの歌

つきてみよひふみよいむなやこのとを十とをさめてまた始まるを

まことに天真爛漫、一二三四五六七八九十とつき、十と納めてまた一から始まってゆく球つきのリズムが、歌のしらべと一つに溶けて天地に拡がってゆく。

数字をいくつも列ねたといふ点で思ひ合はされるのは『萬葉集』卷第十六の長奥麻呂

一二の目のみにはあらず五六三四さへありけりすごろくのさえ(二三八二七)

これは双六(すいろく)のサイ(サイコロ)を詠んだ、おもしろい歌だ。数字を並べた点では良寛の歌と似てゐるが、良寛が一から十まで順番に（毬つきの時の唱へ方そのままに）淀みなく詠んでゐるのに対して、奥麻呂は一二から五六へ飛び、また三四に戻るといったぐあひに（これは双六のサイを振る時、突如としてどの数字が出てくるかわからぬ、その実際の呼吸に即して）軽妙できびきびとしてゐる。大人同士の活気ある競戯と、童とともに春霞に溶けこむやうな遊戯、それぞれに味はひある歌だ。

(三) 月よみの光

月よみの光を待ちて帰りませ山路は栗のいがの多きに



電灯の無かった時代の闇夜の暗さが、どんなに濃く、深く、恐ろしいものであったか、今の人にはなかなか理解してもらへないであらう。昔の人にとって、月は単なる景物であるよりも、夜の闇を照らす大きな恵みであった。その月の光を待ってお帰りなさい、山道は栗のいが多くて危ないですよ、と帰りゆく友をひきとどめた歌だ。この良寛歌に思ひ合せられる萬葉の歌、

月よみの光にいませあしひきの山来隔りて遠からなくに（4、六七〇）

闇の夜は道たづたづし月待ちていませわが背子そのまにも見む（4、七〇九）

前者は「月の光を頼りにおいでなさい。山を隔てて遠いといふわけではありませんもの」と来訪を待ちわびる歌。後者は「闇の夜は道がおぼつかない。月の出を待ってお帰りなさい。わがいとしい人よ。その間だけでも、よけいあなたと一緒に居たいのです」と、少女の熱烈な慕情を歌った歌だ。内容的には良寛の歌と同じではないが、言葉のつかひ方はどこか似た歌だ。

良寛の歌には三句切れが多く、そのため、いささか調べの弱くなる傾向があることは前

述したが、(また良寛の長歌も、五七調がいつのまにか七五調に移ってゆく傾向があつて、迫力を欠くことが少なくないが)、しかし、この一首は、三句切れの欠陥を少しも感じさせず、友に対する深い思ひやりが、暗い山路に散乱してゐる栗のいがといふ具体的なものによつて、ひしひしと読む者の心を打つ。良寛歌中の佳什だ。

『古事記』かむのいらつめ 輕郎女の「夏草の相寝あひねの浜かきの蛎貝かきに足踏ますな明かして通れ」を連想させる。夏草の茂つた浜を歩いてゐて、蛎貝の殻を踏みつけて負傷した、その切傷の痛かつた体験が「そんな目にあひなさいますな」と、相手を思ふ心となつて、切々と歌はれてゐる。(相寝の浜といふ地名にも、甘美な思ひ出と、そのため世間の非難にさらされ、窮地に追ひ込まれた痛恨とがこめられてゐる)。良寛も、栗のいがを踏みつけた痛さを切実に思ひ出して、このやうに歌つたのであらう。

萬葉の「月よみの光にいませ」までは清らかで美しいが、これに続く「山来隔りて遠からなくに」はよけいな言ひまはしで、「無くもがな」の感じだ。これに対して、良寛の「山路は栗のいがの多きに」の心情はまことに清純無垢である。

萬葉の「闇の夜は道たづたづし」の一首は激しい恋情噴き激たぎつ名吟で、これは良寛の歌

よりも迫力がある。

(四) 月夜の踊

風は清し月はさやけしいざともに踊り明かさむ老わいのなごりに  
いざ歌へわれ立ち舞はむぬば玉のこよひの月にいねらるべしや

良寛の盆踊りの歌だ。「風は清し。月はさやけし。」「いざ歌へ。われ立ち舞はむ。」と一  
句目でも二句目でも切れ、いざ共に踊り明かさうと歌ひ、こんなよい月夜にとても寝てな  
んかをられるものかと、心ときめかせてゐる。近在の人々とともに生きた良寛坊の無邪気  
な姿が揺れをどってゐる。良寛最上の作であらう。

『萬葉集』の歌、

月夜つくよよし川音清しいざここに行くも行かぬも遊あそびてゆかむ(4、五七二)

大伴旅人たびと上京に際し、送別の宴を張った時の大伴四綱よつなの作だ。「月夜よし。川音清し。」

と一句目でも二句目でも、弾むやうな調子で切れ、「いざ」と下の句を呼び起こす勢ひは、そのまま良寛の歌に再現され、萬葉歌が良寛歌に乗り移ったかのやうだ。しかし、四綱の歌にはたくましい活力が溢れてゐる。これに対して良寛の歌は「踊り明かさむ」と四句目でも切れ、「老のなごりに」としみじみ言ひ添へ、いかにも人生の晩年にかかった人の心境が歌の調べにも滲み出てゐるやうで、あはれ深い。萬葉の壮年の歌、良寛の老年の歌として併せ味はひたい。

二首目の「寐寝らるべしや」は、『萬葉集』の「三輪山をしかも隠すか雲だにも情あらなも隠さふべしや」(1、一八)、「大和恋ひ寐の寝らえぬに心なくこの洲崎廻に鶴鳴くべしや」(1、七二)などの強い結句「べしや止め」に学んだものと思はれるが、「いざ歌へわれ立ち舞はむ」の如きは萬葉にも類例を見ぬ、異色、出色の表現といつてよいであらう。民謡の囃し詞などに学んで、これを萬葉調に活かしたのであらうか。(越中オワラ節の囃し詞「歌はれよ、わしやはやす」を思ひ出す。これを萬葉調にすれば、「いざ歌へわれ囃さむ」とならう)。

しかし、心ときめく盆踊りの輪に飛び込み、「いざ歌へ、われ立ち舞はむ」と歌ひなが

ら、忍び寄る老のせいであらうか。この良寛歌には何かさびしいけはひが漂つてゐる。この二首のあとに今一首「もろともに踊りあかしぬ秋の夜を身にいたつきのゐるも知らず」と歌ひ添へられ、三首連作となつてゐる。身に病氣のあることも知らずに踊りあかしたといふのである。良寛はおそらく近づく死期を悟つてゐたのであらう。

私事にわたるが、私の弟は一昨年病死した。病重き床から私に宛てた葉書の末尾に良寛のこの歌「身にいたつきのゐるも知らずて」の一首を書きつけて寄こした。それが絶筆となつた。そのやうな事情もあつて、この一連の歌は私には忘れ難いのである。

### (五) 逢ひたきものを

あづさ弓春になりなば草の庵いほをとく問ひてませ逢ひたきものを

「春になったら、私の庵を尋ねて来て下さい。逢ひたくてたまらぬものを」と貞心尼に贈つた歌だ。老良寛の若い貞心尼に寄せた心のとときめきがさながら偲ばれて、うれしい歌だ。「あづさ弓」の枕詞にも、射る矢の如き良寛の心の急ぎと張りが思はれる。特に「逢

ひたきものを」は斎藤茂吉が「古今独歩」と絶讃した結句だ。時に良寛七十三歳、貞心尼三十三歳であった。

第四句を「とく問ひてまし、あるいは「とく出て来ませ」とした異本もあるが、歌としては「とく問ひてませ」がずばぬけて優れてゐる。なほ「問ひてまし」とすると、自分が貞心尼の庵を尋ねてゆくことになって、意味が違ってくる。

「逢ひたきものを」といふ語は『萬葉集』にはない。第一「逢ひたし」といふ語からして萬葉時代にはなかった。まさに良寛の魂をゆさぶって噴き上げて来た独創的用法だ。

結句を「ものを」で止めた例となると『萬葉集』にも多く、四十例ばかりあるが、そのうち「ましものを」「といふものを」「べきものを」などは同じ「ものを止め」でもやや性格が違ってゐると思はれる。

良寛の「逢ひたきものを」に似た感じを与へる表現としては「恋しきものを」三例、「うれしきものを」一例がある。

しかし、良寛のこの一首ほど、こまやかで、清純な愛情の自然流露した歌は『萬葉集』にもない。良寛は、萬葉に習ひ、萬葉にまねび、調べは一般に萬葉に比して弱いが、時に

は、萬葉にもない「境涯」の歌、純真無垢の人柄そのもののやうな歌を成したのであつた。

『萬葉集』にただ一例の「うれしきものを」の歌といふのは

何すとか君を厭はむ秋萩のその初花はつのうれしきものを（10、二二七三）

これは少女のうひうひしい心の揺れるやうな純真な一首で、良寛の「逢ひたきものを」と好一对である。もつと後世の類例を一つ挙げると、川出麻須美、明治期の作、

相見つつ語れば胸のなごみゆきたたよふごとくもたぬしきものを

「漂ふごとくも楽しきものを」とは、まさに恋人と相語る喜びの極致であらう。萬葉・良寛の歌と並べて私の愛誦する歌である。

（『秋桜』七号 平成二）

### 3 知られざる萬葉調歌人五十嵐篤好

かつて富山県礪波地方の某旧家の古文書を調査してゐたとき、文箱の中から一枚の短冊が出て来た。「立山をよめる」と題して、

常夏にみ雪つもりて天そそり立てるを見れば息づかしもよ

篤好

と認められてゐた。五十嵐篤好直筆の詠草だ。立山を讚嘆する心情の深々と息づいてゐるこの一首を、私は口の中でくりかへしながら、しばし調査の手をとどめて、その力強い水茎の跡に見とれたことであつた。

篤好は寛政二年（一七九〇）（寛政五年ともいふ）越中礪波郡内島村（現在富山県高岡市）在住の十村役五十嵐之義の子として生れた。通称を小豊次といひ、また臥牛齋・雉岡・蟹瀬などと号した。文化八年（一八一二）十村役に就任。（十村役といふのは加賀藩の制度で、藩は農民中、実力ある家柄の者を選任し、農政の末端責任者として村政を担当させ



た。他藩の大庄屋に相当。いはば村長である。篤好は農政にすぐれた手腕を発揮し、舟倉野用水開削などの功労があつたが、文政二年（一八一九）藩の十村断獄事件に連座して二十八名の十村役とともに罰せられ、能登島に流された。（これは藩が政策的要求から罪もなき十村たちを一斉に処罰した事件）。父の之義も連座して投獄され、牢死した。

篤好は配所住まひ十カ月に許されたが、後々まで能登島配流の苦しみを回想し、「波かかる袖ほしわびて渚辺に泣きて暮らしし昔思ほゆ」などと述懐してゐる。しかし能登島生活は篤好の生涯を大きく変へた。この島で伊夜比咩神社の神官舟木氏の蔵書を読み、その影響で国学に志し、帰村後、本居大平や富士谷御杖に学び、特に御杖の言霊学からは深い感化を受けたといふ。

篤好は十村として農民のため心を砕き、天保八年（一八三七）農民の救済を計つたことが藩法に触れて罰せられ、安政五年（一八五八）にも備後国の海養亘といふ人を自宅に泊め、村民に木綿製法を教へ、その生計を豊かにしようとしたが、他国人を泊めたことが藩の掟に抵触し、謹慎を命ぜられた。三度目の処罰であつた。その時、「ますらをはかくぞ世の常、君の為世の為と思ふ心やまめや」とひそかに述懐し、三年後の文久元年（一八六

一) 没した。七十歳前後であつた。

篤好には国学・国文学・歌学・書道・農政などに関し多数の著書がある。歌集は『ふすしのや詠草(臥牛屋詠草)』と題し、全十二冊で、文政三年から没年の文久元年まで四十二年間の作(短歌五六八三首、長歌六三首、旋頭歌・仏足石体歌・今様など若干、文六九篇、祝詞二篇)を収める。その手稿本(ただし篤好の子政雄の浄写した部分若干を含む)は富山県立図書館所蔵の貴重書である。

篤好の父之義(通称孫作)も歌を好み、文化十二年頃作成した舟倉野用水絵図には、十三首の歌を詞書とともに細字で書き入れてゐる。このやうな地図に歌を記入するなど他に例のないことであらう。篤好の母居子も歌人で、夫之義が俱利伽羅峠を越えて旅立った時、「かきくらしいたくな降りそ我背子わがせこの越えゆく山の峯の白雪」と詠んでゐる。堂々たる一首である。このやうな和歌愛好の家庭に育つた上、国学を学び古典に親しみ、一層歌道にも心を入れ、磨きをかけたのであらう。

篤好は国学者として越中第一であつたが、歌人としても第一級であつた。越中近世歌人としては、前田利郷・内山逸峰・自仙院・佐藤月窓・弘中重義・前田利保らが著名である

が、いづれもその歌風は近世調である。篤好にも近世調の作は多いが、『萬葉集』から直接学び取った萬葉調をこれに加味し、他の歌人たちの追隨を許さぬ雄渾な作、真情直叙の佳什を数々残した。

自然の風景を力強く詠じた萬葉ぶりの作例の一端を左に示す。

入日かげにほふ海原見渡せば雲居を帰るあまのつり舟

はつかなる小笹をささがうれにおく霜の解くるしづくに朝日さす見ゆ

入日さす二上山にぬじ（虹）立てば雨ぞ降るとふ今夜こよひ降らんか

春深み緑くれなみさまさまに移らふ水に鮎あゆ子さばしる

川の辺の木の下さわぎをとめらが袖吹きかへす橋の夕風

神とけの光るみそらの夕風につらも乱れて雁鳴き渡る

見渡せば水鳥さわぎ見かへればはららに浮けりあまのつり舟

手取川せ勢ぎりの水もひびきあひて鳴くひぐらしの声のさやけさ

深山みより出で来る水のいゆきあひて争ひ走る濁澄にじりすみの瀬（注、濁澄は地名）

夕日さす梢にすがり鳴く蟬の声しきるなり秋近みかも

雄松山やま風寒み小男鹿の鳴くなるかたに月かたぶきぬ

一誦実に壮快である。これらの作にあふれる明快な活力、事実を事実のまま、感じた所を感じたまま、直線的に詠み下す手法は目を見張らせるものがある。和歌革新に全力投球した正岡子規の作風を思はせる新鮮さがある。

人間関係の歌でも、真情あふれ、自由自在に詞を駆使してゐる。

雁がねの翼あれこそ君があたりききて飛びゆけただ時のまに

旅行きもししらぬ君ぞ白山の山下風はこころして吹け

老いぬれば吾はくりごとすおほろかに思ひてゆくな父母をおきて

かしこけど我は言挙げす飛ぶ鳥の飛び立つ心しづめあへねば

おぼろ夜のほのかに見てしおもかげをいつ秋の夜のさやかに見む

海山はへなりたりとも魂合はば逢はむと思ひし心たがひぬ

等、心を打つものがある。二首目は萬葉、坂上郎女が越中国へ単身赴任する甥大伴家持に贈った「道のなか国つ御神みかみは旅行きもししらぬ君を恵みたまはな」と、後鳥羽上皇『遠島御百首』の「われこそは新島守にひしまもりよ隱岐の海の荒き波風心して吹け」の双方からの影響を思はせるが、単なる模倣でなく、旅行く友に対する真情をにじませてゐる。シの音が五回、この一首に強い律動を与へてゐる。

三首目も萬葉、聖武天皇御製「ますらをの行くといふ道ぞおほろかに思ひて行くなますらをのとも」と、防人歌「大君のみこと畏かしこみ磯に触り海原渡る父母をおきて」の両首から撰取しながらも、遊学の途につく若者を励ました真情こもる一首である。

天保九年、四十八歳の時、愛妻を失ひ、数々の哀傷歌を作つてゐる。その若干を示す。

我妹子がかたみと見れどむすぼれし思ひはとけずつげの小櫛よ

夜を寒みわらいねわびぬなれだにもあはれとはいへ妹がこまくら

我妹子がはかなきものといひたりし霜はことしの秋もおきけり

笛ふけば昔おもほゆ琴ひけば人ぞ恋しきすべなきまでに

哀感惻々と迫るものがある。

我が門のよもぎむぐらも払ひてきいざ入り来ませ月ひとをとこ

月を擬人的に「月人男」と呼ぶ例は『萬葉集』にすでに見えるが、その月に向かって、門の雑草は取払ってしまった、「いざ入り来ませ」と親しげに呼びかけたのは篤好の境地である。近代短歌がこのやうな、あどけない感情を失ったことは残念である。

をしと思ふ心に似たり蜘蛛の糸の散りゆく花をしばしとどめつ

桜の花びらがクモの糸にかかっているのを見ての詠である。安政五年、篤好が好意をもつて宿泊させた備後の人が藩命で領外へ追放された直後の作。この事件で篤好が罰せられたことは前述した。「をしと思ふ心」にはそのやうな、自分から遠ざけられた人を惜しむ心情が自ら滲み出てるのであらう。「しばしとどめつ」といふ強い結句には篤好内心の挫折感が響いてゐるやうに思はれる。

おほけなく祈る心を天地の神もうづなひ雨やめたまへ

立山ゆ白根にわたり珠洲すずの海に雲居す棚ずびき雨も給はね

前者は天保六年水害の折、止雨を祈念した歌。後者は嘉永四年の雨乞ひの歌。『萬葉集』では家持が「……足引の山のたをりに、この見ゆる天の白雲、わたつみの沖つ宮居に、立ち渡り、との曇りあひて、雨も賜はね」と雨乞ひの長歌を作つてゐる。篤好のこの歌は家持の歌を下敷きにしながら、立山・白根（白山）・珠洲の海と越中・加賀・能登の代表的地名を具体的に詠み入れ、三州山海の大観をバノラマ的に見せてゐる。

ますらをのをたけびしつっ射る弓にさばへなす神かげもとどめず

射い初そめ式の歌。「さばへなす神」（蠅のやうに騒々しい悪神）が「影もとどめず」とは力強くさはやかである。ハツシと射立てた矢の音が聞こえてくるやうである。

我が園の梅咲きそめぬゆく年を惜しとやいはむ嬉しとやいはむ

篤好は毎年のやうに歳暮の歌を作つてゐるが、これは天保十二年の暮の述懐。『古今集』巻頭の「こそとやいはむ今年とやいはむ」は正岡子規が和歌革新の血祭にあげた理的遊戯の駄作だが、篤好の歌は『古今集』歌の調子に学びながら、理的遊戯でなく、人間心理の微妙な<sup>ひた</sup>鬩を歌つてゐる。

新しき曆のひもとときそめてむかふ日影ぞのどけかりける

弘化元年歳末のうらかな日、新年の曆を披いて、春を迎へようとする心の楽しい揺らぎを歌つたものである。古今調であつても、かくの如く真情流露した清新な作がある。

文政九年「萬葉なる七草の歌にならひて」と題して二首連作、

耳梨の山の山人やまづとと吾にくれてし花はなになに

女<sup>をみな</sup>へし菜種たんぼ<sup>すき</sup>鋤<sup>ひらやまよき</sup>の平山振おとぎり日車の花

山上憶良の七草の歌になつた作だが、この篤好の歌もおもしろい。ヤマノヤマビトヤマツトトと同音を反復してナニナニと結び、草名列挙の歌詞もいかにも楽しさうに躍動し



てゐる。近現代の歌人はとかくまじめになり過ぎて歌の世界を狭めてゐるが、真の和歌の世界はかくも広く、かくも楽しい面を持つてゐるのである。

篤好には動物に同情し共感した歌も多い。

鯨あはれ磯べにこやる鯨あはれ沖に住めこそかしこかりけれ

虫といへばぬかづき虫もかまきりもおのがさがおのがさちさち

一首目は浅瀬に乗りあげた鯨をあはれんだ歌。二首目は「虫といへば、首振り虫であらうとカマキリであらうと、すべて己が性さがのまま自然に自由に生き、それぞれ己れの生・己れの幸を楽しんでゐる」といったところであらう。虫の世界の背後には人間の世界がある。虫けら同然に扱はれた封建時代の農民とともに生きた篤好の心情がある。

そら眠りすとも許さじ狸々腹鼓うてわれ笛吹かむ

といふユーモラスで諷刺的な作もある。猿蟹合戦を歌つた愉快な七首連作もある。

篤好は「心」といふものを深く見つめた人であった。天保二年には、

我が心庭たづみにもあらなくにかきみだされてなど濁るらむ

我が心立山にしもあらなくに雲の上までなどそそるらむ

我が心よする波にもあらなくにうちくだけは立ちかへるらむ

など十三首。いづれも「我心……にもあらなくに……らむ」の形で、さまざまの角度から自分の心を歌ってゐる。天保九年には「ねられざりける夜、篤好が足手の神あらはれ出て心の神に恨み言ひけるは」と題して七十五句の長歌を作り、心が手足を酷使する非を責め、これに対して「心の神答へけらく」として三十九句の長歌を作り、自分の立てた志を変へるわけにはゆかぬと弁解してゐる。『萬葉集』には山上憶良の貧窮問答歌があるが、これは篤好自問自答の心身問答歌である。

立ちまへどゆくかたもなくさみだれにみだるる雲ぞわが心なる

くらげなすただよふ心いかにして作りかためむことはかりせよ

我が心いづちゆくらむころみにやりても見ばやかれがまにまに

我が心きぬにしあらねば幾しをりしをり染めても染まむともせず

等々、篤好はくりかへし「心」を詠じた。「思ひ」を詠じた作も多い。

『ふすしのや詠草』を見てゆくと、「ふと」「ふとよめる」「おもふ事ありて」「独りごと」などに題した作がしきりに目につくが、ここにも篤好が内的衝迫につき動かされて作歌し、風雅の遊びとしてではなく、己が心、己が思ひを歌ひ晴らさうとしてゐた姿勢がうかがはれるのである。『ふすしのや詠草』の歌数は『萬葉集』よりも多い。本稿で取りあげたのはその一端、大人物篤好のごく限られた一面である。

（『紫苑短歌』三六卷一号 昭和六三）



## 三 武人の歌——上杉謙信を中心に——

### (一) 上杉謙信の歌

今日はまづ、上杉謙信の歌のことをお話し申し上げたいと思ひます。上杉謙信は此頃テレビ（昭和四十四年・NHKテレビドラマ「天と地と」）で、非常に騒がれてをります。しかし謙信の武将といふ面だけが強調されてゐるやうに思ひますので、今日は、謙信が戦国時代の傑出した歌人であった点を中心に申上げたいと思ひます。

謙信が上洛したことはテレビにも出てをりましたが（謙信のその頃の名は長尾景虎）、京都へ二度上つてゐるのです。

第一回目は天文二十二年、西暦にして一五五三年ですね。その時に謙信は、関白の一條兼久かねひさとか、右大臣の西園寺公朝きんともとか、大納言公光きんみつなどを訪ねて、歌のことを色々と話したり、あるいは源氏物語など、国文学のことを談じあつてゐたのです。

その時、將軍足利義輝と歌の贈答をしました。これもテレビで出てをりましたが、その

時足利義輝が詠みました歌は

天地もたゞ一かたにお（を）さまれる君がためしや千代の初雪

ちようど天文二十二年の初雪の降った日で、今日見るやうに真白に輝いてゐる雪の中の印象を、天地もたゞ一つにをさまった。さういふめでたい君（天皇）のためし（例）を思ひ出させるやうに、あたり一面、真白な清浄な雪で埋まってゐると歌って、謙信に贈ったのです。それに対して謙信が答へた歌は

昔よりさだめし四方に立帰りお（を）さめさかふる千代の初雪

天下が治まってゐた昔に復古して、この天地四方が君によって統一され、栄えてゐる。さういふ時代をまざまざと見せてくれるやうに、美しい輝きを放つ初雪である、といふ歌ですね。

常識で考へますと、当時はまだ、いつ治まるか、全然治まるめどもつかない乱れた世の中であるのに、君の御光によって、天地がたゞ一つにをさまって、めでたく栄えてをる

といふ歌は、何となく間が抜けてゐるやうな感じさへするわけですが、しかし、この歌には二人ともかなり実感をこめてをります。

それはどうしてかと言ひますと、將軍の方では、自分の家来達、三好みよしとか松永とかいふものゝ為に、手も足も出なくなつて、非常に苦しい境遇に立ってゐる。

その時に謙信のやうな、正義感に燃える青年武將が、はるばる北陸からやつて来てくれて、自分を力づけてくれる。そのことに非常な力を得まして、この謙信を頼んで、天下を何とかして平和な世の中に返したい。いや、この謙信の顔を見れば、きつとそれが出来るであらうといふ希望、確信が腹の中から湧いて来た。その氣持が自おづからこもつて、かういふ歌になつたのだと思ひます。

しかしテレビでは、「天地もたゞ一方にお（を）さまれる君かためしや、千代の初雪」と、謙信が固めてくれたのであらうかといふ意味にとれるやうな、間違つた読み方をしてをりました。あれは読み違ひでして、「君がためしや」が正しいのです。

しかし、この場合將軍が、「君がためし」と言つてゐる「君」といふのは、決して謙信のことではなくて、天皇のことであると思ひます。日本の国が如何に乱れてをりました

も、朝廷を中心として、初めて日本は一つの国としての自覚を持つことが出来る。日本の国の元の姿に立ち返る、そのきざしをここに見つけたといふことでせう。足利將軍もこゝでは、清らかな気持、日本の古い伝統がそのままに息づいてゐるやうな気持で、この歌を作つてゐると思ひます。

それに対して答へた謙信の歌も、又何とかして自分も、及ばずながら力を尽して、戦国の世を元の平和な、天皇の御稜威みいづかひのもとに將軍がをり、その下に全国の武將が一つの秩序を形作つてゐた世の中に、返したいといふ気持が強く出てをります。そしてどちらの歌も、賀の歌、儀礼の歌として、なかなか立派な出来映えになつてゐると思ひます。

民俗学では、「予祝」といふ言葉を使ひます。「予め祝ふ」といふ意味ですね。この二人の歌にも、今は乱れてゐるけれども、平和な時代をぜひ持つて来させなければならぬといふ予祝の気持が、息づいてゐるやうに思ふのです。

永祿二年、一五五九年に、謙信は二度目の上洛をしてをります。その時、関白の近衛前嗣つぐの所へ、「ぜひ自分は和歌の懐紙と、それから『三智抄』といふ、歌の本があるさうだけれど、それをぜひ手に入れたいから世話をしてほしい。」といふ手紙を出してをりま



す。

さうすると近衛前嗣は、何とかして謙信の望みを叶へてやりたいと思つて、和歌の懐紙の方はすぐ届けてやったのですが、『三智抄』といふ歌の本については、近衛前嗣は知らなかつたのです。方々へ手を回しましたが、どうにも手に入らなかつた。その時奔走した西洞院時秀にしらのとういんの前嗣へ報告した手紙が残つてをります。

今朝、萩原芳礼、拜見せしめ候。即ち三智抄の儀、申し入れ候へば、さやうの歌書は御座無く候の由、仰せられ候。自然、他家に御座候哉や、御存知無く候。何の方をも御尋ねあるべく候の由、仰せられ候。尤も参り候ひて、申し入るべく候へども、此等の趣、萩原掃部助殿かみんのすけ、御達伝がたつたへあるべく候。

この手紙を見ますと、謙信がぜひともその本を手に入れたいといふ、熱意を持つてゐたことがよくわかります。かういふ風な歌に対する謙信の熱心さは、当時の公家を非常に驚かしました。田舎むなかの武将だと思つてゐたのに、えらく歌に熱心であるといふので、前嗣が智恩寺へ宛てた手紙の中にも、謙信のことを批評しまして、「歌道熱心の由、一入奇特ひとしほ」と言つて感服してをります。

謙信は京都に滞在したあと、やがて越後へ戻るのですが、その戻る時に当って、関白近衛前嗣の父、近衛植家たけいへが謙信に宛てた手紙には

先日、書状を以て申し候。相達し候哉や。久しく面談を遂げず候。先般御ゆかし候。近日帰国之由候。治定候やらん。一段御残多く存じ候。よつて約束申しつる詠歌大概一冊、悪筆を染め、これを参らせ候。尚々相応之儀、疎意あるべからず候。

と、非常に名残を惜しんでをります。そして、「あなたの望んでをられた『三智抄』といふ本が手に入らなかつた代りに私の書き写した『詠歌大概』、これも歌の作り方を書いた本ですが、これを贈呈致しませう。」といふわけで、別の歌学書を贈つてゐるのです。

その他にも謙信は、当時の一流の歌人であつた細川幽斎から、やはり歌の作り方について書いた本だと思ひますが、『和歌口伝』といふ本を贈られたりしてをります。

謙信の父であつた、長尾為景も歌が非常に好きであつて、自分の歌を覧覧（天皇が御覧になる）に供へたと伝へられてゐるくらゐで、父子ともに、歌に熱心だつたことがわかります。

それから謙信は、和歌だけでなく、連歌にも熱心でして、春日山の城中で、時々連歌の

会を開いてをります。

永祿七年（一五六四）に、関東へ攻め込んだ陣中の夢の中で、「さし向ふ山ははるかに水落ちて」といふ連歌の出だしの句を作り、そばにゐた連歌師の覚翁かくげうに、「かういふのを夢の中で作ったが、お前一つあとをつけろ」といふことで、自分の夢の句をもとにして、連歌の会を開いてをります。

歌に熱心な人になって来ますと、夢の中で歌を作ることがよくあります。特に夢の中で連歌の句を思ひつくといふのを、当時の人々は、これは人間の力ではなくて、神仏から授かった歌の言葉であるといふ風に感じまして、これをもとにした連歌を夢想連歌と言って特別扱ひしてをりました。

謙信もよほど歌に熱心だったからこそ、かういふ風に夢の中で、歌が出来たのであると思ひます。そして謙信は、夢の中で歌の言葉を得たことは、神仏の賜物である、自分の歌の道の守りであると考へたのでせう、その歌をお守り袋の中へ入れて、持ってゐたと伝へられてをります。

また謙信は軍歌をたくさん作ってをります。当時の軍歌といふのは現代と少し意味が違

ひます。戦の時の教訓、心得といったものを、ただ五・七・五・七・七の歌の形にしたものを、軍歌と言つてゐたやうです。

謙信の作つた軍歌は、謙信の死後の戦で焼けてしまった為に、ほとんど残つてゐないのですが、『北越軍談』といふ本に、十九首載せてあります。たとへば

大将は小智の芸を嗜たしなまず人数あつかふ道を知るべし

大将は色をこのまず花美をせず信と武道を忘るべからず

場中ばちゆうにて五度や十度の鎗やりよりも勝負の道を知るぞ剛しれも弼

敵国を切りしき民をはごくめば後おのづから治まると知れ

本当の文学とか、歌として批評する性質のものではありませんが、しかし言葉の調子はキビキビとしてをりまして、如何にも謙信らしいものが出てゐると思ひます。

謙信の相手であつた武田信玄にも、有名な軍歌がありました、一番有名なのは

人は城 人は石垣 人は堀 情は味方 仇あだは敵なり

信玄は御存知のやうに、城といふものを作らなかつた。さういふものでは守ることは出来ない。本当に人を信服させて、心から頼むことの出来る人がをれば、それでもう充分だ。人は城である。人は石垣ともなり、人は堀ともなる。本当に情をかければ、それが味方であり、人に嫌な思ひをさせれば、それが敵になるのだといふ一つの処世訓を表現してゐるのですね。

武田信玄といふ人は、何かやるといふ時には、深く考へて、一步一步、転んでも間違ひないやり方をした人ですが、さういう所が、やはり歌の調子にも出てをりまして、一步一步踏み固めていくやうな調子になつてゐると思ひます。

そこへゆきますと、謙信といふ人は、これが正しいことだと信じたら、まっしぐらにそこへ突込んで行く。直情径行といった性格の人でして、さういふ所が自づから軍歌の中にも表はれてゐるのは面白いと思ひます。

それでは謙信の、その他の本格的な歌はどうかと言ひますと、『上杉謙信伝』といふ本

を書いた布施秀治ふせひでぢといふ人が、非常に立派な歌であるといつて、ほめたゝへてをります歌の中に

とはばやなたがみる空に春の月のかすみかすまぬかげはありやと（春月）

ちよつと聞いて、意味のつかみにくいやうな難しい歌ですね。或は、

なれもまた草のまくらやゆふひばりすそ野の原におちてなくなり（雲雀）

これはわかりやすい歌ですね。謙信は戦の度に、野原で野宿したわけですが、ちようど夕方になって、ひばりが野原に落ちるのを見まして、お前もまた、草の枕をして野で寝ることであるか、自分も同じ境遇であると、ひばりがすそ野の原、妙高山のふもとでせうか、どこでせうか、さういふすそ野に落ちて鳴いてゐるのに、心からの同情を寄せた歌ですね。或は「夏日詠夕立」といふ題で

風の音をまづさきだてゝさゝの葉のみやまも迷ふ夕立の空

風の音が、まづザワザワと起つて、山一面に笹の葉が音を立てる。その笹の葉のみ山を迷はせるやうにして、暗い夕立が降つて来たといふ、山奥の神秘的な感じがこもつてゐるやうに思ひます。ちよつと『萬葉集』の柿本人麻呂の、「笹の葉はみ山もさやにさやげども吾は妹思ふ別れ来ぬれば」(2・一三三)の名歌を連想させるところがありますね。

また、相手方の武田信玄の方は、秀れた漢詩をたくさん残してゐるのですが、歌もまた好きでして、京都からやつて来た三条西実隆さんじょうにしざねたかなどといふお公家さんについて、歌を習つたと言はれてをります。それから、「信玄家法」といふ信玄が武田家の家法として残した、遺言百ヶ条がありますが、その中に、「歌道嗜むべき事」といふ一条がありまして、やはり歌を重視してゐたことがわかります。そして、『武田晴信朝臣百首和歌』といふ歌集も残されてをります。信玄のその歌集には次のやうな作品があります。

霞むより心もゆらぐ春の日に野べの雲雀も雲に鳴くなり  
難波江の葦の葉わけの風あれてよるみつ潮の音の寒けさ

謙信、信玄ともに武将とは思はれないやうな風雅な嗜みがあったといつてよいと思ひます。

数年前に亡くなられた、川田順といふ歌人が編集した、『戦国時代和歌集』といふ本があります。これは戦国時代の武将の歌を集めたもので、三百二十人の武将武士の作品、一千二百二十首が収められてをります。その中で川田さんは、戦国時代の多くの武士武将が、たくさんの歌を残してあるけれども、残念ながら、戦そのものを歌った歌といふものは、あまり見ることが出来ない。わづかに次の数首ある程度であると言つて、七首あげてをります。たとへば

打つ者も打たるゝ者も土器よ碎けて後はもとの土くれ

旗立てし昔を松も知るらめや風になびかぬ草も木もなき



打つ太刀は編木まさらになりぬ同じくは太鼓の胴を切るよしもがな

阿修羅王あしゅらわうにわれ劣らめややがて又生まれて取らむ勝家の首

中川も今は三途さんづの川ぞかし同じ淵瀬に身をば沈めむ

ただ頼め頼む八幡やの神風に浜松が枝はたふれざらめや

どれをみましても、戦陣そのものを歌ったといふだけで、大して心を打つ歌はないですね。

しかし、その中で一つ、上杉謙信の

野伏のぞしする鎧の袖も楯たての端もみなしろたへのけさの初雪

これだけが光つてゐるやうに思ひます。これは戦で野伏する、野原で寝てみたわけですね。今日のやうにテントもなく、テレビなどで見ますと、幕のやうなものを張ってをりますが、どういふ風にして寒さをしのいでみたものか、たいへんつらい野営だったと思ひます。さういふ野伏をしてゐて、朝、目を覚してみると、初雪が降った。さうして鎧の袖

にも楯の端にも、みな燦々と、真白な初雪が積つてゐるといふ、夜が明けた時の鮮烈な印象を歌つてをります。

もう一首、謙信は、天正五年（一五七七）に魚津うまつ（富山県魚津市）で野営した時の作品に

武士のものよ鎧の袖をかたしきて枕にちかきはつかりの声

といふ歌を残してをります。これは鎧の袖を枕にして眠つてゐると、枕にすぐさはるくらゐ近い所を、今年初めての雁が渡つて来た。カツカツと鳴きながら飛んで行く。凜と引き締つて、雁の聲が迫つて来るやうな感じが致します。これは織田信長と一戦を交へようとして、魚津まで進んで来た時の歌ですが、これから大敵を相手にするといふ緊張した気持ちが、よく表はれてゐると思ひます。これと題材のよく似た歌に、小早川隆景の

かり枕かたしきあへず秋の夜の夢さそひゆく初雁の声

といふのがありますが、これは戦乱が一応治つて、平和になつてから後の歌でして、「夢

さそひゆく初雁の声」といふ風に、のんびりとしてゐるわけで、題材は似てみても緊張の度合は、ずっと違ったものになってゐると思ひます。

やはり武人の歌として有名な、源実朝の歌に

ものゝふの矢並つくろふ小手の上に霰あられたばしる那須しのはらの篠原

といふのがあります。武士達が矢を揃へてゐる、その箆手の上に、バラバラと音を立て、霰が降つて来たといふ、那須の高原での感じを歌つたもので、傑作として知られてをりますが、謙信の魚津での歌も、立派な作であると思ひます。魚津へ行きますと、大町小学校の校庭に、この歌碑が立てられてをります。

かういふ風に謙信には、戦野に於ける実感を歌つた、素晴らしい歌があるのです。それから謙信が作った漢詩では、有名な七尾城での

霜満軍營秋氣清

数行過雁月三更

越山併得能州景

遮莫家郷憶遠征

といふのがあります。この漢詩が本当に謙信の作であるか、どうかについては、議論が分かれてをりまして、むしろ後の人が謙信の気持になって、作ったのではなからうかとも言はれてをり、はっきりしない面もあります。しかし和歌の方は、これは自筆のものがいくつも残つてをりまして、謙信が和歌を嗜んでゐたことは、間違ひない事実です。

七尾城での漢詩が、本当に謙信の作であるか、或は後の人の仮託であるかは別としましても、謙信は詩人的性格が強かつたわけで、さういふ伝説が生まれて来る、一つの理由も伺はれると思ひます。現に七尾城を占領した後に、故郷へ宛てた手紙の中に

さてまた、当地七尾、吉日の間、廿六、歛立、申し付くべきため、登上せしめ見渡し候へば、聞き及び候ふよりも名地、加能越金目の地形といひ、要害山海相応じ、海頻島々の体までも、絵像に写し難き景勝に候。

と、七尾城から見渡した景色の、雄大なのに打たれてをりますが、さういふ詩人的な性格

を多分に持つてゐたことがわかると思ひます。

この他に謙信の作つた歌として、伝へられてゐる歌の中に、早起きの氣持を歌つたものがあります。

朝起きて物の交ぬ心こそ心ぞ心ほんの心ぞ

朝起きて、何も他のことを聞いてゐない時の、この純粹な氣持こそ、本当の心といふものだと、朝の爽やかな氣持を歌つてをります。まあ当時の歌らしからぬ歌です。当時のお公家さん風の歌ですと、もつと言葉を整へなければならぬところですが、肉声のまゝといひますか、口語のまゝのやうな感じの歌ですが、かへつてそこに、如何にも武將らしいキビキビしたところが、表現されてゐるやうに思ひます。

明治天皇の御製にも、よく朝のお氣持を歌はれた御製がありまして、たとへば

起き出で、思ふ事なきあしたこそをさな心にひとしかりけれ(朝・37)

朝起きて、何も思はないその一時を、本当にをさな心、幼児にかへつたやうなうぶな氣

持になるといふお歌、あるいは

ねざめせしこの暁のこゝろもてしづかにものを思ひ定めむ（暁・37）

目が覚めたこの暁の静かな心で、重大なことを、はっきり思ひ定めようといふ、朝の清々しいお心持の中で、決断を下されるときのお気持を歌ってをられますし、あるいは

世の中のことまだ聞かぬあしたこそ人のこゝろはしづけかりけれ（朝・43）

朝起きて、まだ世の中の雑事を何も聞いてゐない、その朝こそ、本当に人の心は静かなものであると、朝の一時の御みづからの心の静けさを味はってをられます。

明治天皇のお歌は、如何にも帝王調といひますか、大らかな気品のあるお歌ですが、それに対して謙信の歌は、如何にも武将らしくキビキビとした調子で、歌ってゐるのです。

「心こそ心ぞ心ほんの心ぞ」といふ風な個性の強い表現をしてをるわけですね。

信玄の方にも、実際に戦に出る時の気持を歌った歌には、先程も触れましたが、「ただ頼め頼む八幡の神風に浜松が枝はたふれざらめや」といふ歌があります。戦に出ようとし

て、八幡宮にお参りしたのですが、この八幡宮の神風の為に、浜松の枝が倒れないことがあろうか。浜松といふのは、浜松城にゐた、徳川家康を指してゐるわけで、家康を倒してやるぞと、氣勢を上げてゐるのですが、どこかこの歌は氣勢を上げてゐるだけで、掛声に終つてゐるやうな感じがします。歌として、氣持が本当に純一な、統一されたものになつてゐないので。先程も言ひましたやうに、謙信の詩人的な性格に比べて、信玄は、理知的と言ひますか、どちらかと言へば詩人的でない性格の人であつたと思ひます。

謙信は、川中島の戦ひの後で、功績のあつた部下に対して、感状を与へてをりますが、「血染めの感状」と呼ばれるものが、現在三通であつたか残つてをります。その中にはたとへば、

去る十日、信州河中島において、武田晴信に対し、一戦を遂ぐるの刻、粉骨比類無く候。殊に被官人等を討たせ、その稼ぎによつて、凶徒数千討ち捕り、太利を得る事、年来本望を達し、又面々名譽、此の忠功の段、政虎在世中、曾かつて忘失すべからず候。弥いよいよ、忠信を相嗜むこと肝要に候。謹言。

当時のかういふ風な感状が、形式的な言葉に終つてゐる中で、△政虎在世中、曾つて忘失

すべからず候」この政虎（謙信のこと）は、お前の尽くしてくれた忠功といふものを、この世にある限り決して忘れまいぞ。」といふ、実感のこもった、切々とした手紙を与へてみて、かういふ所にも詩人的な、謙信の性格が表はれてゐると思ひます。

しかし戦では信玄の、一步一步慎重に進めてゆく戦法には押されがちでして、川中島の戦ひにも、信玄を負傷させたといはれるくらゐ、肉迫した花々しい戦鬪をやつたのです。最後には結局、武田勢に押されて、全部越後へ引返し、善光寺平は放棄してしまつてをります。見た目には、謙信の方が勝つたやうに見えながら、実際には武田の方が着実に、その目的を達してをりまして、戦略的には、やはり上杉の負けであつたと言へるでせう。しかし、さういふ謙信の性格が、詩人・歌人としては、謙信に幸してゐたと思ひます。

## (二) 武人と歌の歴史

謙信・信玄以外の武将達も、大抵歌を作つてをります。特に城が落ちて、切腹する時は、多くの武將が辞世の歌を残してをります。この世を去る時に、辞世の歌を残すといふ



ことが、武士の一つの嗜みであったのです。それで『新千載和歌集』にこんな歌があります。

武士ものぶのこれや限りの折々も忘れざりし敷島しきしまの道

作者は源和氏かすうちといふ人ですが、この歌が端的に表はしてをりますことは、武士といふものが最期の際まで、歌の道といふものを忘れなかつたといふことです。これは、歌の巧拙は別にしまして、日本の文化史の上で、日本人の精神を考へる上に於いて、非常に重要なことで、忘れてはならないこと、特筆すべきことと思ひます。最近の歴史は、かういふことにはほとんど目をつむり、主として社会経済的な面だけが、強調されてをりますが、日本人の魂の歴史を考へる上に於いて、実に重要な文化現象ではなかつたかと思ふのです。

また謙信が京都へ上つた時、しきりに公家達をたづねて、歌の道を聞いたり、歌の作り方の本を所望したりしてをる所から窺はれますやうに、戦国の武将達は、京都の文化といふものに憧れてゐた。日本の文化の中心は京都である。その文化に自分達も何とかして、連なりたいといふ氣持が強かつたわけです。それは文化的な事柄ですが、その文化的な事

柄が、そのまま政治的にも同じことが言へるわけです。

それぞれ皆実力を持った武将達でありながら、決して自分の力で、自分が頭かぶになって、天下を治めようとはしなかった。どの武将も、皆まはりを切り従へたら、京都へ上って、天皇を戴いて、天皇の威光によって、日本を統一したい。それがどの戦国武将にも、共通した願ひであったと思ひます。さういふ政治的姿勢といふものが、そのまま文化的姿勢にも反映してゐるわけで、この二つは、切っても切り離すことのできないものだと思ひます。

昔から和歌は、日本の文化の母胎といふ風な気持がありまして、日本の文化を育て、行く何か神秘的な働きといふものが、和歌の中にこもつてゐると考へられておりました。日本の文化を色々と取上げてみると、どれも外国から来たものである。仏教はインドから支那、朝鮮を経て渡つて来てゐる。儒教も支那から朝鮮を経て渡つて来てゐる。その他いろんな文物を取上げて、その元はほとんど大陸から渡つて来てゐる。

しかしこの和歌といふものだけは、古くから日本にあったもので、これこそ本当の日本生え抜きの文化である。そして短かい、さゝやかな詩であるけれども、これこそ日本の文

化を統一してゆく、中心である、根底の力である、といふ気持が、古くから表はれてをります。さういふ信仰的な気持をこめて、和歌を、たゞ歌の道とは言はないで、敷島の道しきまのちといふ言ひ方をしてゐたわけです。さういふ自覚を歌つた歌が『玉葉和歌集』の中にもあります。

これのみぞ人の国よりつたはらで神代をうけし敷島の道

代々、天皇の勅みことのりによつて、『古今和歌集』以下二十一代にわたり、勅撰和歌集が選ばれてゐる。その歌自体には、つまらないものも多いわけですが、天皇中心に、その和歌の道が伝へられて来てをることが、重要なことゝ考へられてをるわけです。

室町時代には、天皇を中心とする公家達の歌といふものも衰へてをりまして、ほとんどそれを模範とするに足りないものとなつてゐたのですが、それでも戦国の武将達は、文化の中心といへばまづ京都を思ひ、朝廷を思つて、そこに自分達も繋がらうと考へたのです。さうして一生懸命に、お公家さんの真似をして作つた歌といふものも、文学的には値打のないものが多かつたのですが、しかし、さういふ文化意識が、そのまゝ政治意識、政

治姿勢となつてゐたのです。

謙信は、二度も京都へ上つてをりますが、これは当時としては、大変な冒険でありました。道々は皆敵国で囲まれてゐる。そこを色々と苦勞をして行つたわけですが、さういふ危険を冒して、多大の費用を使ってまで京都へ上らうとしたことは、やはり重要なことでもあります。

初めて上洛した時には、時の後奈良天皇に拝謁を仰せつけられました。天皇から盃や劍を頂戴し、「よく遠い所からやつて来てくれた」といふ天皇のお氣持を伝へられて感激し、そのことを、自分が幼い頃預けられてゐた、謙信にとっては恩師ともいふべき、林泉寺の和尚さんに出した手紙の中で「参内、天盃・御劍頂戴、父祖以来始めて斯くかの如き仕合せ、まことに名利過分至極に候。」と書いてをります。非常な感激が、簡素な言葉の端々にあふれてゐますね。

さうして翌年、正親町天皇おほぎまらが即位される時には、即位式の費用がないといふことを聞いて、早速その費用を献上してをります。或は、天皇のお住ひである内裏が、いたんでをると聞いて、その修理のお金を献上したりしてをります。このやうに謙信が、朝廷を尊んだ

氣持と、歌を学ぶ為に努力したといふ氣持とは、決して別々のものではなくて、表裏一体のものであったと思ひます。

そして謙信の父の為景も、歌に熱心であつたことは先程もお話し致しましたが、為景もまた朝廷を非常に尊んでをりまして、長尾家の旗を作することを朝廷へ願ひ出て、特に許されたその御礼として、たくさんのお金を献上してをりますし、その翌年の、後奈良天皇の即位式の時には、即位式の費用を献上してをります。

今日ですと、さういふことは、自分達の政治なり、戦なりを、有利に導く為の一つの手段に過ぎないといふ風な見方をする人が多いやうですが、そのみでは割切ることとは出来ないのです。やはりそこには、日本の古い文化の伝統を尊んで、それに従つて行かうとした氣持が表はれてゐると思ひます。

又仮に、功利的、打算的な考へ方で、天皇を戴いた方が、有利であると判断してやつたことだとしましても、さうすれば世の中の人々が、それに対して頭を下げるやうになつたといふことは、戦国の乱れた時代にあつても、日本国民の間に、さういふ秩序を求め、秩序の根源が、天皇を中心とした所にあるといふ氣持が、広くゆき渡つてゐたからだと言は

なければなりません。

ところで、この謙信の後に続く戦国の武将としましては、豊臣秀吉がをりますが、秀吉は非常にいい歌を何首か残してをります。伸びのびとした、如何にも屈託のない歌を作つてをります。たとへば自分の母が死んだ時に

なき人の形見かたみの髪を手かみにふれてつつむに余る涙かなしも

また、自分の子供がなくなつた時には

亡き人の形見の涙残しおきてゆくへも知らず消えはつるかな

そして吉野の花を見た時に

年月を心にかけてし吉野山花のさかりを今日みつるかな

といふやうに、心が自然のまゝに流れ出たやうな歌を残してをります。

それに比べますと、家康の歌は、どこかこせこせとしてをります。そこには謙信と信玄

の場合のやうに、秀吉と家康の性格の違いが、よく表はれてゐるやうに思ひます。家康は、徳川幕府といふ窮屈な体制を、作り上げた人物にふさはしい作品を残してゐるのです。

そして、江戸時代といふ平和な時代になりましたが、武士達の間にかあつた時には切腹する、切腹する時には辞世の歌を詠むのが、作法であつたことに変わりはないわけです。三宝の上に載せてある短冊に、辞世の歌を書き、それから切腹したわけですが、さういふ所にも戦国武将の歌の伝統といふものが、太平の世の中にもずっと受け継がれて来てゐたと思ひます。

たとへば赤穂浪士の討入りで有名な、浅野内匠頭たくみかみは、若くして切腹してゐるのですが、その時の辞世の歌は

風さそふ花よりもなほ我はまた春のなごりを如何にとやせん

この世に名残を惜しむ気持を、はらはらとふりかかる桜花に托して詠じてをりまして、強い実感のこもつた歌であると思ひます。

江戸時代の末になりますと、幕末の志士達は、我も我もと歌を作つてをります。吉田松陰とか、平野国臣とか、久坂玄瑞といったやうな人達は、特に秀れた、心を打つ歌を何首も残してをります。武人が歌を詠むといふ伝統は、太平の時代には比較的底へ沈んであつても、世の中に何かことが起ると、表面に表はれて来るわけですね。

坂本竜馬なども、歌に非常に熱中してをります。(ただし、竜馬はあまりいゝ歌は残してをりません。大体、理知的な人といふのは、歌が作りにくいやうです。人の性格をさういふ風に、分けてしまふのは問題がありますが、情意的な人、感情・意志の面の強い人は、割合いゝ歌を作りますし、理知的な面の強い人は、その理知が邪魔をして、淀みなく歌を作ることが出来ない面があるやうです)。しかしその竜馬も特に、『新葉和歌集』を手に入れたといふことで、京都から故郷へ手紙を出してをります。

扱さわたしがお国ニおりし頃ニハ吉村三太と申もの、頭のはげたわかしゆこれあり候。これれがもち候歌集新葉集とて南朝(楠正成などのころ、よしのにて出来しかたのほん也)にて出きし本あり、これがほしくて京都にて色々求候得ども一向手ニいらざ候間、かの吉村より御かりもとめなされ、おまへのだんなさんにおんうつさせおんねがい被成なされ、何



卒急ニ御こし可被下候。  
くださるべく

これは、竜馬がばあやの所へやった手紙ですが、「自分が国、土佐にみた頃に、吉村三太といふ若衆がゐて、これが『新葉集』といふ和歌集を持ってゐた。『新葉集』といふのは南北朝の時代に、南朝で出来た、楠正成側の方で出来た本である。これが急にほしくなつて、京都で色々ときがしたけれども、どうにも手に入らない。そこで一つ、吉村三太といふ人から借りて、お前の旦那さんに写してもらつて、こちらへ至急送つてもらへないか。」と。竜馬が歌に熱意を持つてゐたことがわかるのですが、このことから直ちに思ひ起されますのは、上杉謙信が『三智抄』といふ和歌の本をぜひ手に入れたいと思つて奔走した。それと同じやうなものを、この坂本竜馬の態度にも見ることが出来るわけです。

さらにかういふ武人と歌のつながりを、振り返つてみますと、決して戦国武将から始まつてゐるわけではなく、先程も少し触れましたが、源実朝のやうな武人にして、日本の歌の歴史の上に、特筆されるやうな秀れた歌人が出てをります。さらにさかのぼりますと、源平の武将達が、戦の間に歌を詠んだといふ逸話は、たくさん伝へられてをります。

自分の歌一首を、勅撰集に残すために、落ちのびた平家の武者、平忠度たひらのただのりが、こつそり

京都へ立ち戻つて、歌の先生であつたお公家さん藤原俊成しゅんせいに自分の歌を渡し、その後、一ノ谷で戦死を遂げてをります。忠度の歌は、やがて『千載和歌集』に「読み人知らず」として載せられたといふ有名な逸話があります。

さらにさかのぼりますと、源義家が東北地方へ行く時、勿来関なごそのせきを通りかゝつて

吹く風をなこそその関と思へども道もせに散る山桜かな

といふ歌を詠んだことが、美談として伝へられてをりますし、或は敵將を追ひかけ、弓に矢をつがへて放たうとして、歌を一首読みかけた。

衣ころものたてはほころびにけり

と言つたところ、追ひつめられてみた敵の武將（安倍貞任さだたふ）が、振り返つて

年としを経し糸のみだれの苦しさに

といふ上の句をつけた。その風雅な心に感心して、今まさに、弓につがへた矢を放たうと

してゐたのを止めて、逃がしてやったといふ話も、美談として伝へられてをります。

### (三) 弟橘比売

さらにさかのぼって、『古事記』に出てゐる物語では、倭建命やまとたけるのみことが病になつて、もはや故郷へ帰ることが出来なくなり、伊勢の能煩野のぼので倒れた時に、切々と胸に迫る辞世の歌を残してをられますし、さらに倭建命につき従つてをられた弟橘比売おとたちばなひめも、死ぬ時には辞世の歌を残してをられます。では最後に、『古事記』のこの物語について少しお話し申し上げておきたいと思ひます。

倭建命が、走水海はしりみづ(今の東京湾の入口に当る所)を渡らうとされた時、暴風雨にあつて船が沈まうとしたのです。その時、船に乗つてをられた後の弟橘比売が、このまゝでは船が顛覆してしまふ、自分が身代りとなつて海の神の心をなごめますから、御子みこは何とかして使命を果して無事で、都に帰つて下さいといふ遺言を残して、海の中に飛び込まれたのです。その時に残された歌、

さねさし 相模さがむの小野をのに 燃ゆる火ひの 火中ほなに立ちて 問ひし君はも

この歌を説明する為には、もう少し先へさかのぼらなければなりません。倭建命が相武さがむの国に來られた時に、その国の造みやつこが欺あやいて、倭建命を騙だまし討うちにする為ために、「野原に沼ぬまがあつて、その沼には非常に横暴な神が住んでをりますから、あれを一つ退治してほしい。」と願ねがひ出でるのです。そこで倭建命は「さうか」といふわけで、野原の中へ行かれるのですが、野原の中へ倭建命が出られた所を見計らつて、その国の造が、野原の回りに火をつけて火攻めにしたのです。倭建命は「しまった」と思はれたけれども、ふと気がついて、自分が東国へ出發する時に、伊勢神宮に仕へてをられた叔母あやまとひめのみことの倭比売命やまとひめのみことから、「何か急のことがあつたら、この袋をあけてみよ。」と言つて渡された袋をあけてみますと、中に火打ち石が入つてゐた。そこで、まづ草薙くさなぎ劍つるぎを抜いて、回りの草を薙ぎ払ひ、火打ち石でこちらからも火を打ち出して、いはば火を以つて火を制して、火難を免れ、その後、賊をことごとく焼き滅してしまはれたのです。

これは今でも向むかへ火ひといつて、山などで、野火に捲かれて逃げ場を失つた時に、こちら

から火をつけて、火の燃えてゆく所を逃げると、却って無事に逃げる事が出来るさうでして、昔からの人々の生活の知恵であつたことがわかります。

その後で、今度はいよいよ相武国から走水の海といふ、潮の流れの早い海を渡らうとされた時に、暴風雨が起つたといふことになってをります。その所を『古事記』の原文でみてみたいと思ひます。

故ここに相武国に到りませる時に、その国造 欺り白さく、「この野の中に大沼あり。この沼の中に住める神、甚道速振る神なり。」とまをす。ここにその神を看行はしに、その野に入りましつれば、ここにその国の造、その野に火をなも著けたりける。故、欺かえぬと知らしめして、かの姨倭比売命の給へる囊の口を解き開けて見たまへば、その裏に火打ぞありける。ここにまづその御刀もて草を刈り撥ひ、その火打をもちて火を打ち出でて、向火を著けて焼き退けて、還り出でましてその国造等を皆切り滅し、すなはち火を着つけて焼きたまひき。故、そこをば今に焼遣とぞ謂ふ。それより入り幸でまして、走水の海を渡ります時に、その渡の神浪を興て、み舟廻ひて得進み渡

りまさず。ここにその後、御名は弟橘比売命白したまはく、「妾、御子に易りて海に入りなむ。御子は遣の政、遂げて覆、奏したまふべし。」とまをして、海に入りまさむとする時に、菅置八重、皮置八重、絶置八重を波の上に敷きて、その上に下りましき。ここにその暴浪、自ら伏ぎて、御船得進みき。爾にその後の歌はせる御歌。

さねさし 相模の小野に 燃ゆる火の 火中に立ちて 問ひし君はも

故、七日後に、その後の御櫛海辺に依りたりき。すなはちその御櫛を取りて、御陵を作りて治め置きき。

それより入り幸でまして、悉に荒ぶる蝦夷等を言向て、また山河の荒ぶる神等を平和して、還り上り幸でます時に、足柄の坂本に到りて、御糧食す処に、その坂の神、白き鹿に化りて来立ちき。爾即その昨遺の蒜の片端もて、待ち打ちたまひしかば、その目に中りて打ち殺さえたりき。故、その坂に登り立ちて、三歎かして、「吾妻はや。」と詔りたまひき。故、その国を阿豆麻とは謂ふなり。

『古事記』には火に捲かれた時、后はどうしてゐたかは書いてないのですが、後の辞世

の歌を見ますと、「相武の野原で火に捲かれた時に、自分の安否を気づかかって、『弟橋比売 どうしてをるか』と、たゞ自分を案じて下さった、やさしい背の君よ」と、背の君に捧げる切々たる歌であつて、これによつて野火の難の折の、命と姫との動静が髣髴として迫ってきます。

その後波が静かになつて、御船が無事、向う岸に着くことが出来、それから七日後に、海辺を見てをられると、後の挿してをられた櫓が海岸へ流れついた。それでその櫓を取つて、お墓を作つて納めておかれた。

それからさらに奥の方へ進んで、荒ぶる蝦夷どもを平げて、帰つて来られる時、足柄の坂に登つて、振り返つて見られますと、自分の愛しい后が沈んだ、走水の海が、静かに下の方に見えてゐる。こゝを越えれば、もはや后が沈んだ所は見えなくなつてしまふのだ。その足柄の坂を越えると、もう関東は見えなくなるわけですね。それで「三歎かして、非常に歎いて、吾妻はや、我が妻よ、ああ」と、歎きの声を放たれた。さういふ風に『古事記』は伝へてゐるのです。

こゝにも、武人と歌の結びつきが、強く出てゐると思ひます。そして、謙信が歌を作つ

たといふことも、単にそれだけ切り離して、謙信は秀れた歌人であったといふだけでは、大した意味を持たないと思ひます。日本の武人が歌を詠んで来たといふ、長い歴史の一コマとして意義があるのです。日本の武人が歌を詠んだといふ、長い歴史の、大海原の波のうねりが、いくつも大きなうねりを見せてゐる。その中の一つの、大きく高まつたうねりとして、この上杉謙信の歌も考へたいと思ひます。

〔富山大学信和会第四回合宿講義筆録〕昭和四四・一二・二一、

於アオイ・スポーツハウス

(追記)

武田信玄の神祇歌二首。

うつし植うるはつせの花の白木綿しらゆふをかけてぞいのる神のまにまに

いはと山緑やまきも深き榊葉さかきをさしてぞ祈る君が代のため

特に「うつし植うる」は謹厳な気持が流露してゐて、信玄最勝の作となつてゐる。この



一首、歌碑になって甲斐一の宮、浅間神社境内に建てられてゐる。三條実美さねともの揮毫である。幕末・明治の志士・政治家で、すぐれた歌人でもあつた実美が筆をとつたことは意義深い。謙信は陣中詠に力作をとどめ、信玄は神祇歌に佳作を残したのである。

## 四 連作短歌論

### (一) 短歌・俳句の相違と連作短歌への展開

短歌は短い詩形である。短く簡潔な言葉ほど力がこもる。「事そぎて力ある」、それが短歌の生命である。

俳句は短歌よりもさらに短い詩形である。外界の風物を寸尺の天地（短小な言語空間）に配置し、按排し、その絶妙の配合に作者のいのちを表現する、象徴的詩形である。形は短小であるが、内蔵するところは短歌よりも複雑である。

芭蕉はまづ「蛙とび込む水の音」の句を得て、上五に何を置くべきかを苦慮した。其角が「山吹や」を提案したが、芭蕉これに満足せず、つひに「古池や」と置いて、この句が成ったといふ。「蛙とびこむ水の音」と「古池」を配合せしめた一瞬に大悟したのである。「禅」の境地にも似た俳句の世界である。

これに比して短歌は素朴である。単純である。原初的である。止むに止まれぬ思ひのほ

とばしりを、そのまま、飾らず、繕はず、歌ひあげるのである。「他力易行」の「念仏」の境地に似てゐるのが短歌の世界である。作者の心はそのままリズムを打って一気に吐き出されてくる。「思ふこと思ふがままに」ではあるが、情意も思想も、むき出しのゴツゴツした形でなく、言葉のリズムに溶かされてゐる。そのシラベ（声調・語調）こそ短歌の生命である。

短歌は短い詩形であるから、全力をこめて作者の情意を三十一音の言語世界に煮つめ、結晶させるのであるが、煮つめるための技巧を凝らし過ぎると、肝腎の声調が損はれてくる。あまりにも複雑な世界を一首に持ち込むと、短歌の自然のままのシラベが破壊されて、佶屈きくくつなものとなる。あたかも盆栽のやうに、枝を曲げ、幹をたわめた作り物になってしまふ。やはり短歌は「自然じねん法爾ほうに」「自然しぜん随順ずいじゆん」、自然のままの、のびのびとした姿でありたい。自然に従つてゆく力と、定型三十一音に結晶させようとする力と、この両力が揺らぐがままに調和したとき、まことの歌は成り出るのである。

短歌はあまりにも簡潔であるから、一首では言ひ尽くせぬ思ひをさらに一首詠む。するとまた感興が湧き、さらにまた一首詠む。次にまたあり余る思ひを一首詠む。このやうに

して連作短歌は自然に発生した。『古事記』『日本書紀』にも連作がある。(日本書紀には、三首の連作に「其一、其二、其三」と注したものがあって、連作の自覚が強く打ち出されてゐる)。「萬葉集」にも、おびただしい連作がある。連作の最も短いものは二首連作であるが、通常数首乃至十数首、長くなると二十数首、時には数十首にも及ぶ。

いのちの律動に従つて歌作すれば、連作になつてゆくのが自然である。感あふるるままに興に乗つて作る場合ほど連作になつてゆく。『古今集』以下代々の集はおほむね孤立短歌(単独歌・独立歌)で、連作は皆無に近い。これは、いのちの律動に従ふよりも、無理にも一首に凝結させ結晶させようといふ力が強く働いたためだ。(そこに長所も短所もある)。

そのやうな単独歌の時代でも、萬葉調を好み、実感を重んじた源実朝には「ある人の方へのぼり侍りに云々」六首、「太上天皇御書下預時歌」三首、「相州土屋老法師云々」五首など幾篇かの充実した連作がある。西行も「地獄絵を見て」二十七首の連作を残した。江戸時代、萬葉調の復興につれて連作もしきりに現れてくる。田安宗武・良寛・平賀元義・橘曙覧らはいくつも連作を作った。幕末動乱の世、切実な実感を尊重された孝明天

皇は、御所焼失の時三十七首の大連作、近衛家の花見の宴の折も十八首の連作を残された。

(二) 無作為連作と構成的連作、多段構成の連作

感興の赴くままに複数の歌を詠み、これを製作順に無作為に並べてゆくのが、連作の原初の姿であるが、やがて一連の順序を整へ、連作全体を「一篇の作品」として磨きあげてゆく。

一連の短歌が平板につらなるのでなく、所々に息のつぎ目、段落を持つ場合もあって、二段構成、三段構成、四段構成などの多段構成の大連作もおのづから生じてくる。「立山連峰」といふ一大山彙の中に「毛勝三山」とか「劔岳」とか「立山群峰」とか「鷲・鳶」「薬師岳」などいくつかのグループがあるやうなものだ。

数十首から成る比較的結びつきの緩やかな大連作中に、所々緊密な小連作（二首連作、三首連作など）を介在させる場合も生じてくる。西行の「地獄絵を見て」二十七首中にはいくつつかの小連作が詞書を伴って介在してゐる。孝明天皇の内裏火災三十七首中には二首

の小連作が五カ所出てくる。川出麻須美の「富山を憶ふ」三十七首中にも、御満座三首・立山夕映二首・小川温泉二首の小連作を介在させてゐる。

伊藤左千夫もすでに述べたところであるが、単独歌を一本の樹木に譬へるならば、連作は植込みである、叢林である。数本・十数本あるいは数十本の樹木が相集まつて樹林をなしてゐる。樹木の種類・大小・枝振り等を見て、その配置を考へ、場合によつてはいくつかのグループに分け、樹林全体の姿を整へる必要も生じてくる。

(反対に、連作の中から一首抜き出して発表する必要が生じたときには、単独歌に仕立てるため、手直しする場合もある。今まで隣接歌で表現して事足りて居た部分を取り込んで、一首に煮つめるのである。勿論、あらためて手を加へる必要がないほど、最初から独立歌として自立し得るだけの風格を備へてをれば最上である)。

連作の最初の一首と結びの一首には、特に心を配つて、それぞれの位置にふさはしき作を据ゑる。一首目のシラベ・スガタに合はせて、二首目三首目以下のシラベ・スガタも整へてゆく。全体の構成上、時には配列順序も変へ、漢詩の「起承転結」の如き配慮をすることが必要である。独立歌の場合とちがって、前後左右の状況によつて、言葉の枝葉を変

更する場合も生じてくる。隣接歌の枝葉との重複を避けて切り落したり、隣接歌と違った語を使用して変化させる場合もある。逆に、隣の歌と同じ語を次々に用ひて「畳みかけてゆく趣」を生み出す場合もある。連作全体で一種の韻を踏むのである。数十首連作の何首目かごとに同じ語を配置して、連作一篇があたかもリフレインをもつ一篇の長詩の如き姿に仕立てる場合もある。

### (三) 連作における頭韻・脚韻

実例を二三挙げてみよう。『萬葉集』卷二、大伴旅人の敏馬の埼を過ぐる時の歌（二首連作）は、

妹と来し敏馬みめの埼を還るさに独して見れば涙ぐましも（四四九）

往くさには二人わが見しこの埼を独過ぐれば心悲しも（四五〇）

「涙ぐましも」「心かなしも」と似たシラベ・スガタで痛切な思ひをくり返し訴へてゐる。しかも「還るさに」「往くさには」「独して見れば」「独過ぐれば」と微妙な変化をつ

け、連作の効果をよく發揮してゐる。なほ旅人が妻を失つて帰京する時の歌は、鞆の浦の三首、ここに掲げた敏馬の崎の二首、家に還りての三首と、それぞれが連作であつて、この三連八首が相連つて一つの連作群を構成してゐる。

植松寿樹ひさきの「御大典址」五首は私が中学生の頃読み、深い感銘を受けた作である。(大嘗祭に関する稀有の作である)。

夜をこめて大みまつりに添へらくも庭燎クはびたきけむその址どころ

天地の音なき際きはに澄みいりつ庭燎もえけむそのあとどころ

とりよろふ松の木肌こにうつりつつ庭燎もえけむそのあとどころ

すめろぎの御代をつがすと大みこと神宣のらしけむそのあとどころ

ちはやぶる神神もあり遠明るくいましし宮のそのあとどころ

五首すべて結句は「そのあとどころ」と置みかけ、神巖の趣、敬虔の情をみなぎらせてゐる。脚句の同語同音の妙、神韻縹渺たる連作である。



橘曙覧の「病にわづらひける時」は

死ぬるやまひ薬のまじと思へるをうるさく人のくすり飲めといふ

死ぬべしと思ひさだめし吾がやまひ医師くすしくるしめ何にかはせん

死ぬべかる病を癒す医師くすりしの今も世にありや吾は見およばず

死ぬる命とりかへさるるくすり師は世はひろけれど有るべく思はず

四首すべて「死ぬ」で始まり、一種の頭韻を踏む。

富山県小矢部市在住の詩人稗田堇平の「棟方志功讃歌」の「十六の歌」は九首中七首まで「ムナカタの山河かなしも」を初二句に据ゑ、頭句同音で節づけてゐる。「七の歌」は八首すべて「展けゆく女人まんだら」を初二句に反覆してゐる。頭句を数首づつ反覆する手法で、讃歌全体をひびかすやうな効果をあげてゐる。

同じ手法は正岡子規もしばしば使用したところで、明治三十一年の「われは」八首は、「上野の陰に昼寝すわれは」「ひとり俳句を分類すわれは」「花火遊びに余念なしわれは」

等、全首「われは」で結び、病子規の生活を髣髴させる。同じく子規の蒼蠅の歌は、

つかさあさる人をたとへば厨くひやなるくらひ残りの飯いひの上の蠅

で始まり「馬の尾につきて走りし蠅もあらむとり残されし牛の尻の蠅」「憎きものうなじねを刺す蚊はあれど睡らむとする顔の上の蠅」などと続け、

世の中の憎さもここに終りけりほろく炮烙もちの尻の繭もちの上の蠅

と九首の快作を結んでゐる。場面は一首一首変化し、単独歌の寄せ集めの如くも見えるが、「つかさあさる人をたとへば」はいかにも切り出しの歌らしく、「世の中の憎さもここに終りけり」は結びの歌らしき内容でしめくくり、「何々の蠅」で脚部を揃へ、(ただし内一首は変化)、眼前の蠅の種々相を写生しながら、社会諷刺をちらつかせた連作である。

頭部も脚部も同音で揃へた例では、子規の「足立たば」八首は、「足立たば不ふ尽じの高嶺のいただきをいかづちなして踏み鳴らさましを」「足立たば北インヂアのヒマラヤのエヴェレストなる雪くはましを」など八首すべて「足立たば」で始め、「ましを」で結んでゐ

る。

橘曙覧の「独楽喰ぎん」もまた

たのしみはまれに魚煮て児等が皆うましうましといひて食ふ時

たのしみはあき米櫃びつに米いでき今一月はよしといふとき

たのしみは錢なくなりてわびをるに人の来りて錢くれし時

たのしみはほしかりし物錢ぶくろうちかたむけてかひえたる時

など、初句はすべて「たのしみは」、結句はすべて「時」。頭句で反覆節づけ、脚句で同じ足を踏みしめ、同音を頭脚交互にひびかせて五十二首の大作を成してゐる。

(四) 尻取り式連作と首尾反覆式連作

田安宗武の地藏祭の歌は

ひと夏の法の筵のりにゆづり得て初秋かぜに靡くはたほこ

はたほこをとらすことはよりよりて宝の珠を得よとなりけり

この珠はいづこの珠ぞ天つ日の光をわけて地つちに照るたま

尻取り式に一首目末尾の「はたほこ」を二首目の頭に据ゑ、二首目後半の「珠」を受けて三首目の頭に「この珠は」と歌つてゐる。絶妙の構成である。

全く同じ作品を、首歌と結歌に据ゑ、首尾呼応させ、一篇の連作が弧を描いて元に戻つてゆく趣を出す例がある。川出麻須美、明治四十二年の「石像」は、

白玉のほへるをとめ燃ゆる目をわれにあつめぬいかにせよとか

で始まり、「なき人のまみの思出うらなげきわれちかづきぬひくがまにまに」「はるの葉やけぶれるものをなにぞこのつめたき胸に石のすがたよ」「わが胸のあつきペンさきひびきなくとはにもくすか石のすがたは」「ほのぐらき室むろのかたすみとこ若のすがた刻みし人のかなしさ」など七首の作をつらね、最後にまた

白玉のにほへるをとめ燃ゆる目をわれにあつめぬいかにせよとか

と結び、同じ一首を冒頭と末尾とに反覆し、一篇の連作を円結させてゐる。麻須美は昭和十一年にも「洋楽を聞きつつ」と題して「いつまでも生きてありたし若き日はまたかへらぬか楽はつづくに」と詠み、四首詠み連ね、最後にまた一首目と同じ歌をくり返し、六首の連作を円結させてゐる。同一短歌を一連の首尾に反覆して、長詩におけるリフレインと同様の効果をあげる手法である。この場合、連作短歌中の一首は、長詩中の一行と同じ役割を果たすのである。

##### (五) 連作群

連作はまた幾篇も連なつて、大連作となり、「連作群（連作叢）」を形作つてゆく。川田順、昭和十年の「立山行」は弥陀原・雄山頂上・いたや峠・黒部平小屋・佐良峠・湯川谷などの諸地点での作を一つにまとめたもの。すなはち連作九篇と単独歌二篇を含む総計五十四首の大連作「連作群」である。「沖繩の島はも悲し風にもまれゆふ日落ちゆくおほう

みのはてに」を含む川出麻須美、大正十一年の「沖繩行」も、七連二十二首の「連作群」である。一般に旅行詠は連作群を形作る傾向が強い。

長塚節の「鉞つりの如く」は単独歌・連作歌を織りまじへつつ、其一から其五まで、さらに未完の其六も添へ、二百数十首に及ぶ長大な作品群である。ただしこれを「連作群（連作叢）」と呼ぶのは穩当でない。あまりにも長期にわたり、詠作場所も各地に分散して、連作と呼ぶには緊密さを欠くからである。またまった作品群といふにとどめておきたい。「連作群」にはやはりある程度連続した時間と空間と内容的連関とが必要である。甲歌群から乙歌群へ、乙歌群から丙歌群へと力を及ぼしてゆく波のうねりが必要である。

#### (六) 他歌他辞引用の連作

連作のあひまあひまに他者の作を引用配置してゆく技法がある。夜久正雄の「悲劇より生るゝちから」十五首連作の十二首目と十三首目の間に三井甲之の一首が挿入され、一連の迫力を盛りあげてゐる。前記稗田堇平の諸集にも試みられてゐる。「良寛讚歌」中には良寛・由之・貞心尼の歌がちりばめられてゐる。「春光頌」では、大島文雄・木村玄外・

高安周吉の各一首を自作中にまじへてゐる。「龍胆頌」には、河合寛次郎・柳宗悦らの言葉、縦横に、自由無礙に、続けざまに、自作短歌中に引用挿入し、これによって連作全篇に活気を帯びさせてゐる。その「十二の歌」は「柳宗悦『心偈頌』に和賛して」と題し「われもまた素直ごころに成り成りて宗悦の偈ワに学ばんものを」と切り出し、以下十一首次々に宗悦の偈の一節を引用してゐる。うち三首を引く。

泉あり泉は不断に噴きいでて「月ハ映リキ、水ヲ染メテヨ」

清らなる泉の水に水の色なけど「色ソメツ、心ヲソメツ」

かくやく宗悦の偈ワに親しみて「色ヲバソメツ、心ヲソメツ」

自作・他作の歌と語が、題辞・詞書もまじへ、各種の歌体・詩形をも織り成しつつ、右に左に展開し、交響楽の如き、ドラマの如き趣さへ醸し出してゆく、さらに壮大な文学の世界を、これら董平の諸作品を読みながら予感するのである。

(七) 左千夫の連作論

近代、新しい連作に道を開いたのは正岡子規であった。すでに明治三十年、愚庵から柿を贈られて見事な六首の連作を作つてゐる。子規はこの他、目のさめるやうな連作を幾篇も作り、明治三十四年には「藤」十首、「しひて筆をとりて」十首などの絶唱を作り、翌三十五年没した。伊藤左千夫がこれを受けて積極的に連作と取り組み、連作論を唱へ、左千夫主導の歌誌『あしび』その後身『アカネ』『アララギ』は連作短歌の大舞台となつた。「連作」の名も左千夫がつけたものといふ。(子規の命名ともいはれる)。かくてわが国近代歌壇は連作の花盛りを迎へたのであつた。

左千夫の連作論(明治三五)は「必ず二個以上の材料(或は主観、或は客観)を配合せる関連を有すること」「必ず位置と時間と共にまとまつて居て余り散漫にならざること」「純客観の連作あるとも純主観の連作は成立しがたきこと」「必ず数首を連関すべき趣向あること」「必ず現在のなること(往事を追懐し後事を想像するとも必ず現在の事実に基づける感想ならざるべからざること)」「陳列的ならずして必ず組織的ならざるべからざること」



こと」と六条件を掲げ、驚嘆すべき精緻さである。しかしこの厳しい条件では、『萬葉集』中、連作の名に価するのはただ一篇（大伴旅人、鞆の浦の三首）のみと左千夫は説く。橘曙覧の作も、一題の下、数首並べただけで、すべて連作にはなって居らぬと左千夫は説く。子規の明治三十三年五月作の「雨中松」十首が真個の連作趣味の始まりで、それ以前は（子規の作も含めて）すべて問題外といふのが左千夫の所説である。

しかし子規は、左千夫の連作論を聞いて、「左千夫のやうに狭義には連作を解釈して居ない。連作にも色々の風があるとしてもよい」と述べたといふ（香取秀真聞書）。私も連作をもっと幅広く考へたいと思ふ。単に同題下に何首か並べただけのものは勿論連作の名に値せぬが、一首目から二首目、二首目から三首目へ……と何等からの有機的関連をもつて詠み続けたものは連作と考へたい。

#### (八) 連作の要件としての声調

大伴旅人の讃酒歌十三首、橘曙覧の独楽陰五十二首の如き、主観的内容を特定の語調によつて詠み続けた作も、曙覧の鉾山の歌八首、子規の桃太郎八首の如き、次々に移り変わる

場面を連続的に詠じた叙事的内容の作品も、子規の「柿」「われは」「足立たば」の如き、身辺即事の感興を、同一リズムに載せて、或は独詠的に、或は対詠的に詠じた作品も、すべて連作と考へたい。山上憶良の志賀白水郎を悼む十首（萬葉集卷十六、三八六〇—六九）の如き、声調・内容相俟って最勝の連作であると私は考へてゐる。

これらの作では、各首相寄り相扶け、一定のリズムをもつて独自の詩情を醸し出し、数首あるいは十数首全体で一つの歌境を形造つてゐる。仮に一首の力を一とすると、十首集めてその力の総和が十になるのではなく、各首相寄り相扶け、その総合的效果によって、連作全体の力は二十にも三十にもなつてゐる。そこに連作の妙味がある。一首づつ切り離したら感興半減するであらう。作歌心情の自然の展開が、これにふさはしき音調を伴つて複数歌となり味ひ深い歌境を形造つて居るのである。決して単独歌の寄せ集めではないのである。

左千夫は、連作の条件に、声調を全く顧慮しなかつたが、私は、一連に備はつた独特のシラベ・スガタを連作の大切な条件と考へてゐる。題材が一貫して居ても、異質のリズムを混じへ、声調が断絶するものは真の連作ではないと思つてゐる。一連が一つのリズムを

奏で、一首目から二首目、二首目から三首目へとうねりを打って続くことが重要である。

(九) 左千夫の連作趣味と甲之の創作心理随順

左千夫は、子規一門の俳句における作句修練のための一題十句が、和歌習練にも応用されて一題十首歌が盛んに作られ、これが発展して連作となり、連作趣味を発見するに至ったと説き、終始、連作趣味を強調してゐる。趣味・趣向がその原点である。

三井甲之は、大伴家持がその亡妻悲傷歌（萬葉集卷三、四七〇—四七四）において「悲緒未だ息<sup>あ</sup>まずして更に作る歌五首」と書きつけたことに注目し「連作短歌創作の動機を告白したものである。即ち自然の要求に随順したものである。それ故に連作の形式があるといふよりも、連作の形式を要する芸術的要求があるといふべきである」と力説した。左千夫の連作趣味<sup>い</sup>に対して、甲之は生の内的衝動<sup>い</sup>を重視したのである。内的要求を連作の原点としたのである。この自然の要求が言語の形をとるとき、おのづからこれにふさはしきリズムが生じてくるものと私は思つてゐる。

斎藤茂吉も早くから連作を論じ、「短歌連作の由来」（明治四五）を書いたが、その中

で、左千夫の連作論に対して意見を述べた人として、大伴鞆負・香取秀真・佐佐木信綱の名を挙げ、左千夫に続いて連作を論じた人として、三井甲之・森田義郎・古泉千樞・齋藤茂吉・鹿菅渡（川出麻須美の別名）等の名を挙げてゐる。近代歌壇における初期連作論の系譜である。

ただし茂吉が、甲之以下を（茂吉自身も含め）一括して「断片的であり、又部分部分に左千夫の論を改良したに過ぎない」と評価したのは不当であらう。甲之が家持の「悲緒末息更作」の語を指摘、「連作の動機を自白したものと」として注目したのは『アカネ』一卷九号（明治四一）においてであった。前述した如く、甲之が左千夫の趣味的芸術主義を超えて、はじめて連作創作心理の機微に触れた貴重な論であった。

#### (十) 麻須美の連作論

川出麻須美が明治四十二年の自筆歌稿に書き記した序は、短文ながら連作短歌の神髄を示すものである。私は昭和二十六年、はじめてこの麻須美自筆ノートに接し、かねがね私の漠然と抱いて居た連作観と符節を合し、すでに明治年代、かくも簡潔明確に、力強く表

現されてあることに驚嘆し、深く感激したのであった。その全文を掲げておく。

「いのちに満ちたる一刹那の感情を具体化するとき簡単なる詩形となるは自然なり。三十字の和歌の生命ここにあり。しかるに複雑なる感情を表現するに一首の和歌を以てせむとせば生命の律動を破壊するに至るべし、和歌の連作はこの闕点を避けむがために必要なり。感情の自然を重んじ和歌研究に出発せる詩人は必ず連作に進まざるを得ず。歴史的習慣により連作中の一首も独立的に取り扱はれ易く、従つて連作は連続せる感情を切断し再び接合したるかの感を与ふ。これ連作の闕点なり。ここに於いて有形式の新体詩若しくは散文詩研究に入らざるべからず。余が本国上代の詩歌に研究の出発点を取り、以上の経路を追ひて着実に進まむとするは決して誤れる方針にあらざるを信ず。」

かくて麻須美は長詩製作に激しい情熱を傾けたが、大正半ば、つひには和歌―連作短歌に戻つた。「自由詩を作つて居ると、詩のリズムが身体にのりうつつて来て、からだは踊り出すのであった。これではたまらんとおぼえて、自由詩を作るのを断念した」、これは麻須美が夜久正雄に語つたところである。亀井俊介は、麻須美のこの語を引いて、「自分の本領を自覚した人の言」と評し、「麻須美の根底は伝統的リズムで支えられている」と指

摘し、「連作短歌の分野こそ彼の本領」と論評した。（「川出麻須美とホイットマン」、『比較文学研究』一五号、昭和四四）。

記紀・萬葉から近代に至る和歌史を顧み、近現代の連作と連作論を展望して私は思ふ。簡素な短歌が、一首一首を充実させつつ、連作を形作り、連作群（連作叢）に進み、時には他者の歌・他者の語をも織りまじへ、複雑な歌境をも自由自在に表現し、「厚き広き世界」を拓いてゆく、それこそが目ざすべき和歌の世界であると。

## (二) 群作について

複数作者の共同製作にかかる連作としては、『萬葉集』卷第二、日並皇子尊薨去の時、「舍人等の慟傷みて作れる歌二十三首」（一七一—一九三）の如き古い例がある。個々の作者名はすべて埋没し、「舍人等」とのみ記されてゐる。

卷二十の防人の歌八十四首もまた共同製作による連作に準じて考へたい。これは一首一首作者名が記されてゐる。個々の作者は一人一人の思ひを精一杯歌ひあげたのであるが、大伴家持はこれを一連の作品群として、明確な意図によって編集し、拙劣歌は除去し、さ

らに自作の長歌短歌を節目節目に挿入し、末尾には「昔年の防人歌」（作者名不詳）九首をも添へ、総計百十余首の大作品群に仕立てあげたのである。これを続けざまに読めば、防人たちが次々に声をあげ、その別離の悲しみも、望郷の念も、醜しとの御楯みたせの強い決意も、一つにとけ、一つの高潮となつて滔々と迫ってくる。共同の大連作「群作」である。このやうな場合、編者の存在、編者の力量がきはめて肝要である。

前述の舎人等の二十三首も、柿本人麻呂の長短歌に続けて記載されてゐる。人麻呂が自作の余韻を舎人等の作に響かせて、この形に編集したのかとも思はれるのである。

「連歌」「連句」が共同製作の詩、「座」の文学として、近年新しい観点から注目を浴びて居るが、それとは全く別に連作短歌の共同製作「群作」の復興は私の夢である。

### (三) 俳句の連作

伊藤左千夫が「歌には連作の必要ありて、俳句には毫も連作の必要なきが如く思はるるは如何」と問うたのに対して、正岡子規は、歌は単純であるが、「俳句は短き詩形なれども、一句の内に幾個にも切れる也、故に種々の配合物を一句の中に入れ得らる。従つて一

句能く一光景を画きて、不足なきを得るなり。一句一光景を為す。毫も連作の必要なきに  
あらずや」と答へたといふ。

しかし短歌が連作に進み、連作で一つのまとまった境地を現すが、さらに進んで連作群  
(連作叢) となつて一層複雑な世界を表現するが如く、一句完結の俳句も、これが幾句か  
重なつて、さらに複雑な俳境を表現する場合もある。現に、子規が明治三十一年の上野元  
光院の観月会に列した時の作「立待月」百句は、精舎・準備・始夕・待月・月出・卓上・  
雑談・琵琶・囲碁・人散の十段構成で、各段十句づつから成り、月見の宴の始めから終る  
までのありさまが、時間の経過とともに一つ一つ自由自在に詠まれて居て、連作といつて  
いい句境である。第二段「準備」中の、

芋は煮えず豆は釜中に在りて泣く

芋の後に栗を蒸すべき指図かな

盆に分けて栗は少し豆と芋



等の句、連作の中にあつてこそ生きてくる句である。  
また絶唱の辞世三句、

糸瓜へちま咲て痰たんのつまりし仏かな

痰一斗糸瓜の水も間にあはず

をととひのへちまの水も取らざりき

は三句相連つて渾然たる句境を成してゐる。まさしく連作である。

(三) 日本書紀の連作

『日本書紀』の皇極・斉明・天智紀に収録された歌には「其一」「其二」「其三」等の番号を付けた例があつて『書紀』編者がこれを一組の歌・一連の作と意識して居たことを明白に示してゐる。

山川に鴛鴦を二つ居て偶好たぐひよく偶へる妹を誰か率ひにけむ

其一

本もと毎もに花は咲けども何とかも愛うつくし妹がまた咲き出来ぬ

其二

これは中大兄皇子妃みやつこのみめ造媛逝去の時、野中川原史満ふひしまろが皇子の御心になり代つて代作した挽歌。

今城いまきなる小丘をが上に雲だにもしるくし立たば何か歎かむ

其一

射ゆ鹿ししをつなく川辺の若草の若くありきと我が思はなくに

其二

飛鳥川水漲みなぎるひつつ行く水の間も無くも思ほゆるかも

其三

これは皇孫建王たげののみこ八歳にして薨去のとき、祖母斉明天皇の悲哭して歌はれた御製。いづれも純然たる短歌形式の連作である。その後、斉明女帝は紀の湯に行幸され、建王を追憶し悲泣して次の三首を詠まれた。

山越えて海渡るともおもしろき今城きのうちは忘らゆましじ

其一

水門みなとの潮のくだり海うなくだり後うしろも暗くれに置きてか行かむ

其二

愛うつくしきわが若き子を置きてか行かむ

其三

この三首連作は一首目・二首目が短歌形式、三首目が片歌形式（五七七）である。連作は通常、短歌ばかり連ねて作られるが、これは短歌以外の形式の作品をまじへた珍しい連作である。

「山越えて海を渡っても、亡き孫と過ごしたあの今城の楽しかったことは忘れられぬ」「海峡を落ちくだる潮水が流れ落ちてゆくごとく、後もまっ暗な気持で、かはいい孫を置いてゆかねばならぬことか」「ああ可愛い若い孫を置いて行かねばならぬことか」と悲嘆されたのである。ウシホ・ウナ・ウシロと頭韻を畳みかけ、「潮のくだり海くだり」とクダリがくり返され、類音の「くれに」がこれに続き、暗い奈落の底へ落ちてゆく如き思ひが、美しくも哀しい音調で歌はれてゐる。そして三首目が二首目の「置きてか行かむ」を反覆し、痛恨痛嘆の情を深めてゐる。

『古事記』倭建命やまとたけるの辞世も、音数不揃だが短歌形式に近い二首のあとに片歌一首が添へられ、この斉明女帝御製に似た姿である。仁徳記にも音数不揃の一首のあとに片歌一首を添へた例がある。『萬葉集』の長歌・反歌の並べ方の先駆的手法としても注目すべきである。

『萬葉集』山上憶良には短歌一首・旋頭歌一首、計二首を一組とした珍しい異体連作がある(8・一五三七〜三八)。これも「其一」「其二」と番号を付されてゐる。

秋の野に咲きたる花を指折およびりかき数ふれば七くさの花

其一

萩が花尾花葛花をみなへしなでしこの花、女郎花をみなへしまた藤ばかま朝顔の花

其二

其一の短歌で秋の七草を取りあげ、其二の旋頭歌で具体的に七種の名を列挙してゐる。其一其二相まつて一篇の作品となるわけで、連作の密着度強く、片方だけでは成立せぬ作品である。動詞も形容詞も副詞もなく、接続詞の「また」以外はすべて植物名で構成されてゐるといふ点でも珍しい作品である。

これに倣った越中の五十嵐篤好あつよし、文政九年(一八二六)作の二首連作の短歌がある。

「萬葉なる七草の歌にならひて」と題して

耳なしの山の山人やまづとと吾にくれてし花はなににな

女<sup>をみな</sup>へし菜種たんぼ<sup>すき</sup>鋤<sup>ひら</sup>の平山<sup>ぶき</sup>振おとぎり日車の花

これも二首癒着、切り離せぬ作である。ヤマノヤマビトヤマヅトトとヤマを三回くり返し、ト音も三回連続して美しい韻律を響かせ、ナニナニといふ句も謎々めいて面白い。耳なしの山人が登場するのも興味深い古代的幻想である。二首目は全く草花の名を七種続けただけだが、言葉が小刻みに躍動し、楽しい音調を奏でてゐる。近代歌人はリアリズムになりすぎて、こんな歌は作らうとせぬが、本当の歌の世界は百限<sup>もくま</sup>八十限<sup>せくま</sup>あって、広く楽しいものだ。歌詠みはわが住む世界を、誤った先人観で狭めてはならないと思ふのである。

〔『高志のうた』昭和六〇、『続高志のうた』昭和六一〕



第二章 天皇の御歌





# 一 明治天皇

## 1 明治天皇御製と山

月みればまづこそ思へ旅寝して近くむかひし山のけしきを（をりにふれて）

明治四十二年の御製である。この一首を拝誦すると、月の光に鮮やかに照らし出された山の姿が彷彿として迫ってくる。天皇の御心に深々と回想された名も無き山のたたずまひは、御製を味はふ者の心に、ありありとうつつてくるのである。抒情的なうるほひが流露してゐるとともに、どこかに帝王ぶりともいふべき威厳があつて、まことに感銘深く、私のおつねづね愛誦したてまつる一首である。

1 明治天皇

明治四十二年といへば御晩年である。晩年のみかどが月を見て、まづ第一に思ひ出されたのは、かつての旅寝で近々と御覧になつた山のけしきだったのである。明治天皇御集には、このほかにも

秋の夜の月にむかへば旅ねして見し海山のおもかげにみゆ（月・36）

ひとめみし野山のけしきうかぶかなすみまさりゆく月の光に（月・37）

などと、月を見て海山・野山を回想された御歌が目につく。「ひとめみし」の一句は極めて印象的で、縹渺たる月の景色を作者の強い主観で統率してゐるのである。さらに

はれわたる空にむかひて思ふかな新高山の月はいかにと（月・34）

と、まだ見ぬ台湾の高山にまで憧れの御心を寄せられた。（ちなみに新高山といふ山名は明治天皇の御命名である。）

○

徳川幕府はきびしく朝廷を拘束し、歴代の天皇はほとんど御所の外へ出られることがなかった。それで、孝明天皇が旧例を破って行幸されたとき、はじめて賀茂川を御覧になつて「あの白く帯のやうに光るものは何か」とたづねられ、「あれが川といふものか」と驚かれたといふ。

維新の大業が成ると、明治天皇は全国くまなく巡幸され、国民の姿・国土の姿を親しく御覧になった。天皇の御歌には旅に出て国民の姿を見る喜びを歌はれ、あるいは、ま近くたづねた民のなりはひを旅寝の夢に見たと詠まれ、あるいは畑続きの野辺に宿って農夫の声をま近く聞いたと詠じてをられる。国民に接することのお喜びが一首一首にもりこぼれてゐる。そしてまた民草に対すると同様「治めしる国」の山川にも、限りない情愛を注いでをられるのである。

高殿の窓をひらきて旅やかた山をまぢかく見るがめづらし（旅・39）

旅にいでてまづうれしきは都にて見なれぬ山にむかふなりけり（山・42）

みやこいでてまづめづらしとみるものはつねみぬ山のすがたなりけり（旅・43）

めづらしき山のけしきをまもりゐてやすらふやどに時をうつしぬ（旅・43）

旅衣たちとどまりてみてゆかむ都にしらぬ山のけしきを（旅・35）

「山をまぢかく見るがめづらし」とは、まことに子供のやうに率直な御表現である。

「都にて見なれぬ山」「つねみぬ山のすがた」「都にしらぬ山のけしき」をいかに楽しみとしてをられたかがわかるのである。

富山県東端朝日町の馬鬣山は、明治十一年巡幸の折、天皇が「馬のタテガミに似てゐる」とおっしゃったところから名づけられた山名だといふ。真偽のほどは定かではないが、土地土地の山の姿に新鮮な感興を催された帝の御心を記念したいといふ地方住民の念願がこの伝承に息づいてゐる。

小車のまどうちあけてみつるかな伊吹の山の雪のけしきを（雪・43）

伊吹山はヤマトタケルノミコト遭難の山である。古事記が伝へるミコトの物語はまことに悲壯で美しい。ミコトは伊吹山の荒ふる神に敗れ、大氷雨おほひさめに打ち惑はされて敗退し、力尽きてなくなられた。その魂は白鳥となって故里へ飛んだが、つひにとどまることなかったといふ。明治天皇はお若きころ「まつろはぬ熊襲くまそたけるのたけきをもうち平げしいさををしも」と詠じてミコトの武勇を讃へられた。そのミコトゆかりの伊吹山の雪まみれの姿を、つくづくと御覧になつたのである。

天皇は夢にまで山の姿を見てこれを歌にされた。

いつのまに山路をこえてわがこころとほきたかねを夢にみつらむ（夢・42）

おもひやる山べにゆくと見しゆめをしくも風のさましけるかな（夢・40）

うたたねのゆめの直路ただちにみつるかな見まほしとおもふ山のけしきを（夢・43）

「おもひやる山」「見まほしとおもふ山」をいつも御心に持つてをられたのであった。  
天皇はまた

雨ぐものはれわたりゆく大ぞらにつね見ぬ山もみゆるけさかな（山・41）

冬がれの野末に見ゆる白雪は何のあがたの峯にかあるらむ（枯野・35）

と、雨後あるいは新雪時に、平生気づかなかった山の見えるのに御心をとめられた。山々の眺望の微細な点にまでお気づきだったのである。

新雪の山岳景観を緊張したシラベにうつしただされた御歌は実に数多く、

秋かぜの吹きはらしたる大ぞらにふじの高ねの雪ぞ見えける（望山・34）

嶺たかくつらなる山に雪見えて車のうちもさゆる今日かな（雪・34）

五百重山いほへやまつらなるみねの奥までもさやかになりぬ雪のつもりて（雪・38）

大空はみどりにはれて山といふ山みなしらく雪ふりにけり（雪・38）

こがらしのふきはらしたる空遠く甲斐のたかねの雪ぞ見えける（雪・40）

の如き御作がある。甲斐の高根は南アルプスであらうか。初冬の空に冴えた雪山をみとめられ、このやうに力強い一首をものされたのである。

○

明治天皇は、名もしれぬ鄙の山に限りなく御心をとめられたが、しかし、山に関する御製中、もっとも多いのは富士の歌で、朝の富士・夕の富士・春夏秋冬それぞれの富士・雪の富士・雲の富士と、全く枚挙にいとまがないくらみである。

天皇はいたく京都を愛されたが「京都へ行くと政治にさしつかへるから」と述懐され、京都市行幸はなるべく遠慮されたといふ。しかし東京の御生活で、もっとも御心をお喜ばせ

したのは、実に富士山であった。

鳥がなくあづまにすみてうれしきはふじの高ねにむかふなりけり（富士山・39）

とは、その御心持を率直によまれた一首である。行幸の折にも、

朝まだき都をいでてふじのねをふりさけみつつゆく旅ぢかな（山・37）

心ゆく旅路なりけり大空にはれたるふじの山もみえつつ（旅・35）

と爽やかに歌ひあげられ、帰途には、

あづまにといそぐ船路の波の上にうれしく見ゆるふじの芝山（11以前）

ふじのねのみえそめしこそうれしけれ東路さしてかへるたびちに（富士山・42）

と包みなく喜びを歌ってをられる。

はれぬ日のおほきぞ惜しきわがそのに富士見のうてなつくりたれども（富士山・42）  
と富士の見えぬ日多きを慨嘆され、

天のはらあふぐたびにもめづらしとおもふはふじのたかねなりけり（不二山・45）  
と徹底的に富士に傾倒してをられる。

ふじのねの雲のひとひらうちなびき大ぞら高く秋風ぞふく（秋天・31）  
の如き、まことに爽快の感みなぎる御作である。

○

明治天皇御集には、さはやかな朝の心持を詠まれた御歌をしばしば拝するが、  
おきいでてまづうちむかふ大比叡の山はこころのしづめとぞなる（山・37）  
朝まだきこころしづかにおきいでて山にむかふがたのしかりけり（山・35）



ほがらかに明けわたりたる山のはにむかふ心ぞわが世なりける（山・38）

おきいでてまづうれしきはをちかたの山をさやかにみる日なりけり（山・40）

むらぎものこころしづかにおきいでて山をみるこそたのしかりけれ（朝眺望・42）

と、くりかへし朝の山を詠じてをられる。静かな朝の山に向かふことは、天皇にとって大きなしみであり、「心のしづめ」だったのであらう。そして御みづからを顧みて

ちりひぢにまじるこころぞはづかしき空にひいでし山にむかひて（山・40）

むらぎものこころのちりもしづまりぬ富士のたかねにむかふ朝は（山・43）  
あした

と謙虚に詠ぜられた。朝の山を鏡として一日の政務をとる心の姿勢を正されたのであらう。

天皇は、山岳のもつ巨大さ・神々しさ・清らかさを讃嘆されて、

あらがねの土よりいでて大ぞらのものかとおもふ山もありけり（地・38）

大ぞらのすゑにはれたるとほ山はつちにつらなるものとしもなし（山・41）

と詠ぜられた。「あらがねの土よりいでて大ぞらのものかとおもふ山もありけり」とは、まことに悠大きはまりなき御感想である。明治三十七年の御製「産みなさぬものなしといふあらがねのつちはこの世の母にぞありける」には、「母なる大地」ともいふべき神話的発想が拝されるが、この「土よりいでて」の一首にもまた巨大な神話的イメージが揺曳してゐる。この御歌において「あらがねの」の枕詞の使用は天地創造神話的発想と密接不可分である。

明治天皇はかくのごとく山に対して深い御心を寄せられ、山に対する感情、思想を数々のすぐれた御製にとどめられたのである。明治天皇御集を拝誦しつつ、私はそびえたつ高山を仰ぐ思ひで、天皇を慕ひまつるのである。

（『国民同胞』五六号 昭和四一）

## 2 明治天皇巡幸と米大統領の辞

(一)

「おい、何しとる！」 巡査が咎めたのは一人の盲目の按摩。明治十一年九月三十日、明治天皇行幸の御車が富山町に着かれ、行幸を迎へて人々がごったがへして居るとき、按摩は杖で足もとをまさぐりつつ、うろろうろして居たのであった。

「私は八尾町に住む小竹といふ按摩でございます。天子様を拜まうと思つてはるばる富山まで出て参りましたが、盲目のため行幸を拝観することも叶ひません。せめて天子様の御車なりと手を触れさせて下さい」と按摩は嘆願した。巡査は「そんなことが許されるものか。早くあちらへ行け」と叱りつけたが、按摩はとりすがつて哀願した。

巡査も可哀さうに思ひ、「よし、わかつた。こちらへ来い」と御駐車場へつれてゆき、係の者に話した。役人たちも按摩の至誠に打たれ、つひに許可した。按摩はうやうやしく御車の車輪に手をのぼし、撫でつさすりつ、涙をぼろぼろこぼし、「これで天子様のお姿を拝したのと同じでございます。死んでも思ひ残すことはありません」と感激し、「氣

をつけて帰れよ」と巡查らにいたはられて立ち去ったといふ。

当日の富山町は近郊から押寄せた行幸拝観の人々で祭のやうに混雑した。飛驒から神通川を下って来た川舟が転覆して溺死者が出るといふ騒ぎまであった。天皇はこれをいたく憐れまれ、御見舞金を下賜されたといふ。その夜、行幸随従者近藤芳樹よしきの宿舎を訪れた飛驒古川の佐藤彦太郎といふ青年があった。天皇御巡幸は全国くまなく行はれたが、飛驒国は交通不便な険しい山国であったため、巡幸路からはづされて居た。飛驒の人々は越中富山まで出かけて行幸を拝した。転覆した川舟も、彦太郎も、行幸拝観のためであった。

彦太郎の父泰郷は老齢のため、険しい道を凌いで富山まで赴くこと叶はず、

めぐります国見のためのみ車も通はぬ山の奥ぞかなしき

と詠んで歎いた。彦太郎は

岩さきてかけ路ひろめてみ車の通はむ国となすよしもがな

と詠んで老父を慰め、父に代って朋輩とともに富山に出たのであった。芳樹はこれを聞い

て深く感動し、その著『くぬがぢの記』（行幸随従日記）の中にこれを記しとどめ、「誠にさ思ふらんとあはれにおぼゆるまゝにここに記せり」と書きつけたのであった。

明治天皇行幸こそは、日本全土を恋闕興奮のルツボにまきこんだ一大行事であった。長い間、名もなき民の間に深々と培はれて来た伝統的心情が堰を切つて溢れ出た一大祭典であった。そのことをこれらの逸話からつくづく思ふのである。

(二)

このやうな民の至情を天皇はどのやうなお気持で見そなはしたか。『明治天皇御集』の「旅」と題された数々の御製こそ天皇がその御心情を直接吐露された、かけがへのない貴重な詞玉である。

くにたみのつらなる道をかみつみつ旅にいづるがたのしかりけり (35)

国民のむかふるみれば遠くこし旅のつかれもわすられにけり (39)

小車のすぐるまにまにうれしきはむかふる民のこころなりけり (35)

ゆくところ野にも山にも国民のむかふる見ればうれしかりけり (44)

と、くりかへし国民の熱誠あふるる奉迎を喜び歌はれた。

旅にいでしわれをむかへて里人が千千にこころをつくすとぞきく (35)

わがためにつくろひぬらむ旅やかた庭のけしきのただならぬかな (36)

遠くとも渡りてゆかむわがためにかれたりときく野路の川橋 (35)

と、国民の心づくしに答へてやりたいと念願された。行幸のためにわざわざ橋を架けたと聞き、それならば廻り道になってもその橋を渡り、せっかくの民の厚意を無にしまいとされたのであった。日ごろは程遠い民草の声や姿も、地方行幸の折は近々と迫ってくる。それを、

草枕たびのやかたのせばければ民のゆききをちかくこそ見れ (39)

しづがやのけぶりもちかく見つるかなあがたの里に車とどめて (34)

しづのをが聲をまちかくききてけり畑つづきなる野べにやどりて (37)

と、感銘深く歌はれた。畑仕事する農民のつくろはぬ声が御枕元まで聞えてくる。「これが民の自然の声なのだ」と天皇はじっとお聴きになって居る。そのお姿が目に見えるやうである。夜はまた

まちかくもたづねし民のなりはひをこよひ旅ねの夢にみしかな (36)

と、夢にまで見られたのであった。霧の日は、

霧たちてさだかに見えず道のべにわれを迎ふる人のおもわも (37)

雨の日は

道のべにわれを迎へて立つ人のぬれもやすらむ雨のふりくる (38)

と奉迎の民草に御心をそそがれ、しかも

いとまなきなりはひやめて国民のわが馬車いで迎ふらむ (39)

草まくら旅にいでは思ふかな民のなりはひさまたげむかと (36)

と、行幸が国民生活の負担になりはせぬかと案ぜられて居る。これらの御製をつづけて拝誦すると、まさに「小車のすぐるまにまに」大御心がリズムを打って伝はってくるのである。

(三)

先般 (昭和五十四年三月二十九日)、NHKの「歴史への招待」の番組で明治天皇巡幸をとりあげ、その史的意義に注目したのはよい企画で、天皇をお迎へした民の歓びも随所にうかがはれたが、肝腎の天皇の御心情については殆ど触れず、天皇が御心情を直接吐露された行幸に関する御製はおびただしい数にのぼるのに、ただの一首も引用しなかったとは、片手落ちどころでなく、まさに仏作って魂入れず、であった。



東京サミットに来日したカーター大統領は、来日に先立ってNHKアナウンサーの訪問をうけてゐる。その会談の様子は六月二十一日夜放送されたが、大統領は開口劈頭「天皇陛下のやうに詩人であり科学者であり、世にも稀な魅力ある方にお会ひできるのを第一の楽しみとして居る」と述べ、結びでまた「明治天皇と天皇のお歌」に言及し、絶讃した（この会談は放送で聞いただけで、印刷になったものを見て居ないので、残念ながら正確に引用することができない）。

来日して、六月二十五日夜の宮中晩餐会の席上のスピーチの中で、カーター大統領は、「またもや明治天皇御製を引用し、天皇陛下の毎年のお田植をたたへ、陛下の昭和十四年の御製を引いて結びとした。単なる外交的儀礼の辞を超え、大統領が天皇御製に注意し、深い敬意を抱いて居ることが言々句々ににじみ出て居た。御製の意義に気付いたといふことは日本伝統の神髄に触れたといふことである。これにひきかへ、日本側にはかへって御製に対する認識は不足欠落し、カーターの話を紹介するアナウンサーも御製がうまく読め

ず、しどろもどろであった。宮中晩餐会を報道する各新聞の記事も、「天皇陛下の歓迎のお言葉」と「カーター大統領の乾杯の辞」はおほむね「要旨」にとどめ、肝腎の御製は載せなかった。(私の見た範囲では、読売だけが引用御製も含めて全文掲載。サンケイは解説記事の中御製二首とも引用した。)

(五)

日露戦争生き残りの古老が当時の国民的感激を述懐したのに対して、ある歴史学者は「そんな個人の体験なんか歴史ではない。かへって歴史を見誤るものになる」と一顧も与へなかつた。そして、社会経済的観点からの冷たい理論構成と、それによる解釈だけが歴史だといふのである。

果してさうであらうか。個人一代のことを反省してみよう。戦災で家を焼かれて焼跡に茫然自失したときの感情、嘗々貯蓄して家を新築したときの喜び、最愛の家族を失ったときの悲嘆、……そのやうな悲喜哀楽の体験を抜きにして、その人の生涯を語る事ができるものかどうか。経済生活の移り変りの記述だけで「これが自分の生涯だ、これが自分の

「歴史だ」と思ふことができるかどうか。

その時々々の国民の感動が相寄り相集って、もりあがり、渦巻き、変化し、しばらくもとどまらず動きゆく、それこそ一国の歴史である。社会経済の変動も、このやうな人間の情意生活に照応してはじめて生きてくるのである。その時々々の人々の感動をそのまま吐露し、言語に結晶せしめたものは、歴史の又となき貴重な史料である。臨場感あふるる史的証拠である。

日本国の総合的代表者としての天皇がその感動をうちつけに述べられた御製はこの意味で日本国史の神髄である。

カーター挨拶のテレビを見て「久しぶりで明治天皇御製をきいた。日本人のわれらが忘れて居たのに、外国の大統領に教へられた」とつくづく述懐した人があった。明治天皇御巡幸に関するテレビのとりあげ方、カーター大統領の発言などから、御製の意義について思ひ、御製に対する認識欠如の現代日本について、あまりにも思ふことが多いのである。

(追記)

毎日新聞七月七日「視点」欄で、ドイツ文学研究家高橋健二氏が「元首の引用歌」と題

して書かれて居るのを讀むと、カーター大統領は下田での町民集会の折にも、陛下昭和四十一年の御製「日日のこのわが行く道を正さむとかくれたる人の声をもとむる」を引用したといふ。高橋氏は「日本の元首に対する敬意と自分自身の心がまえとを同時に表白して、心にくいばかりであった」と評して居る。このコラム記事によると、シエール前西独大統領も昨春来日の際の宮中宴会で、御製「世の中もかくあらまほしおだやかに朝日にほへる大らみの原」(大正十一年摂政宮御時の御作)を引用して挨拶したといふ。外国首脳が日本研究に当って天皇御製に注目し、深い注意を払って居ることがあらためて痛感させられる。

天皇陛下は西独御訪問の折、お別れの宴でゲーテの詩「神のもの東洋は！ 神のもの西洋は！ 北と南の国も、神の御手の平和の中に安らふ」(西東詩篇)を引用して挨拶され、ドイツ国民はこれに深い感銘を受けたといふ。ケネディが西独訪問の際、ゲーテの「ファウスト」の句を引用したのとともに「この種の圧巻」と高橋氏は書いて居る。氏の小文から実に多くのことを教へられ、感激おく能はず、この追記をしたためた。

### 3 明治天皇の御連作について

昭和天皇戦後の御製には、しばしば連作があつて、一首目から二首目、二首目から三首目へと、淀みなくシラベがひびき、まことに味はひ深い。昭和天皇の皇后（すなはち皇太后陛下）も、珍鳥ヤツガシラを見て六段構成四十首の興趣溢るる大連作をものされた。

明治天皇御製はおほむね単独歌で、一首一首、玉を磨き上げるやうに詠まれ、連作は稀である。御製中、確実に連作と思はるるのは明治四十年御作の「競馬」三首である（『新輯明治天皇御集』収録）。

ならびても進みゆくよとみるがうちにいつおくれけむ駒のひと足

ときのまのあらそひながらくらべ馬おくれしかたぞ力なげなる

おくれじときそへる駒のかけあしをみる人さへぞ汗ばみにける

一首目の「おくれけむ」を二首目の「おくれしかた」で受け、三首目の「おくれじ」にひびかせ、更に二首目の結句、三首目の結句を「ぞーなる」「ぞーける」とたたみかけ、

駆けゆく馬の足音を歌調にとどろかせ、息づまるやうな競技の緊張を三首にわたって波打たせ、まさしく連作である。

大正八年編成の『明治天皇御集』（以下「旧輯本」と仮称）を拝見すると、明治三十八年の「をりにふれて」二十七首中に、連記された三首、

久方のあめにのぼれるこゝちしていすゞの宮にまゐるけふかな

さくすゞの五十鈴いすずの宮の廣前にけふ大幣おほなひをさゝげつるかな

くもりなきあしたの空に神路山かみちかうがうがうしくも見えわたるかな

未曾有の大国難日露戦役克服後、伊勢神宮に親拝され、戦勝を奉告された時の「あめにのぼれるこゝち」が全篇に溢れ、まことに感銘深い三首御連作である。

ところが、昭和三十九年公刊された『新輯明治天皇御集』（以下「新輯本」と仮称）では、最初の一首が明治三十八年の部、後の二首が明治三十九年の部に、しかも別々に収録され、三首全く別個の扱ひである。

明治天皇の日露戦後の神宮御親拝は三十八年十一月である。三十九年には御親拝の事実

はない。従つて、二首目三首目が、新輯本の如く三十九年の御詠作であつたとしても、前年の体験を詠まれ、一首目に続けられたものと解すべきであらう。「けふ大幣をさゝげつるかな」とあるから、詠作年月日に拘はりなく、明治三十八年十一月十七日の時点に身を置かれての御作であることは確實である。

至尊の御製に、民間人の歌を引き合ひに出すのは恐縮であるが、川田順の「立山行」五十四首の大作についていふと、その立山登山は昭和十年であるが、詠作は翌十一年である。このやうなことは一般に作歌事情として至極通常のことである。

もし明治天皇が御自身で歌集を編成されたならば、この三首を三十八年の部に一括されたことはほぼ確實だと思ふのである。(この他にも「凱旋の時」「凱旋観艦式に臨みて」等の御製が旧輯本では三十八年の部、新輯本では三十九年の部に収められてゐる)。以上のやうな理由から、旧輯本の編成に従つて、神宮親拝の三首を連作として味はひまつるのが自然で適切だと思ふのである。

なほ、三首中、二首目結句の「さゝげつるかな」が新輯本では「ささげまつりぬ」と記されてゐる。この他にも、新旧両本で相違する個所が多々ある。直接、天皇の御歌稿、あ

るいは編集過程の記録等を拝見することは不可能であるから、このやうに年時が相違し、辞句の相違した事情は不明である。

旧輯本（宮内省蔵版）は入江為守を長とし御歌所の歌人ら八名が委員として編纂に従事。うち民間歌人は佐佐木信綱一名である。新輯本（明治神宮刊）は甘露寺受長を長とし十四名が委員として編纂に従事。委員には佐佐木信綱・窪田空穂・川田順・吉井勇・松村英一・木俣修ら民間歌人が多く加はってゐる。信綱は新旧両輯の編纂に従事した、ただ一人の人物である。



## 二 昭和天皇

### 1 霜夜の月の御製

霜ふりて月の光も寒き夜はいぶせき家にすむ人をおもふ

風さむき霜夜の月を見てぞ思ふかへらぬ人のいかにあるかと

昭和二十三年の御製である。おそらく二首御連作であらう。寒々とした霜夜の月に向つて、いぶせき家に住む人を思ひ、いまだ帰らぬ人の上を憂へ給うた至尊の痛切な御歎きである。

陛下は、昭和二十年の歌会始において「風さむき霜よの月に世をいのるひろまへきよく梅かをるなり」とお詠みになられた。戦局最悪の時、月照らす霜夜の神前（多分賢所の広前であらう）に肝胆を砕いて世を祈らせ給うた大御歌と拝するが、敗戦後の昭和二十三年、再び霜夜の月を見そなはして、切々たる思ひをかくの如く吐露されたのである。

二首、全く無技巧、一筋に御真情を直叙された。当時の国民生活は窮乏し、罹災地には焼けトタンで囲っただけのバラックも多かつた。雨夜には雨が吹きしぶき、霜夜にはしんと冷えこんだ。シベリアには幾十万の同胞が不法にも抑留され、重労働と寒餓、死の危険に曝されてゐた。その帰らぬ人を「いかにあるかと」深く宸慮を痛められたのである。「見て思ふ」でなく、「見てぞ思ふ」と無量の思ひを字余りにして「ぞ」と強められた。この「ぞ」のひびきは実に強く、大御心がそのまま玉音となって切々と迫ってくる心地して恐懼にたへぬのである。

二首まことに凄絶。終戦の詔書に「惟オレフニ今後帝国ノ受クヘキ苦難ハ固キツクヨリ尋常ニアラス」「五内為ニ裂ク」と宣のたまはせられたことを思ひ合はすのである。陛下には昭和二十年にも二十五年にも、くり返し未帰還者を思ふ御製を詠まれた。敗戦といふ有史以来の苦境に立たれ、その重荷を御一身に担はせ給うた陛下の御苦衷を拝察し、私はこの御製を拝誦するごとに落涙を禁じえぬのである。御在位六十年、その御労苦の程をひれ伏して偲び奉るのである。

## 2 植樹祭と天皇の御歌

昭和二十二年の北陸ご旅行のとき薪炭業者に対して「木を切ったあと、ちゃんと木を植ゑてゐるか」とご下問があった。これに恐縮し、また感激して、ひとつお手植ゑをお願いしたらといふことになって、慣例を破って直接願ひ出たところ、気軽に許可され、三本の杉を細入村でお手植ゑになったといふ。これがキツカケとなって翌二十三年から植樹祭がはじまったといふエピソードは入江相政侍従の著『天皇さまの還暦』にも書かれてゐる。つまり富山県は植樹祭の起点となったのである。

天皇は植樹祭のたびに歌を作つてをられる。かつて天皇は作歌について「私は気持ち率直にあらはしたい。さういふ精神で勉強したい」（昭和二十二年六月新聞記者との会谈）と語られた。そのとほりの作風で、飾りけなく、思ったことを思ったままに吐露されてゐる。誠実なお人柄そのままといった感じで、専門家意識にわづらはされぬ、のびのびとした清純さがある。そのかはり、時にはずいぶん幼い歌ひかたもされ、類型的な作もありである。

植樹祭のお歌でも二通りあって「植樹祭に際して」と題されてゐるのは、あらかじめ作つてこられたものであらう。毎年同じやうなテーマを同じやうな表現でくりかへされてゐる。これはいはば、あいさつの歌であつて、あいさつがきまり文句のくりかへしになるのは当然であらう。しかし、そのきまり文句の歌に不思議なほど深いお心が沁み通つてゐる。

もう一種類は「〇〇の植樹」「〇〇植樹行事」などと題されてゐるもので、これは実地に植樹行事をされた感懐を歌はれたものであらう。ミツバツジが咲いてゐたとか、由布岳をながめながら苗を植ゑたとか、具体的である。

昭和三十九年「長野県八子が峰の植樹行事」では「八子が峰やしにはかに雹ひょうのふるなかをもろびとも苗うゑをはりたり」と、行事中途ではかにヒヨウが降り出し、その中で進められた植樹行事が歌はれてゐる。異常な天候で案じてゐたが、みな植ゑ終はつたといふ、ほつとしたお気持ちである。昭和三十五年「蔵王山ろくの植樹」は

人々としらはた松を植ゑてあれば大森山に雨は降りきぬ

雨の中くは鉄くはを手にして人人と苗木植ゑゆく大森山に

と二首連作になってゐる。内から自然にもりあがってくる歌心に乗るとき、連作短歌になる。この連作二首は天皇のお歌の無技巧の淡々とした美しさを示す一例である。

無技巧といへば、昭和三十一年「山口県植樹行事に際して」の「木を植うるわざの年年さかゆくはうれしきことのきはみなりけり」など、まさにそれであらう。人はあるいは幼いといふだらう。正岡子規は田安宗武の「いよいよ赤くいつくしきかも」について「子供の言葉に似たるだけおもしろみあり。この平凡及ぶべからず」と評したが、そのやうな純真及ぶべからざる作である。

釈ちやく迢てう空くう（折口信夫）は天皇のお歌を評して「御製を通じて一ばんハツとした感じを受けられることは、一つしか表現法をお持ちにならぬ——さう言っているほど純粹無垢むくなもの言ひをなされることである。私どもがもし一つより表現法を知らなかったとしたら、どんなに清潔で明らかで、もっとも正しい人間らしさを発露することができたらうといふ反省が起ころ」。「何よりも昭和御製に通じてみられる、お人がらのかくはしき、それはかう言ふお

心の幼さ——と言ふより外の表し方のない、朗らかさから出て来るものだといふことがはつきり見えて、それを感じただけでも、われ／＼の幸福感は、揺り上げられるのである」

（『昭和御製と宮廷ぶりの歌』、『みやまきりしま』付載、昭和二十六年）と述べた。まさ

に言ひつくしてゐる。

昭和三十七年には「武蔵野の草のさまざまわが庭の土やはらげておほしたてきつ」と歌はれた。これは植樹祭の歌ではないが、「土やはらげて」といふところに、草木に対するこまやかなお心づかひがあふれてゐる。それはまた、生きとし生きるものに対する天皇のお心づかひであらう。

（『北日本新聞』昭和四四・五・二三、富山県植樹祭の日）

### 3 残雪の御製をめぐって

新年発表された今上陛下の御製

夕空にたけだけしくもそびえたつ岩手山には雪なほのこる（八幡平ハイツにて）

私はこの一首を拝誦して圧倒されるやうな思ひがした。「たけだけしくも」といふ語は今上陛下が今までに使用されたことのない語である。「夕空にたけだけしくもそびえたつ」、夕空を背景にして黒々といかめしく荒々しくそそり立つ山の力がここにのたうつてゐる。山が生きてのしかかってくる。そして後半は「岩手山には雪なほのこる」と素朴に一気に詠み下され、淡々と歌ひ収められた。前半のあらあらしく張りつめ、盛りあがった力が、後半、暮れ残ったさびしい残雪に集約されて静かに息づいてゐる。

同時発表の「おそ秋の霞ヶ浦の岸の辺に枯れ枯れにのこる大きはちす葉」の荒涼としたながめ。湖岸一帯に大きな蓮の枯れ葉が続いてゐるのを見るがままに表現されたが、ここにも岩手山の御歌と相通ふ大きくあらあらしい力が一抹のさびしさを漂はせつつ天地を浸してゐる。

両首とも「のこる」といふ語を使用されてゐるが、今上陛下の御歌にはしばしばこの語が出てくる。今まで御発表になつた御作のうち十八ばかりもあらう。しかもそのうち十首

までが山の残雪についてである。明治天皇には山の新雪を詠ぜられた御製が多いが、今上陛下には残雪の山の御詠を多く拝するのである。その数例――

- 一、見たせせばつらなる峯に白雪の残りてさむしみちのくの空 (35)
- 二、そびえたつ安達太郎山に白雪の残れるさまを汽車に見て過ぐ (35)
- 三、霞立つ春のそらにはめづらしく雪ののこれる富士の山見つ (36)
- 四、霧もなく高くそびゆる火打山雪のこれるを山越しに見つ (39)
- 五、そびえたつ大雪山のたにかけに雪はのこれり秋立ついまも (43)

注。(一)内は御製作年。三の「めづらしく」、五の「秋立ついまも」は『あけぼの集』による。以前の御発表では「めづらしと」「秋立つらしも」となつてゐた。二・四は『あけぼの集』に不載。

人の心的傾向はその無意識に使用する常用語の中におのづから反映するといはれる。「残る」といふ語をしばしば使用される陛下の御心をひそかにお慰び申し上げるのであ



る。現代は伝統破壊の時代、自然破壊の時代である。もつとも貴いもの、もつとも美しいものが急速に破壊されてゆく。その時代の急流のただ中であつて、陛下は「残る」と詠ぜられ、山に残る数点の雪に淨らかな御眼をそそがれるのである。

陛下はいつも動物・植物をいつくしみ、生きとし生けるものに限りない愛情をそそがれる。「めづらしき海蝸牛うみまひまひも海茸うみたけもほろびゆく日のなかれといのる」、これは「有明海の干拓を憂へて」と題された三十六年の御製である。

武蔵野の草のさまざまわが庭の土やはらげておほしたてきつ

これは三十七年歌会始御題「土」の御製である。「土やはらげて……」そこに一つ一つの草にいたるまでやさしくいつくしまれる陛下のお心がしみとほつてゐる。「土やはらげて……」のこまやかなお心づかひ、これこそ民草にそそがれる陛下の大御心そのものである。

このいのちある植物に対すると同じやうに、陛下は山にも向はれ、山の雪にも向はれるのである。「ただけしくもそびえたつ」、そこに山は生きもののごとくそそり立ってゐ

る。陛下はまさしく山のいのちを実感されてゐるのである。大正十四年の

たて山の空に聳ゆるををしさにならへとぞ思ふみよのすがたも

ここにも山は生きた力をみなぎらせて天空にそびえてゐる。

古代日本人は、山にも海にも草にも木にも、生ける魂を実感し、畏敬した。今も大和の大<sup>おほな</sup>神神社は拜殿のみあつて本殿なく、三輪山そのものが御神体（又は御神座）である。能登の気<sup>け</sup>多<sup>た</sup>大社には本殿はあるが、なほ本殿背後の森林は神聖不可侵の入らずの森である。地方の無名の小社にも神体山や神体森がある。これを原始信仰として軽蔑するのが近代のインテリであるが、自然そのものに同化し融合して来た日本人の精神史がここに息づいてゐることを思ふべきである。この精神を失つたところに、今日の環境破壊・伝統破壊がはじまつたのである。

今上陛下の御歌を拝誦し、もつとも近代的な教養を身につけ、科学者でいらつしやる陛下が、同時に、自然を生けるものとして、動物・植物のみならず、山にも川にも島にも、深い愛情と強い実感をこめた表現をなさつてゐることを、この上なくうれしく尊くありが

たいことと感銘するのである。

思へば、「天皇」もまた単なる人為的な「天皇制」上の機関ではなくして、自然に融合し山川草木とともに生きて来た日本人の生活から、おのづから葦牙あしかびのごとく成り出でたものである。「事はみな為すにはあらず神ながら成るといふことをつつしみ思はむ」（川出麻須美）その神ながら成りいでたものである。社会の複雑な進展変遷に応じて、天皇の周囲にもまた人為的な制度が八重垣のやうに重なりあつて来たが、天皇の本質はどこまでも自然に近い清らかなものである。防弾ガラスは止むをえざる、不幸な、不自然な人工物であるが、そのガラスの内側にまします天皇の天真爛漫無垢の御心はまさに自然そのものである。日本の美しい自然と文化と生活を守るといふことは天皇を護ることと別のことではないはずである。

安保反対闘争挫折後、沈黙してみた清水幾太郎氏は最近「この人が」と目を見張らせるやうな評論を次々に発表してゐる。氏は、日本が敗戦にも拘らず統合を失はなかつたことを重視し、その大きな役割を果されたのが天皇であったことを認め、諸外国の例を引いて一度失はれた統合は容易に回復されない事実を指摘し、また無理にも統合を確立しようと

する場合必ず日本の天皇をモデルにして人工的に組織してゐることを述べ、「私たちは既に自然に持つてゐるものを新しい眼で見直してもよいのではないか」と訴へてゐる。「統合と天皇」『北陸中日』五〇・一・二（夕刊）氏は挫折の逆縁によつて深くまじめに考へぬき、つひにこの結論を得たのであらう。

深い緑に包まれた神聖な一隅で心澄まして「世の平らぎ」「国の平らぎ」を朝々神に祈りたまふ天皇こそ、この世界において何物にも換へがたい清き尊き美しき存在である。

「天の下八隅やすみの中にひとります島の大君よろづよまでに」（源 実朝）

（『国民同胞』一六四号 昭和五〇年）

#### 4 桜の御製と恋闕の民

(一)

昭和五十五年一月十日、宮中御歌会始において、陛下の御製がおごそかに朗誦され、参列の全員起立してその大御歌を拝承した。御題「桜」、

紅くれないのしだれざくらの大池にかけをうつして春ゆたかなり

テレビで拝聴しつつ、大御歌の豊かな調べに身も心も溶けゆく思ひであった。「紅のしだれざくらの」と「の」の連なりは枝垂れ桜の垂れ下った風情を偲ばせ、その桜の爛漫たる花が池に映り、池水に照り映えて、豊かな春の気を横溢させてゐる。まことに華麗で、しかも清らかに潤ひ、高貴な気品を備へた、たぐひ稀な大御歌と感動したのであった。

陛下がお詠みになったのは吹上御苑の桜であるといふ。先般『吹上の自然』と題する豪華な写真集が刊行されたが、その中にもみごとに枝垂れ桜の写真が収録されてゐる。その写真をながめつつ、あらためて大御歌を味はひかへしたのであった。

桜といへば、明治天皇も深く桜をめでられ、おびただしい桜の御名吟を残された。孝明天皇は安政二年（一八五五）の春、近衛忠熙ただひろ邸における観桜の宴に臨まれ、名木糸ざくらをめでて三十一首連作の御製を詠ぜられた。（糸桜は枝垂桜の別名）。

安政二年も幕末非常の折であった。昭和五十五年もまた内外情勢まことにただならぬ時である。かやうな時、このおほらかな大御歌を拝誦すると、とかく失ひがちの心のゆとり

をとり戻し、美しい自然に溶けこんで息づくこちがする。天つちの大きな力がよみがへってくる思ひがする。明治天皇は「いかならむことある時もうつせみの人の心よゆたかならなむ」(明治四五)と述懐され、また「萬物感陽和」(萬物、陽和に感ず)の題で「草木も萌ゆるをみれば春風に動かぬものはなき世なりけり」(明治四二)と詠嘆された。季節の移りくるまにまに草木も木も芽吹き、爛漫と花咲く、その自然の力を思ひ、事ある時の豊かなる心を思ふのである。

(二)

ところで、枝垂桜といふと、富山県には内山家(富山市宮尾)に名木の枝垂桜があつて春毎に爛漫と咲きにほふ。この内山家は、富山藩の十村役とじらやを勤めた家柄(十村は他藩の大庄屋に相当)で、代々すぐれた文化人が現れた。一昨年(昭和五十三年)、内山家が屋敷・庭園・家財もろとも県に買上げられたため、私は命ぜられてその古文書・典籍等を調査する機会を得た。

その多数の古書の中に、うやうやしく保存された桐の小箱があつた。七代内山逸峯はやくみね(安

永九年、一七八〇年、八十歳で歿）が残したものだ。箱の中には錦の包と白紙の包の二品が納められてゐた。白紙の包には「石見国高角山 人丸大明神御境内 筆かきの葉 時に明和式年（一七六五）九月六日 逸峰」と認められてゐた。干からびて黒ずんだ一枚の柿の葉が一二百年の歲月のため柿の葉とは思へぬほどであつたが―収められてゐた。

逸峯は歌道に打ちこみ、柿本人麻呂を深く敬慕し、六十五歳の春、富山を出立、はるばる石見国まで旅行し、人麻呂を祀る高角及び戸田村の兩人丸明神（柿本神社）に参拝、断食参籠して百首歌を奉納し、宿願を果した。おそらく感涙滂沱として社頭に跪拝したことであらう。逸峯は境内の柿の木を貰ひ受けて帰り、この木で人麻呂像を彫刻させ、屋敷地の一隅に社を建てて、この像を祀つた。その時逸峯が詠じた長歌は「御姿を刻みて代々に敷島の道の守りと仰ぎ見んかも」と結ばれてゐる。柿の葉はまさしくその時の記念の品なのだ。（逸峯は七十三歳になって再度石見の人丸明神に参拝してゐる）。

逸峯の人麻呂崇敬は連鎖反応を起こした。富山八代藩主の生母自仙院も逸峯にならひ石見国から人丸明神境内の土を取寄せ、富山町の西、呉羽山の山中、桜谷の一隅にこの土をもち、その上に社を建て、人麻呂神像を刻ませて、これを祀つた。時に寛政八年（一七九

六)。桜谷は名の通り桜の名所で、一目千本とも呼ばれた地。その爛漫たる花の中に人麻呂は祀られたのであった。この社頭で歌会・句会・詩会等が催され、富山藩文芸の一中心地となった。また呉羽山一帯で産する茶には人丸茶の銘がつけられたといふ。

明治三年、神仏分離のあふりを食らって人麻呂社は破却された。人麻呂神像は危く難を免れ、同地長慶寺に安置され、今に伝はつてゐる。人麻呂社の跡にはむなしく草が茂り、人麻呂が詠じた「春草の茂く生ひたる、霞立つ春日の霧きりれる、…見れば悲しも」(1、二九)を髣髴させる。桜谷の桜は多く伐られ、地名も今は名のみとなった。一方、内山邸内社の人麻呂社も、昭和三十六年秋の台風で倒壊し、今は土台を残すのみで、神像はこれも屋内の床の間に安置されてゐる。

内山逸峯はしばしば大伴逸峯と名のつてゐる。内山の家系と大伴の家系とがどのやうにつながるのであるのか定かではないが、このやうな名を強調するのは大伴家持を慕ふ心情からであらう。萬葉の盛期を代表する人麻呂と、晩期を飾る家持を、逸峯は念々に思慕してやまなかつたのであらう。



## (三)

ところで、桐の箱の二品のうち、錦の包を開くと、さらに白紙にくるまれたものがあつた。その包み紙には「禁裏様被<sup>く</sup>為<sup>な</sup>下<sup>さ</sup>ノ御昆布也」と記されてみた。禁裏様、すなはち天子様の下賜された昆布なのだ。

逸峯は京都に上り、御内会に侍して「名所春曙」の題を賜り、「山はみな花にしらみてさゝ波やむかしながらの春の曙」と詠じ、これが公卿達の賞讃を浴び、叡聞（天皇がお聞きになること）に達し、御<sup>の</sup>斗<sup>し</sup>昆布を賜はる榮に浴した。無上の光榮に感激した逸峯は恩賜の昆布を故郷に持帰り、家族とともに拝味したが、その一片だけは紙にくるみ、錦に包み、桐の箱に納めて家宝としたのであらう。菅原道真の「捧持して毎日餘香を挿す」の詩句を思ひ合せ、私はその昆布の一片を押しただいて、そつと香を嗅いでみたが、二百年の歳月を経て、もはや潮の香は残ってゐなかつた。しかし、歌道の達人を嘉<sup>よ</sup>みせられた大御心は芳霧のごとくあたり立ちこめ、天恩に感激した草莽の歌人の恋<sup>づ</sup>闕（宮廷思慕）の至情は馥郁<sup>ふくいく</sup>として迫る思ひであつた。

内山家の床の間には逸峯自筆の歌の軸がかかつてゐた。「山はみな花にしらみて」の一首、逸峯生涯の記念作であつた。そしてその軸の下に安置されてゐるのは、黒々とした人麻呂神像であつた。この歌は堂上風・近世風であつて、萬葉調ではないが、それなりに美しいひびきを持つてゐる。この作は直接には平忠度の「さざ波や志賀の都は荒れにしを昔ながらの山桜かな」を念頭においての作であらうが、間接には人麻呂の近江荒都歌「さざ波の志賀の大わだ淀むとも昔の人にまたも逢はめやも」(1、31)とひびきあつてゐる。人麻呂神像と同じ場所にあるのを見て、ひとしほその思ひを深くしたのである。宮廷敬慕と萬葉思慕は逸峯の生涯を貫く心情であつた。

(四)

逸峯の歌が叡聞に達し、昆布を賜つた年時は記されてゐないが、逸峯には別に『内侍所御鈴拝聞記』と題したメモがあつて、これは明和六年四月の記である。同じ折のことかと思はれる。とすれば、当時の天皇は第百十七代後桜町天皇(女帝。御在位、宝曆一二—明和七、一七六二—一七七〇。御在世、元文五—文化一〇、一七四〇—一八一三)にましま

す。

早天が続いたときの後桜町天皇の宸筆消息に「扱々<sup>さてさて</sup>日日雨をねがひ候事、今朝も拝の時、又内侍所にて誠心に祈り申候事にて候。何分何分衆民の為<sup>ひと</sup>に偏<sup>へん</sup>に偏<sup>へん</sup>に一雨の御恵をのみ祈り祈り入<sup>まひらせ</sup>為<sup>し</sup>参候事に候」としたためられてゐる。(肥後和男編『歴代天皇紀』より引用)。「何分何分」「偏に偏に」「祈り祈り入」と畳みかけるやうにお認めである。「衆民の為」肝胆を砕いてのひたすらなる御祈念である。大御心とはかくの如きものかとあらためて感激するのである。天皇はまた、

朝な／＼心のかゞみみがきそへて祈るまことは神や知るらむ

とお詠みになつて居られる。祈雨の御消息と併せて感銘深く拝誦するのである。天皇はまた「あめつちとともにつきせぬ敷島の道は神代のひかりなるらし」「神代よりながくつたへて天地とともになえせぬしきしまの道」と、くりかへし敷島の道―歌道に対する御信念を詠ぜられて居る。その天皇の御耳に逸峯の歌が達したのであった。

天皇の御消息には内侍所<sup>ないしどうらう</sup>にて祈念されたことが記されてゐるが、内侍所とは八咫鏡<sup>やた</sup>を奉

祀した宮中の聖所である。(現在は賢所といふ)。その内侍所の遙拜を特に許された逸峯は、控の間で内侍所の鈴の音を拝聴したのである。

「板縁エ何れも罷出候て、待合、かしこまり居可<sup>まうすべき</sup>申旨、被<sup>まうされ</sup>申候ニ付、其通相心得、罷<sup>まかりあり</sup>在申候所、内侍所の御鈴はるかに聞え申候。余程の間、御鈴の音、鳴止不<sup>やみまうさず</sup>申、殊勝にも又難<sup>ありがたくおぼえ</sup>有覚奉りし也」と逸峯はその感動を書きとめてゐる。

鈴といへば、第一百十二代靈元天皇は

「朝な<sup>あ</sup>く<sup>く</sup>神の御前<sup>みまへ</sup>にひく鈴のおのづから澄むこゝろをぞ思ふ」と詠ぜられた。天皇は毎朝神前で鈴を鳴らして祈念され、その鈴の音に御心を澄まされたのである。その神韻<sup>しんいん</sup>鏗<sup>けい</sup>たる宮中の鈴の音を逸峯は拝聴したのであった。

内侍所の鈴の音は、越中へ帰郷後も、逸峯の耳底に鳴り続けてゐたであらう。逸峯は別に宮中歌御会始<sup>うんごかいしめ</sup>の御製御歌を書きとめたメモ帳を何冊も残してゐるが、御製のしらべは内侍所の鈴の音とひとつにひびきあって、逸峯の精神生活に深い影響を与へたことであらう。

地方農政の事実上の担当者たる十村・大庄屋クラスが、土地土地で果たした指導的役割を

思ひ、これらの人が日本の国民思想の形成護持に参与した力を思ひ、内山逸峯といふ傑出した人物をあらためて追憶するのである。

逸峯の子孫十二代松世（号外川）は漢詩人で、徳富蘇峰・国分青厓<sup>がい</sup>・若槻礼次郎らとも親交あつたが、その松世が紀元二千六百年を奉祝した詩の中で「桜花万朶<sup>ばんだ</sup>、春如<sup>レ</sup>海」と詠じてゐる。「春、海の如し」まさに朗々誦すべき句である。逸峯も松世も桜花を愛し、桜花の名吟を残した。その内山家の庭には今も爛漫と名木枝垂桜が咲く。そして私は又もや今春の桜の御製「春ゆたかなり」にかへり、七たび八たび大御歌を拝誦し、この桜咲く美しき国に生くる幸を深く思ふのである。

（『国民同胞』二二五号 昭和五五）

## 5 「あけぼのすぎ」の御製をめぐって

コスモスの和名をアキザクラといふ。陛下はお歌の中で「あきざくら」とも「コスモス」ともお詠みになった。

コスモスは<sup>じょうじょう</sup>嬌々たる草花だが、<sup>ていてい</sup>亭々たる樹木で、同じやうに和名・洋名併用されてゐるのは、メタセコイア（あけぼのすぎ）だ。大阪市立大の三木茂博士がこの植物の化石を

研究し、新種と認めて、昭和十六年、メタセコイアと命名した。(セコイアといふのはアメリカに茂ってゐる大きな樹種の名で、その上に「後」を意味するギリシヤ語の「メタ」を冠した由)。その化石植物が昭和二十年(二十一年とも)支那(中国)の奥地四川省・湖北省の山間の谷あひに自生してゐるのが胡博士によつて発見され、「生ける化石植物」として世界の学界を驚かした。米國からメタセコイア探検隊が組織派遣されたほどであった。かくて、その種が持ち帰られて、アメリカで育てられ、これが世界各地に拡がった。

カリフォルニア大学のチエニー教授がその実生かしょうの苗を持って来て昭和二十四年天皇陛下にさし上げた。この苗は吹上御所花陰亭の傍に植ゑられた。日本で一番古いメタセコイアの苗木だ。その後、日本の各地に植ゑられたが、富山県では、富山城址公園の東側、前田普羅句碑の周辺に数本、亭々たる大木に生長してゐる。県民会館別館の内山邸(富山市宮尾)の庭(人麻呂神社旧跡の前庭)にも一本植ゑられてゐるが、これも見上げるやうな大木になってゐる。実に生長の早い、たくましい木だ。

昭和六十二年の歌会始に「木」の御題で、陛下は、

わが国のたちなほり来し年々にあけぼのすぎの木はのびにけり

と詠まれた。敗戦後四十二年、いくたびも危機を乗り越え、つぶさに辛酸を嘗めて、わが国は驚くべき復興を遂げたが、その年々にアケボノスギも生長し、かくも大木になったのだ。その木の生長に目をとめられて、戦後四十年にわたる国の歩みをしみじみと実感せられたのであらう。

丸谷才一・山崎正和両氏の対談（『中央公論文芸特集』昭和六十二年春季号「対談、日本人の表現、5、歌会始から語り始める」）の中で、丸谷氏は、この御製について、

「僕はこれを聞いて、非常に感心した。」「あるいは、こういったほうがいい、宗教学者エリアーデが伊勢神宮で感じた、それにほぼ近いような感銘を僕は受けました。」

「これをアララギ系の歌人ならば『メタセコイアの木はのびにけり』とやったと思うんですよ。たちまちにして、だめになる。それを『あけぼのすぎ』と詠んだ。これは、非常によかったと思うんですね。」

「山崎さんが、歌の中にドラマがなくて素直に流れているのがいいとおっしゃった。素直

に上から下まで真っ直ぐにくる、それはほぼ帝王調というものの特色でしょうね」「すっきりして気持がよくて、伸び伸びとして、歌合わせで勝とうなんて邪念がなくて、そういう詠みっぷりです。」

「天皇歌人には、たとえ俊成であろうと定家であろうと、かなわないような何かすごいものを持っている人があらわれる。後鳥羽院ほどではないにしても。それに通う要素をこの歌も持っています。」

山崎氏は、

「ついでに、とうげん（今上天皇）の歌風について一言いわせていただきますと、具体的な、人間としての観察、感想の素直さと、国家の象徴としてのいわば祝いごと、広義の『政治性』がうまくマッチしているのが、特色なんですな」

などと述べてゐる。いはゆる近代現代風の歌論とは別の角度から、縦横に論じあつてゐて、興味深い。

ところで、アケボノスギといふ美しい和名は誰がつけたのか。チエニー教授の陛下にさし上げたのが、この木の苗の日本に渡来した最初だとすると、ひよっとしたら陛下の御命



名ではないかと思って、富山市立図書館で植物・林業・庭園などのコーナーで念入りに調べたが、つきとめることができなかった。そのことを友人下関在住の宝辺正久氏宛の手紙でちよつと洩らしたところ、宝辺氏は、私の手紙の一節を、その編集されてゐる雑誌『国民同胞』の一隅に載せて下さった。

すると、たちどころに反応があつて、北九州市の中村東つかねといふ方（元同市教育研究所長）から、「メタセコイア——生ける化石植物」といふ三木茂博士一九五三（昭和二八）年の論文の抜刷を同封して教示された。

チエニー教授は *Dawn Redwood* すなはちアケボノセコイアといふ英語名をこの植物に与へた。一方、支那（中国）では、湿润な谷間に生育しているところから、水杉といふ名を与へた。この兩名にちなみ、「アケボノスギといふ名を木村博士が与えている」と三木博士はこの論文の中で記述されてゐた。命名者は木村博士だったのだ。

ただし木村何といふ方なのか不明で、中村氏はそのため、わざわざ渡来植物研究の権威者に照会して下さったが、該当しさうな方が四名もあつて、特定できぬとのことであつた。

中村氏とは別に、宮内庁高官の、ある方が私の記事に目をとめられ、陛下の御命名でないことを陛下に直接おうかがひして確かめた上、陛下の御指示によって御研究所の資料で調査して下さった。その結果、木村陽二郎博士が命名者であることが確認された。木村博士の論文「近頃話題の植物アケボノスギ」(昭和二五)のコピーも送っていただいた。その論文には「和名をアケボノスギと呼んでおく」と明記されてみて、疑問が完全に氷解した。コピーには「生物学御研究室」の蔵書印も黒々と写ってゐて、恐懼感激した。

昭和六十二年九月、陛下は大患に罹られ、大手術を受けられた。国民ひとしく心を痛めて御快癒を祈念し、幸ひ陛下は回復され、十一月五日、はじめて吹上御所付近を散歩された。その折、陛下の御覧になった植物の名が報道関係者に伝えられたが、側近がメタセコイアと言ったのを、陛下は「アケボノスギと訂正するよう」指示されたといふ。「読売」「朝日」十一月六日付記事)。

メタセコイアが標準的名称で、ほとんどすべての植物図鑑がこの名を採用してゐる。アケボノスギを別名として付記してゐる図鑑もあるが、全く無視してゐる図鑑さへあるのだから、メタセコイアで決して誤ではない。それをあへてアケボノスギと訂正されたといふ

ことは、よほどの美しい和名が陛下の御心に叶ったのであらう。(昭和五十五年刊行の、天皇・皇后両陛下の御歌集の名も『あけぼの集』で、この語に対する陛下のお好みの程がしのばれるのである)。

アララギ系歌人ならばメタセコイア、帝王調ではアケボノスギといふ、前記丸谷才一氏の評言も思ひ合はせられて興味深い。

(追記)

その後、重ねて北九州市の中村氏から資料を贈られた。「中国四川省磨刀溪の祠の神木メタセコイア」と題するチエニー教授撮影の写真のコピーで、祠の背後には、天を突くやうな巨大なアケボノスギが亭々とそびえてゐた。御神体木かとも思はれる。支那奥地でこの木が神木として崇められてゐることは誠に興味深く、またその神樹扱ひの状況が、わが国における鎮守の社の神木さながらであるのを見て、両国民間信仰の共通点につき、研究意欲油然而たるを覚えたのであった。

(『秋桜』五号 昭和六三)

(再追記)

○丸谷・山崎両氏の対談は、その後、単行本『見わたせば柳さくら』(中央公論社刊)に

収めて刊行された。

○昭和天皇崩御された後、最後の御遺著『皇居の植物』が刊行された。「裕仁」の御名で昭和六十三年九月（すなはち御病臥の直前）、執筆された序文には、アケボノスギに特に言及され、「米国と中国と日本とを結ぶ協力が調査により成果をもたらした」ことを「誠に喜ばしい」とお書き添へである。本文中にも、アケボノスギについては特に詳しく記され、その「橙褐色葉が朝日を浴びて輝くような光景が美しい」とお書きで、この樹に対する並々ならぬ御愛好の程がうかがはれる。

新聞・テレビ等の報道によると、武蔵野陵の周辺には、故陛下お好みのアケボノスギなどが植栽されたとのことである。

## 6 あかげらの叩く音

昭和六十四年元日発表の御製

伊豆須崎の春

みわたせば春の夜の海うつくしくいかつり舟のひかりかがやく（六十三年三月）

道灌堀

夏たけて堀のはちすの花みつつほとけのをしへおもふ朝かな（同七月）

那須の秋の庭

あかげらの叩く音するあさまだき音たえてさびしうつりしならむ（同九月）

天皇陛下の深刻な御病状から拝察して、今年恒例の新春の御製発表は行はれないのではないかと案じてみたが、宮内庁から三首の「天皇陛下のお歌」が発表され、元日の新聞各紙に掲載された。

従来は、陛下御自ら発表すべき御製を選定されたのであらうと思ふが、このたびは、御詠草中から宮内庁が選んだのであらう。「伊豆須崎の春」「道灌堀」「那須の秋の庭」の各一首。季節は春・夏・秋。場所は皇居と須崎・那須両御用邸。季節と場所を勘案して選び奉ったのであらう。

出血と輸血をくり返され、最高血圧は百を上下し、侍医の問ひかけにも、わづかに反応

をお示しになる程度で、お話も今はなさらず、昏々とお眠りの時が多いといふ。その陛下を、心重く、胸痛く偲び奉って、この三首の御製をしみじみと拝誦したてまつるのである。

一首目。三月、伊豆須崎での御製である。春の夜の海上にいかつり舟の漁火光り輝くさまを「うつくしく」と詠まれた。「近代短歌」では「うつくし」など感情を直叙する語はなるべく使用せぬ傾向があるが、陛下は昭和十四年の歌会始に「高どののうへよりみればうつくしく朝日にはゆる沖のはつしま」と詠まれたのを始め、「秋ふけてさびしき庭に美しくいろとりどりのあきざくらさく」（昭23）、「色づきしさとりにばらそよごのみ目にうつくしきこの賢島」（昭26）、「水きよき広瀬川への谷ぞひは木々のもみぢに美しきかな」（昭27）、「心こめし仕掛花火は堀の辺の水にうつりてうつくしく見ゆ」（昭28）、「藤の花こずゑにかかるはつ夏は那須の林のうつくしきとき」（昭29）、「見てあれば色とりどりの美しき花火ぞ開く海の夜空に」（昭33）、「建物も庭のもみぢもうつくしく池にかけうつつ修学院離宮」（昭60）、この他にもくり返し、お感じになつたそのままを「美し」とうち

つけに詠み下された。作歌技術などといふ窮屈な小手先のわざを超えた、天真爛漫・天衣無縫ともいふべき大御心が「うつくし」の語に匂ってゐる。

詩人高村光太郎は「美しきもの満つ」といふ語を愛し、しばしばこれを揮毫してゐるが、美しき心には、鏡に映るが如く、ものみな美しく見えるといふことを、改めて思ひ、美しき大御心を偲びまつるのである。

陛下は、海上の漁り火にいくたびか御目をとめられた。昭和三十三年、秋深き富山湾<sup>ひ</sup>見沖の漁り火、六十年、米子市沖合の漁火、六十一年、伊豆の海暁の漁火を詠まれ、このたびまた春の漁火を歌はれた。私は、これら漁火の御製を拝誦すると、『古事記』の一節を思ひ出す。大国主神が海辺に立ち「吾独りしていかにかよくこの国を得作らむ、いづれの神と吾と能くこの国を相作らむや」と長嘆息したとき、海原を照らして依りくる神があった。この神を祀ることによって国を治めえたといふ。『日本書紀』も同じ伝承を記録し、この「神<sup>あや</sup>しき光」は大国主神自身の幸魂<sup>さきみたま</sup>・奇魂<sup>くしみたま</sup>であったと伝へてゐる。その暗夜の海上にかがやく光を思ひ合せるのである。

また、昭和六年、大演習統監を終へられた陛下が闇夜の鹿兒島湾を御召艦で帰途につか

れたとき、陸上では、里人たちが今ごろ陛下のお船が沖を御通過になる時だと語りあひ、篝火かがりびを焚たきき、松明たいまつ・提灯ちようちんをかざし、こぞつて陛下をお見送りしてゐた。陛下は、お召艦のうす暗い甲板にただ一人お立ちになって居られ、この民の焚く奉送の火に気づかれ、直立不動、挙手の礼でこれに応へられたといふ。その逸話を思ひ出すのである。これは、海上から陸上の火を認められたのであるから、漁火の場合と逆になるが、また奉送の火と労働の火といふ点でも事情は異なるが、暗夜の海を隔てて民のともす火を見そなはしたといふ点で共通し、私は深い感銘をもつて重ね合はせて味はふのである。

漁り火は『萬葉集』にも数多く歌はれたが、暗夜海上の光は、特別の情感をよびおこすものである。海上で働く無名辛勞の民の魂がそのまま燃えてゐるやうな漁り火を、陛下は「うつくし」と見そなはされた。まさに、名も無き民の心こそは、陛下御自身の幸魂奇魂である。陛下あつての民、民あつての陛下である。陛下をお守りする民の魂が漁り火となつて美しく燃えてゐるのである。

陛下御重体と伝へられたとき、皇居坂下門にかけつけ、門外を埋めて熱禱をささげた民のまごころ、暗雨の下で光り輝いた民の魂をも重ね合はせて思ふのである。



二首目。深まりゆく夏の皇居道灌堀を埋めた蓮を見ての御詠である。江戸城の創建者は歌人武将の太田道灌と伝承され、皇居（旧江戸城）内に今も道灌堀の名を留めてゐる。

（学研が御在位五十年を記念して刊行した豪華本『皇居の四季』には道灌濠を埋めて茂る蓮の見事な写真が収められてゐる）。

前年、大手術を受けられた陛下は、道灌堀の蓮の花をしみじみ見そなはされた。蓮花は仏教ゆかりの植物。その蓮花から仏の教へを思はれたのである。明治維新の際、新政府の復古神道政策によつて、神仏は分離され、皇室と仏教との表向きのつながりも断ち切られた。しかし、それまでの歴代天皇は厚く仏教を信仰された。聖徳太子の如き、日本仏教の創業者（各宗派を超え、各宗派を綜合しての開祖）ともいふべき方も出られた。皇室と仏教との縁は実に深く、実に長い。明治以後といへど、特別由緒ある寺院と皇室とのかかはりは深く、例へば、高野山の弘法大師衣替の式には、勅使が御衣を奉じて参向するといふ。親鸞に見真大師の勅諡号をおくられたのは明治九年である。先年、高松宮殿下薨去の折、皇族は古例に従ひ、各自「般若心経」を謹写して奉納されたと新聞は伝へてゐる。今

上陛下も「御ほとけにつかふる尼」（昭33）と敬語を添へて仏を詠まれた例がある。天つ日嗣を嗣ぎます神ながらの伝統と皇室仏教とは不即不離につながつてゐる。その仏の教へを、陛下はしみじみと思はれたのである。

三首目。九月、那須での御作。早朝、御用邸のめぐりの木立にしきりにアカゲラ（キツツキの一種）の音がした。芭蕉が「木つつきも庵は破らず夏木立」と詠んだ、そのキツツキの激しく木を叩く音に陛下はじつと耳を澄まされたのであらう。やがてその音は止み、あたりは不思議なほど静かになった。一般に、鳥の鳴き止んだ後の静けさには、何かうつろなさびしさがある。「音をたえてさびし」と、陛下は身に沁みてさびしく感じられ、「うつりしならむ」、どこかへ移動してしまつたのだらうと、ぽつんと言ひ添へられた。

その月の八日、陛下は那須から帰京され、十八日高熱を發して御予定の大相撲観戦を俄かに中止、十九日相当量の吐血、以後、容易ならぬ重病の床に伏された。この一首、まさに御重病直前の御作である。「音をたえてさびし」「うつりしならむ」、この限りなくさびしい御製のしらべを、くり返し拝誦しつつ、私は落涙を禁じえないのである。ああ、かな

し、かなし。御製を拝誦しつつ私は千祈万禱、ひたすら陛下の御平癒を念じ奉るのである。(昭和六十四年一月二日稿)

『国民同胞』三二七号 平成元)



第三章 川出麻須美とその周辺



## 1 川出麻須美の歌

川出麻須美かはでますみといふ歌人のことについて、お話し申し上げたいと思ひます。川出麻須美と申しましても、御存知でない方が多いかと思ひます。有名な人と、無名な人と言ひますと、どうしも有名な人の方が偉いやうな印象を一般に与へるわけですが、必ずしもさうは言ひ切れないわけでして、その当時は、ほとんど世に知られてゐなかつた人が、何十年も、何百年も後になつて、達眼の士、本当の目を備へた人が、その人を発掘し、しかもそれは、たゞ埋もれてゐたものが発掘されるといふことだけでなく、新しい文化を築くための、大きな目印になることがよくあります。

たとへば、正岡子規が今までの歌を革新したわけですが、これは今までの旧派の歌といひますものは、奇麗ごとゝいひますか、さういふものを歌と考へてゐたわけですが、正岡子規はそれを打破した。『古今集』を一番立派なものとして考へ、紀貫之、藤原定家といった人を、一番秀れた歌人と考へてゐた今までの考へ方を、根本から覆して、『萬葉集』のや

うな、本当の人間のまごころを歌った歌に帰らうといふ革新をやったのです。

その正岡子規が掘り起した人に、田安宗武たやすむねたけとか、平賀元義ひらがもとよしとか、橘曙覧たちばなあけみといふ歌人がをりました。これらは江戸時代の歌人ですが、ほとんど天下には知られてゐなかつた人達です。それを正岡子規が発掘しまして、発掘すると同時に、それらの歌人を、革新の一つの目印にして行つたのです。今では日本の歌の歴史を書いたものゝ中で、田安宗武、平賀元義、橘曙覧の名前の載つてゐないものはないと思ひます。正岡子規が歌の革新を始めた明治三十一年の二月、「歌よみに与ふる書」といふものを発表してからでして、それまでこれらの歌人は、ほとんど世に知られてゐなかつたのです。

これから申し上げます川出麻須美といふ歌人も、現在ほとんど世の中に知られてゐないと思ひます。今日までの、歌の歴史を書いた書物を見てみましてもほとんど出てをりません。ただ斎藤茂吉の書きました、『明治大正短歌史』の中に一度その名が出てゐる程度です。

その川出麻須美の歌についてお話いたします。

麻須美の歌は非常にたくさんありまして、こゝで一つ一つ紹介することはとても出来ま



せんが、明治から昭和に至る活躍期の歌の中で、特に私が感銘を受けたものを紹介したいと思ひます。

明治の歌の中には、例へば

遠浪のひゞき悲しくむら千鳥渚にちかく鳴きやまずけり

いめのごと見やる眼まなこに海原のうねりやまずもちからにみちて

夢のやうに見てゐるまなこに、海原のうねりがやまないで、力に満ちてうねってゐる。これと相応するものが、川出麻須美の詩の中にも出て来ます。「暗夜」といふ長詩の中に、

机の前にすわって居るうちに、

いつか夜はふけてしまった。

ぼくは地に居るをとめのやうに、

すべての音に耳をひらき、

すべての風にむねをひらく。

求めるが我か、

来たるが我か、

いろもない水のながれの

おこつては消えていく。

自分の体をじつと静かにしてゐて、外からのすべてのものを、自分に取入れてゆくといふ、動いて止まぬものを、動かぬ作者が、一つに統一してゆくといふ調子が強く出てをります。川出麻須美の明治期の歌や詩の中には、「にぎりて放さぬ力」とか、「はつくにししぶ力をにぎりて」或は、「おのれをにぎりて」といふ言葉がよく出て来るのです。同じ「暗夜」の詩の中にも

あゝもつれる心を無言にとりすべてはなさぬ手もとの、

かなしいかな あゝ 絶大の意志の力よ！

もつれる心を、無言にグッととりすべて、放さぬ手元といふやうな、何かをいつも握りしめるやうなものを歌ってをります。

この川出麻須美といふ人は、大正七年から大正八年まで、富山中学校の教諭として、在職してをられたことがあります、その時、雪の呉羽山へ登っての歌の中に、

高山ゆおし下りきてひろごれる雪かも満てる富山国原

高い山から、雪が広がって来て、富山国原一杯に満ち満ちてゐる。そして「雪かも満てる富山国原」と、歌の調子が広がりはなしにならないで、最後に引き絞られてをります。或は神通川の水を歌った歌の中に

神通の水せき上ぐる橋柱いまも目にありそのはしばしら

神通川の橋脚に川水が当って、水が激しくせき返されてゐた。それが富山を去って二十数年たった今も、ありありと目に浮んで来る。普通なら「いまも目にあり忘れかねつ」といふ風に流れてゆくのでせうが、「いまも目にありそのはしばしら」で、又ぐっと元へ

戻って来る。何か手元にぐっと握りしめるものがこゝにも出てゐるのです。

これと対照して味ははれますのは、田代順一といふ大正期の歌人です。この人の歌は、自分が外の動きの中に飛び込んで行くやうな感じがするのです。

雪をとばす荒海さしてこぎいづる裸の男おとこの子よ見るに勇まし

打つ波を目ざし船おすもろ声のもろもろの音を天にひびかしめよ

うちさかまきあらぶる波をま二つに裂きこぎいでむ今ぞ舟子ら

船に立ちて波のまにまに櫓をすぶるおやぢの姿神にかも似たる

力つよき海のおやぢの背にあればそらゆ底ゆとおもしろきかな

海の中へ乗り出して行く舟の中に、自分も身を躍らせて乗って、波のうねりに体を動かしてゐるやうな歌ひ方をしてをります。

川出麻須美は、昭和期の歌になりますと、明治期の作品とは対照的に、「握りしめた拳こぶしをやはらかに開いてくれる力」といふゲートの言葉のやうに、今まで握りしめてゐた力

を、今度は静かに開いてゆくのです。

物みななのやみ集まる現し身を投げ出し生く天のまにまに

いろんな悩みの集つてゐるこの身を投げ出して生きてゐる。「天のまにまに」、天の為すがまゝにといふ、何か大きなものに身を任せ、身を投げ出して生きてゐるのです。或は

高空はつね晴れたりき大地は雲はびこりてやまず動けど

大地の上には、常に雲が集つて止まず動いてゐるけれど、高い空には雲もないわけですから、常に晴れてゐる。これは決して、自然科学的な事実を述べてゐるのではなくて、人生には雲がかゝつてゐるやうに、様々な苦しみがあるが、その奥には、いつも晴れてゐるものがある。それを信じ、それを力として生きてゐるのだ、といふ気持だと思ひます。

ひとり坐し心に思ふくら空にかくしやくと照る日の大御神

一人坐つて心に思ふ、この真暗な空のずっと奥の方には、雲もなく常に赫灼と太陽が照

つてをる。それを思ふことが心の支へとなって現状にくよくよしない力となるのですね。

世にあるもなきも同じぞたまきはる命はかよふ万代よろづよまでに

これは、ある人に年賀状を出したが、その人が既に死んでしまつてゐた、といふことがわかつた時の歌の一つなのです。生きてゐるのも、死んでゐるのも、亡くなつてゐてもこの世にゐても、同じである。命は永久に通ひあつてゐる。宗教的な深い心持です。

事はみな為すにはあらず神ながら成るといふことをつゝしみ思はむ

何事も自分の力でやつてゐるのではない。自分の力でやつてゐるやうに見えても、それは神のまゝに、すべてなつてゐるのだ。そのことを慎んで思はう。そこに大きな心の安らぎがあるのです。

樵きこりが鋸を引く時に、自分の力だけで引かうと思ふと、疲れるだけでどうにも木が切れな  
いが、鋸の重さと木の重さとに、すべてをまかして手を動かしてをれば、自然に切れてゆ  
くといふ。それが本当の熟練した樵であるといふ話を聞いたことがあります。或は親鸞上

人の信仰態度、他力易行たうきいぎようと言ひますか、人間が如何に修行して救はれようとしても、結局無駄であつて、阿弥陀といふ——これは仮の名前ですが、阿弥陀といふいはば宇宙の大生命に、自分のすべてを投げ出して帰依することによって、自由な生き方が出来るといふことを、親鸞上人は体得してをります。或は孔子が、年を取つて初めて「心の欲する所に従ひて矩を踰のりえず」といふ風に述懐してをります、このやうな境地と、川出麻須美の昭和期の作品の示す境地との間には、何か相通ふものが感ぜられるのです。

明治の作品には、青年の悩みを強く握りしめ、その握力で溶かして行くやうな、不思議な力を持つてをりますし、昭和の作品には、その悩むものをほのぼのと和げていくやうな、広々とした大きな力を持つてゐるやうに思ふのです。

川出麻須美は、小さい時、初めて学校へ行った時に、何となく恐しくて泣いたさうでして、そのことが歌にも歌はれてをります。

学び屋にはじめて行きて心おびえ泣きにしさがはなほ失せずけり

くらだにの丸木の橋のおそろしきこの世の人にまじるくるしも

といふ風な、どちらかといへば人間嫌ひのやうな歌もあります。さうして蟹を歌った歌の中に

人見れば穴にかけこむ海蟹のうしほをまねく心たれ知る

蟹は潮招きと言ひまして、鉞を上げて如何にも海の潮を招いてゐるやうな、仕種しぐさをすることがありますが、人を見ると逃げて穴にかけ込んで行く蟹が、潮を招いてゐる。あの心を誰が知ってゐるであらうか。さういふ歌の中に、川出麻須美の明治時代の心が、強く歌ひこめられてゐると思ひます。或は

とほ空にすめる富士がねなつかしや我を招くかつちなる我を

富士山が我を招くやうに見える。自然の中に、自分の命を見出し、その自然と一体化し



てゐるのですね。

我々が普通いやらしい動物と感ずる蠅に対してさへ

さみだれの小暗き室へやに日ねもす小蠅むれ飛べり羽はねつかれむに

五月雨さみだれの頃の暗い部屋の中で、一日中、小さな蠅が飛んでゐる。羽が疲れるであらうにと、蠅にも自分と一体化したやうな同情を歌つてゐるのです。それから「故郷のゆふべ」といふ、九首の連作があります。

檐のきさきに蚊やりたきつゝ母上をとも少女のうはさ聞くがたぬしさ

針まなび郷さとにかへりしをとめらは今はおほむねとつぎしといふ

心なき夫つとにあへりしをとめ子のいたはし身の上うきくに忍びず

うら若き妻くるしむるその男に我れ文やらばあやしまれむか

あげしほのみち来る思ひさまさむといでゆけど我が心なごまず

杖つゑとりて草うちすゝむはたけ道雲足たれて鳴り来くゆふさめ

松並木よこ吹く風に道におちこゝら光れるほたるこあはれ

羽根をれてつちにおつとも生けるまは光れほたるこあめのまにまに

音もなき田道にともる汝なが光くらき胸戸むねどをてらすがごとし

これは大学へ行つてゐて、まあ夏休みでせうか、古里へ帰つて来て、軒先に蚊遣かやりを焚きながら、母から近所の乙女達のうはさを聞くのが楽しい。聞いてみると針学はりがくび——裁縫ざいほうを習つて故郷へ帰つた乙女達は、今はもうほとんど嫁いでしまつたといふことだ。さうして、誰それさんはどこへ嫁に行つたといふ話を聞いてゐる中に、心のない夫にあつて、悲惨な境遇の娘があるといふことを聞いたわけですね。「心なき夫にあへりしをとめ子のいたはし身の上きくに忍びず」「うら若き妻くるしむるその男に我れ文やらばあやしまれむか」、憤慨して、その妻をいぢめる男に、自分が「そんなことをしてけしからん」と言つて手紙をやつたら、かへつて怪しまれてまづいだらうか。憤慨しながらも、どうしてよいか、わからないのですね。さうして心がむしゃくしゃして来て、「あげしほのみち来る思ひさまさむといでゆけど我が心なごまず」、上げ潮が満ちて来るやうに、胸の中に満ちて

来る憤懣をさまさうとして、外へ出たけれど、どうにも心がなごまない。「杖とりて草うちすゝむはたけ道雲足たれて鳴り来ゆふさめ」、杖を持って、草をたゝきながら畑道を歩いてゆくと、雲足が低くなつて、夕方の雨が降つて来た。「松並木よこ吹く風に道におちこゝら光れるほたるこあはれ」、松並木に横なぐりに吹きつける風の為に、螢が道に落ちてたくさん光つてゐる。「あはれ」とそれを詠歎してゐるのですね。「羽根をれてつちにおつとも生けるまは光れほたるこあめのまにまに」、羽根が折れて地に落ちても、生きてゐる間は光れよ、ほたるよと、螢に悲惨な境遇の娘を重ね合はせ、そこへ自分を強く打ち込んで歌つてゐるのですね。「音もなき田道にともる汝が光くらき胸戸をてらすがごとし」、田んぼ道に落ちて光つてゐる螢の光が、自分の胸の中を照らすやうである。これだけの九首の歌が一まとまりとなつて、一つの境地を表はしてゐるわけで、そこに、詩人川出麻須美の人間といふものが実によく出てゐると思ひます。

暴風の夜、海辺を歩きながら歌つた歌の中にも

をやみなくい注ぐ水に海原の胸あふるれかひゞきのかなしき

枝そげしひとつ松あはれこの海にいでいる月を見つゝくらすか

止む間なく注いで来る川水の為に、海原の胸が溢れた為であらうか、何とも言へない悲しい響きをしてゐる。或は、枝そげた一つ松よ、お前はこの海に出たり入ったりする月を見ながら暮してゐるのであるか。といふ風に海とか一つ松とかいふものを、自分と一体化して歌つてをります。或は空の星を見ましても、空を行く黒き星、それは見えない星ですね。空に我々が見ることの出来るのは、恒星だけですが、その恒星の間を、地球と同じやうな見えない黒い星がいくつもいくつも回つてゐるはずで、それに深く心を寄せて

いちじろき天つみ星のそのひまをこゝらゆくらむくろき星はも

くろき星いづくにゆくかひやゝけき天路あまちの旅はかなしかるべし

さういふ見えない星にも、自分と一体化した気持をこめて歌つてゐるのです。

しかし川出麻須美は、決して小さく閉ぢこもらうとせず、いつも何か荒々しいものを

求めてみるところがあります。例へば風の晩に詠んだ歌を見ますと

ふきとふく風のよろしきつまる胸すきてしおぼゆいや吹けよあらし

あかときの月あきらかに風のむたわむもろ木のかげみだれたり

ものほしの倒るゝひゞき犬の子のかなし鳴き声かすれてきこえ来く

大海原いたも恋しもかゝる夜かの高岸に立ちてうたはば

わだつみの破るるごときひびかひをもだに思へばあつきかほばせ

月星の静かには似ず鳴りどよむ樹にかも似たるつちの子われは

風なごみ心つかれて戸をくれば東の空のかぎろひて見ゆ

夜嵐に散りしもみぢば樋ひにあふれ水なき池にあげにたまれり

朝日さすみ寺の庭べさゞんかの風になびくをとほくながめつ

吹きに吹いて来る風は本当に気持がいい。つまつてゐる胸が透き徹るやうな感じだ。もつと吹け、風。さうして暁の月が明るくなって、風のため木々の影の揺れ動くのがくつき

り見える。月と風と木々が、作者の心の動きと一緒に歌はれてをります。「ものほしの倒るゝひゞき犬の子のかなし鳴き声かすれて聞こえ来」、「大海原いたも恋しもかゝる夜かの高岸に立ちてうたはば」、さういふ風の晩に、海原を恋しがってゐるわけですね。かういふ晩に、あの大海原に面した高岸に立って、歌を歌つたらどんなに気持がいゝだらう。「わだつみの破るるときひびかひをもだに思へばあつきかほばせ」、海が破れるやうなあの響きを思ふと、顔が熱くほてつて来る。力強いものに対して、限りない思ひを寄せてゐるわけです。「月星の静かには似ず鳴りどよむ樹にかも似たるつちの子われは」、月星のやうな静かなものには似ないで、自分は風の為に鳴り響いてゐる樹に似てゐる。地の子である自分は。

次に、「名古屋港にて」といふ明治四十四年の詩を誦みあげてみます。

この どころみに うかぶ こぶね ども、

卿らは 到着の よろこび と 出帆の希望 に

その むねを をどらして ある だらう。

おい 船長、水夫、海の たびびとら、

卿らは こんな 航海 で まんぞくできる か。

いそぜせりの こざめ のやうに

この うちうみを 徐行して。

ちからを 信ぜ よ、

機械に 制さす な、

すてて かゝれ

いのりを あげ て いけ。

われは 苦痛 と 歎喜の 撒布者 だ、

ふるる ところに 新生の 種が まかれる のだ。

海風に なびく わが ころろ には、

卿らの たましひ も ふきゆる ぞ。

さらば いとしの ふなびと よ、

われらが めあては 「とほつ うみのはて、

しらくもの おりゐ むかふす きはみ」だ

出帆！

出帆！

いかりを まきあげろ！

二

ああ 目に あふれる あらの よ、

なんぢを みれ ば わが ところ も あれる のだ。

うねる あしはら、めに いたい ほそくさ、

よこいし たていし 木材の きれはし、

ゆがんだ 電柱 と さびつく レールと、

貧民の こや と、

欲望を まとの こ料理店 と、

材料の 散乱

すべて 創造の 苦痛を しめす のだ。



はしれ 電車、

あらのを 横断して 一直線に。

なんぢは 意志の ちから である。

ひろがる <sup>(野)</sup>のは 左右に 回転して、

未来の 市街が うかび である。

はしれ 電車、

疾走、疾走、疾走！

「おい、船長、水夫、海のたびびとら、卿らはこんな航海で満足できるか。いそげせりのこぎめのやうに、このうちうみを徐行して。」と、内海を徐行する態度を叱咤して、「われらがめあては、遠つ海のはて、白雲のおりぬ、向伏すきはみだ……いかりをまきあげろ」と、非常に強い言葉を叩きつけるやうに歌ってをります。そして新開地に、「すべて創造の苦痛をしめすのだ。」と歌ってをりますが、その創造の苦痛が、川出麻須美の全作品に渦巻いてゐるのではないかと思ふのです。

川出麻須美の歌は、大抵連作短歌の形式を取つてゐるのですが、連作については、正岡子規の弟子の伊藤左千夫が、連作についての最初の理論的なものとして、「連作論」といふものを書いてをります。それを見ますと、連作に必要な条件を六ヶ条上げてをりまして、萬葉集でこの条件にあてはまるのは、たゞ一篇しかないと言つてゐるくらゐ、非常に人為的な面を強く打ち出してゐるのです。

これに対して三井甲之の方は、萬葉集の中の大伴家持の歌で、「悲緒止まずして更に作れる歌五首」——歌を作つたけれども、悲しい思ひが充分に満たし切れないで、さらに五首作つた——といふ詞書ことばがきがあるのですが、そこには連作を作る創作心理といひますか、創作の動機が、よく示されてゐるといふことを言つてをります。自然の要求と言ひますか、抑へきれなくて更に詠む、それでも満しきれないでまた詠んで行く、それこそ連作短歌の本当の動機であるといふことを言つてゐるのです。川出麻須美の考へ方も、この三井甲之の考へ方と同じであると思ひます。

ところが一方では、連作短歌に外的な事件をずつと、例へば船の沈没の有様を詠んで、船のぶつかるところから、どうなつて沈んだ、乗つてゐた人が海へ投げ出されてそこへ浮うき

を投げた、浮にうまく手が掛らなくて、その友は沈んで行った。といふ風に始めから終りまでの様子を、百首以上の連作にしてゐる人もありますが、さういふのは記録文学か小説でも読むやうに、事件がどうなつて行くのかといふ関心の方が中心になつてしまつて、歌としての本当の道から、外れてゐるやうに思ひます。

川出麻須美の歌は、短かいものは二・三首、特に長いものは二十首・三十首のものもありますが、大抵は十首程度のもが多いやうです。それには先程も触れました「故郷のゆふべ」の連作のやうに、外的な動きは内的ないのちに溶かされ、内的なつながりが中心になつて、全体を結びつけてをります。川出麻須美の連作短歌には、皆さういふ内的脈絡の強さがあり、その内容に即応した形・姿があるやうに思ひます。

麻須美の作品中、最初と最後に同じ歌の出て来る連作があります。「石像」といふ題で

白玉のにほへるをとめ燃ゆる目をわれにあつめぬいかにせよとか

胸にしむあめのたくみのこまやかにのがるすべなしつるぎふるへど

なき人のまみの思出うらなげきわれちかづきぬひくがまにまに

はるの葉やけぶれるものをなにぞこのつめたき胸に石のすがたよ  
吹きまくる嵐にきえぬともし火を彌堅やがたにとれるをとめかこれは  
ひたむきの熱にひらくる胸の戸のかなし再びとぎすくろがね  
わが胸のあつきペンさきひびきなくとはにもくすか石のすがたは  
ほのぐらき室やのかたすみとこ若のすがた刻みし人のかなしき  
白玉のにほへるをとめ燃ゆる目をわれにあつめぬいかにせよとか

始めと最後とに、同じ「白玉のにほへるをとめ燃ゆる目をわれにあつめぬいかにせよとか」があるわけで、これはたゞ出来た順に書きつけたといふよりは、そこに連作を、一つの統一したものとして、表現しようといふ意図があるわけです。ヴントは、その著『心理学』の中で、「文章の終り、即ち思想発表の終結に際して表はれる終末感情は、最初の感情と全く一致する。それが本当の文章である」と言つてをりますが、川出麻須美のこの連作は、まさにヴントの理論を実証するやうですね。

そして川出麻須美の歌を見ますと、何か子供の魂のやうな、幼児の魂のやうな純真さ、

率直さをひたひたと感ずるのです。先程の、あの乙女の痛ましい運命を聞いて憤慨し、「うら若き妻くるしむるその男に我れ文やらばあやしまれむか」といふ歌など、如何にも子供のやうな、むきなところがありますね。あるいは

ぬれし人電車のなかにこみあひてことばかはせりはらからのごと

と俄か雨で、濡れた人々が電車の中で、思はず兄弟のやうに言葉を交してゐるのに、素朴な喜びを感じてをります。次に「篠島」といふ題の連作を誦みます。

島の上の城あとに立てば海青く葉びろ芒すすきの吹きみだれたり

このわたり荒らす海賊からめむと城きつきて拠よりしますすらをいづこ

みかどの井争ひ汲めるをとめらのとびかふ姿小鳥のごとし

なつかしき島にあまらは提灯ちようちんもち我呼びに來ぬさかもりせむと

磯浪のこゝもとゆすり戸の隙ひま吹きこむしぶきにゆらくかんてら

髪おうなしろき姫をのこいたまし男さび梶かひくまねびて舟唄うたふ

ひとり子をいくさに死なせ老いの身の悲しき心はらすといふか

ひなびとはまこといぢらし瓜うりむきて大きなるまゝに我にすゝむる

提灯ていとう借り岨しづみち来れば海くらく伊良湖いらうこが崎も見えわかずけり

友はみないねてあるらし麻蚊帳あさがやの真帆まほなしゆらげり吹きこむ風に

「ひなびとはまこといぢらし瓜むきて大きなるまゝに我にすゝむる」といふ風に、その田舎人の素朴さを心から喜び、「なつかしき島にあまらは提灯もち我呼びに来ぬさかもりせむと」と、島の漁師達を、「なつかし」と呼んでをります。その他にも、海の人に対する親愛の情をこめた歌がたくさんあります。海辺で詠んだ歌の中に

なつかしのあまらにまじり浦々をめぐりて我世をへましものを

なつかしいこの漁師達と一緒に、暮らし、一緒に浦々をめぐって、自分の生涯を終へた  
いといふのですね。それから航海してゐる船の中でも

さ夜ふけて風ふく海にみだれゐるこれのあま船神護りたまへ

深夜、風の吹く海で漁をしてゐる多くの小舟を見て、「神護りたまへ」と祈つてゐるのですね。さういふ名も無き人々、貧しく苦しく働く人々に寄せる気持といふものは、実を打つものがあります。又、富山のお寺の「御満座」の徹夜の法要を詠んだ歌があります。

雪の夜をみ寺に詣で人なかに坐りてありしさびしき忘れず

み堂のうち人いきれしてあかしみなおぼろに暈かさを作りてぞみし

雪ふかき国に來りてかそけくも息づく人の生よを知りにけり

雪深き国に息づいてゐる、人生がしみじみと歌はれてをります。

(注。御満座について。富山県は浄土真宗の深く広く浸透した地である。宗祖親鸞上人の命日には、信者が寺に集まって、本堂も狭しと居並び、高さ一メートルもある大蠟燭ろうそくの

灯影揺らめく下で、夜を徹して法話を聴聞し、法談する習はしで、これを御満座といふ。人いきれする堂内に「あかしみなおぼろに暈を作」つてみたといふのはその大蠟燭である。親鸞がなくなつたのは弘長二年十一月二十八日。大谷派ではその日付で行つてゐる。御満座荒れといつて霽つれの降り荒れることが多い。本願寺派では新曆に換算して一月十五日に行つてゐる。深冬、雪降りしきる候である。麻須美が詣でて、雪深き国に「かそけくも息づく人の生」をしみじみ味はつたのは、そのやうな夜だったのであらう。

それから私が特に、胸がふさがるやうな思ひがする時に、読んで深く共感するのは次の歌です。

息どほる胸をしづめて幼子のむかしにかへりいまはいねてな

煮えくりかへる憤懣の気持をぐつと抑へて、幼子の昔に返つて、今は眠らうといふのですね。川出麻須美の人といふものが、そのまゝ出てゐるやうに思ひます。それから更に、昭和の歌の中で



大地はすでにくれつゝほのあかき夕空やがて星きらめかむ

大地はもう真暗になってしまった。しかし夕空はまだほのかに赤い。夕映えの空である。やがてあそこに、星がきらめいて来るであらう。漠然とした、しかしながら、確信的な期待。そこに何か、川出麻須美の一生を導いて来た、大きな光が宿って深々と息づいてゐるやうに思ふのです。

〔富山大学信和会第四回合宿講義筆録〕昭和四四・一一・二二、  
於アオイ・スポーツハウス

(追記)

一、『折口信夫全集』刊行後発見された同博士の文が『短歌』二〇卷一三号(折口信夫没後二十年記念特集)に載せられた。『不二』二二三号(大正三年一月二一日号)紙上「推讚」欄、岩野泡鳴を評した記事中、「氏は実に装はれたる日本人の形式生活から、功利や、偽善や、妥協的な安心を肌膚を剝脱して真の悲痛なる原始的戦闘に帰へれと宣した一人として、『人生と表現』同人諸氏と共鳴する処が極めて多い。殊に若さの量に於ては氏は到底及ばないにしても、川出麻須美氏と相通じ相感應して、次第に接近して行く傾がある

るのは、賀すべきことである」と述べた。

また同紙二四四号（大正三年二月十五日号）紙上「滅ぶるまでのしばし」中、「『あかね』の甲之氏・麻須美氏らには強烈な原始日本人を見ることが出来た。しかし両氏は間もなく歌に遠ざかった」と評した。（傍点は原文のまま）。

二、阿部正路氏著『和歌文学発生史論』（桜楓社、昭和五二）は『アカネ』『人生と表現』の活動に論及し、川出麻須美の文も引用した。

三、富山県では、富山県歌人連盟副会長久泉迪雄ひら氏がその著『富山をうたう』（北日本出版社、昭和四八）で麻須美の作四首をとりあげて紹介鑑賞した。富山県詩人連盟会長稗田堯平氏はその編著『富山県現代詩事典』（牧人文学社、昭和五〇）中、『天地四方』（川出麻須美詩歌集）を独立項目に立てて解説した。

## 2 川出麻須美とホイットマン

川出麻須美とアメリカの詩人ホイットマンについてお話いたします。

今年（昭和四十四年）はちょうどホイットマンの生誕百五十年祭に当るわけで、ホイットマン関係の出版も此頃非常に多いのです。昨年、『大正文学の比較文学的研究』といふ本が、明治書院から出てをります。その中に亀井俊介かみいしゅんすけといふ東大助教授の方が、「岩野泡鳴の『散文詩』とホイットマン」といふ論文を書いてをります。その中の、岩野泡鳴のホイットマン翻訳を論じた中で、「ここで一つの挿話を紹介しておくのも無駄ではあるまい。」といふ書出しで、川出麻須美のホイットマン翻訳のこと、或はホイットマンについての論説に言及してをります。それを少し紹介させよう。

へ大正元年九月の雑誌『白樺』に、「ホイットマン詩集『草の葉』より」と題して四篇の訳詩が発表された。訳者は東大哲学科に在学中の柳宗悦やなぎむねよしであった。短い作品ばかりだが、泡鳴などのに比べればはるかに正確な訳文であった。ただし詩形を保ちながら原詩の意味を日本語に移したというたぐいのもので、おまけに文語体であった。この訳詩が論争の種子をまいた。

翌十月、東大国文科出身の新進歌人三井甲之みつみこうしの編集していた『人生と表現』誌上

に、川出麻須美が「白樺同人のホイットマンを理解せぬこと」という一文を書いた。▽

『白樺』に、柳宗悦がホイットマンの翻訳を文語体で書いたわけですね。それに対して『人生と表現』といふ雑誌に、川出麻須美が反論の文章を書いたのです。

へ柳宗悦の訳詩が文語体なのはホイットマンを理解していないからだ、という批判文である。川出は以前から泡鳴の訳詩に接しており、ホイットマンの真精神はむしろそういう口語体でこそ伝えられるべきものだと考えていた。すでに『人生と表現』の前身たる『アカネ』（注、明治四十五年二月、「アカネ」第三巻第十号）に泡鳴調のホイットマン訳を試みてもいた。それは原詩の意味をとらえそこね支離滅裂な日本語になっっている点までも泡鳴調であった。（というより泡鳴もはだして逃げだしかねないひどいものであった）が、とにかくそういう立場から柳に批判を呈したのであった。▽

亀井氏は、川出麻須美のホイットマン翻訳といふのは、支離滅裂なものであると、悪く書いてゐるのですが、とにかくこゝで、川出麻須美の名前が出て来たのです。

へ憤慨した柳は翌十一月の『白樺』に「川出氏（附三井氏）への御返事」と題した反駁文を書いた。彼の論点は二つあったが、その一つはこうである。「誠に同氏の云はるゝ如くホイットマンの訳詩としては文章体よりも口語体の方望ましく候。然れども小生は未だ口語体を自由に運用するの自信なく又其弊に陥らざらんが為に、換言致せば川出氏の訳に表はれた如き弊に陥らざらんが為にこそ文章体を取り申し候。」これは自己弁解しながら相手（川出）の拙劣な訳し方を痛烈に皮肉つたものとしておもしろいが、この反駁自体に大して意味があるわけではなかった。

もう一つの論点は注目に価する。柳は、すなはち、川出氏の方こそホイットマンを理解してゐないのではないかと逆襲してゐるのである。彼はその材料に『人生と表現』の五月号（明治四十五年）にのつた川出麻須美の「ホイットマンの靈にさゝぐる祝詞」という詩を引き合いに出す。これは最大級の言辞を並べたにすぎない駄詩であるが、この

最後の行に、「大デカダンス、ワルト、ホイットマン！」という言葉がある。柳はこの言葉をとらえて、こういふのである。川出氏はホイットマンが大デカダンスだと説かれるが、デカダンスという言葉がかのヴェルレーヌやロートレイクに最も適応すべき語とすれば、彼らと正反対なる位置に立てるホイットマンにデカダンスの形容詞を用いるのはなほだしい誤謬なるは自明の理だ。「かの苦悶に満ち廃頹的生活を送り深き悶絶の裡に何者かを追ひ求めたるヴェルレーヌ等の病的芸術と、かの漾々やうやうとして一切を肯定し、喜悦と満足とのうちに一生を送れるホイットマンの健康なる芸術と、如何ばかりよき対比をなせるかは何人も認む可き事実と存ぜられ候。……吾等は何処デカダニツクに廃頹的なるものをホイットマンに見出し候や」と。

川出麻須美はホイットマンのことを、大デカダンスだと言つてゐるが、それはとんでもない見当違ひだ。デカダンスといふ風な言葉は、ヴェルレーヌなどの病的なものにこそ当嵌あてまるけれども、あんなに漾々と、一切を肯定して、喜びと満足の内うちに一生を送つた、ホイットマンのやうな健康な芸術に、デカダンスなどといふ言葉を用いるのはとんでもない

間違ひである、といふ風に柳宗悦は反駁したのです。

へだが一方が病的で他方が健康だと、そう簡単に割り切れるものであろうか。ヴェルレーヌの病的特性のうらには健康な生命への希求があり、ホイトマンの健康性のうらには苦悶があった。岩野泡鳴はそれを見ていた。そして川出麻須美も同様なのであった。彼がホイトマンに「祝詞」をささげたのが泡鳴の古神道観に影響されたためかどうかはよくわからない。(泡鳴の主要なホイトマン論文はこれより少し後に出ているのだから。)

岩野泡鳴のホイトマン論文より川出麻須美の方が少し早いわけですね。

へしかし彼がホイトマンに対して用いたデカダンスという言葉には明らかに泡鳴の伝えたとき象徴的生命主義の意味が込められている。「ホイトマンの霊にさゝぐる祝詞」の中で彼はこううたっているのだ。

きみは過去と未来に生き、

うみの苦と撫育ぶいくにやつれて

その高唱は号泣であつた

川出麻須美は宗悦の反論に対して『人生と表現』大正二年一月号に「柳氏に答ふ」を書いた。ここで彼は先程述べた第一の点に関して次のごとく反駁している。口語体の正しさを認めながらそれに自信がないから文章体にしたなどというのは、「これを自殺した議論といふ……よいと信じてても実行しなければよからぬことをしたと同じことを知りたまへ」と。これは理屈として筋が通っている。そして泡鳴なども「散文詩」への転換で身をもつてやってのけたことである。

第二のデカダンス論についての川出の反駁はこうである。「かれら〔ホイットマンら〕は生の苦痛を一心身に経験したのだ。この大暗黒大煩悶これがかれらの芸術に絶大の威力を与へた根底であつた。この暗黒、即ちかれらの光明であつた。大楽天と大悲観とは（実に）紙一重のすきまもない。肯定も否定もおなじいのちの見方の差である。ホ



イットマンを楽天的詩人とか健康の詩人な〔ど〕と見るのは間違ひである。」と。なおついでに付言すれば、三井甲之も同じ号で（他への反論も含めて）「柳宗悦・武者小路実篤氏の評論の誤謬を指摘す」を書き、その中でヴェルレーヌのを病的芸術、ホイットマンのを健康な芸術と見なす柳宗悦に対して、「かう外的に二つを差別して表裏に出没する生命の動乱を見ないのが君らの物質主義一徹の誤解の根ざす所だ。・・・動いて止まぬ人生の表現である芸術はさう簡単には片附けられぬのだ」と述べている。川出にしろ三井にしろ、泡鳴の利那的表象主義とそっくりのことを言っているわけである。そして共に柳の『白樺』的な単純なホイットマン理解の欠点をよくついていると思う。▽

結局、柳宗悦らの白樺派のホイットマン理解といふものは、たゞ光明的な、健康で楽天的なところだけを見てゐて、単純な理解の仕方である。川出・三井の理解の仕方といふものは、その大きな喜びの裏に、大きな苦しみがあるといふ風に見てゐて、それを見ないのが白樺派の見方の浅い所であると考へてゐるわけです。さういふ風に両者の見方は対立してゐるわけですが、この点については亀井氏は、白樺派を単純とみて、むしろ川出・三井

の方に深みがあるとして、味方をしてをります。

へもちろん、川出のホイットマン論にも泡鳴のと同じ欠点があらわれている。彼はなるほど暗黒即光明という神秘主義の中心点に理解を示している。そして事実、ホイットマンの場合、生の暗黒を逆転して生の光明にせしめた。だがホイットマンはそれをきわめて人間的な力によって——たえず光明を求める意志によって——なしとげたのである。そこを川出は見のがしている。そして結局のところ「大暗黒大煩悶」を強調しすぎてしまっているのである。

柳宗悦と川出麻須美の論争はここで終っている。それはそれぞれホイットマンの半面だけを見たものの論争であり、大して発展もせず、文学史上で注目されるような挿話ともならなかった。これが大論争に発展するためには、両者の力量が明らかに不足であった。知識も乏しかったし、詩想も浅かった。そしてこの論争で、結局、泡鳴以上のホイットマン理解は遂に少しも出なかつたのである。(この後、大正期全体を通して、『白樺』的な「喜悦と満足とのうちに一生を送れるホイットマン」観が支配的になるが、有

島武郎を除いて、ホイットマンの真生命にふれたものは遂にあらわれないのである。〕

亀井氏は『大正文学の比較文学的研究』の中で、大体かういふ風に述べてゐるのです。

私はこれを見て、東京の夜久正雄さん（亜細亜大学教授）の所へ、かういふのが載つてゐるといふことを連絡しましたところ、夜久さんはこの亀井氏に対して、川出麻須美の理解の仕方に問題があるといふことで、資料を添へて手紙を書かれたのです。ところがそれを見た亀井氏は、自分の川出麻須美の見方が浅かったといふことに気付かれまして、今年（昭和四十四年）の四月に出た『比較文学研究』の十五号に、「川出麻須美とホイットマン」といふ論文を書かれて、自分の前に述べた誤りを相当訂正されたのです。

〈拙論「岩野泡鳴の『散文詩』とホイットマン」について、最近、夜久正雄氏から丁寧な御批判をいただいた。主として川出麻須美に言及した部分の御批判である。（中略）

拙論中で私は川出麻須美のホイットマン観の重要性そのものはかなり力をこめて語つたつもりである。〉

ホイットマンの見方については、川出麻須美の味方をしてみたわけですね。

へしかし今や正すべき誤解や偏見も明かになってきた。そこでこの欄を借りて、自分の恥を公表すると共に、川出麻須美とホイットマンとの関係を再考してみたいと思う。

川出麻須美の名は今日ほとんど全くかくれてしまっている。夜久氏も文学辞典のたぐいで彼の項目をのせているのは明治書院の『和歌大辞典』が唯一の例外であろうといふ。だから、もっぱら詩関係の文献をあさった私はこの人の経歴について何も知らないままにあの記事を書いた。川出麻須美、別称は鹿菅渡しかすがわた——人はこれをロック、カントと読んだともいう。明治十七年生まれ、四十三年東大國文卒、四十四年に三井甲之主宰の『アカネ』の同人となり、その後身たる『人生と表現』にも参加した。その後、旧制七高、愛知大学などの教授となり、昭和四十二年、八十三才をもって長逝した。前記拙論を書く時、私はこの『人生と表現』は調査したが、『アカネ』を見る機会はどうしてもなかった。そこで川出麻須美と柳宗悦との論争を語るに当って、『アカネ』時代の彼のホイットマン訳詩については、論敵たる柳の引用文をもって判断するより外なかった。

そこに私の軽率さがあつたわけで、慙愧にたえない。∨

亀井氏は、柳宗悦が悪口をいふ為に引用した文しか、手元に資料がなかつたわけで、夜久氏から送られた資料によって、見直すことになるのです。そして前にはへ（この論争は）それぞれホイットマンの半面だけを見たものの論争であり、たいして発展もせず、文学史上で注目されるような挿話ともならなかつた。これが大論争に発展する為には、両者の力量が明らかに不足であつた。∨と言つてゐたのですが、今度はそれを訂正して、川出麻須美の意義を積極的に認めたのです。亀井氏は先に述べた川出、柳論争を紹介したあと次のやうに述べてゐます。

へ以上が論争の経過のごくあらましであるが、ここでホイットマンについての二つの見方が真向から組み合つたわけである。私はこの論争で川出の方により多くの同感を持つた。岩野泡鳴の神秘的半獣主義や利那的表象主義の流れをくんだ川出の立場は今日軽視されているけれども、これこそ単純な人道主義的ホイットマン観よりも正しい面を持つ

ていると思つたのだ。ヽ

亀井氏はつづいて夜久正雄氏の批判とそれについての自分の立場を述べたあと、川出麻須美の訳詩についての発言に対して次のやうに反省してをられます。

へところで、夜久氏の批判は二点ある。一つは、川出の訳詩について、「それは原詩の意味をとらえそこね支離滅裂な日本語になっている・・・ひどいものであった」という私の判断に対してであり、もう一つは、川出の詩「ホイットマンの靈にさゝぐる祝詞」について、「これは最大級の言辞を並べたにすぎない駄詩である」（傍点夜久氏）という私の評価に対してである。

まず私の基本的態度を説明しておかなければならない。拙論がこの二点で川出を批判したのは、こういう欠点にもかかわらず彼の『白樺』批判には正当さがあつたのだということを強調したいための布石であつた。しかしこんなことは大した弁解にもならな

川出のホイットマン訳詩（ただ一篇しかない）がどこまで正しいものだったかという問題を検討してみよう。柳が引用している部分というのは、次の通りである。（注、ホイットマン「来るべき詩人に」）

「改修」は地語の一つである。

地球はぐづつきいそがない、

すべての属性、発生と効果、これらをとばせず自身のうちにかくしもつ。

地球に美醜はない——不足と過贅とは完備とおなじものをしめすのだ。

（中略）原文は次の通りである。

*Amelioration is one of the earth's words;*

*The earth neither lags nor hastens;*

*It has all attributes, growths, effects, latent in itself from the jump.*

*It is not half beautiful only——defects and excrescences show just as much as perfections show.*

——「改善」というのは地球のモットーの一つだ。地球はぐずつきも急ぎもしない。それはあらゆる属性や成長や効果を最初から潜在的に持っている。だからそれは部分的に美しいだけではない、足りないところも多すぎるところもあるけれども、それらも完全なものと同様に美しさのあらわれなのだ——、といった意味である。川出の訳はそういう意味をよく伝えているだろうか。「地球はぐずつきいそがない」では、地球はぐずつくもののようにきこえる。「これをとばせず・・・」という訳文は全然意味が通じない。それに地球の言葉を「地語」というのは、いかにも泡鳴流の無理な造語だ。そんなところから、私は「支離滅裂」と断じたのだった。

だか、その批判はやはり早急すぎたのだ。私は夜久氏から送られた『天地四方 明治篇』ではじめて川出の訳詩の全文を見ることができた。それによると、川出は原詩全十三節中十一節までを訳している。そのうち柳が引用した第八節が最も拙劣な部分だろうとははじめから予期していたが、それと他の部分との差は予期以上に大きいのだ。例として第一節を原詩と対照してみよう。

地球、まるく、ころがり、うちにこもった——無数の太陽、月、動物、すべてこ



れらは将来のことばである。

水のやうな、草木のやうな、蜥蜴のやうな進行——実在と予言と未来のさゝや  
き。

みよ！ これらは将来広汎なことばだ。

Earth, round, rolling, compact——suns, moons, animals——all there are words  
to be said,

Watery, vegetable, sauroid, advances——beings, premonitions, lispings of the  
future,

Behold! these are vast words to be said.

これは、説明的な言葉や解説的な言いまわしを一切含まない、泡鳴調の「棒訳」である。そして泡鳴調の大胆な語法がある。「将来広汎なことば」などというのはその一例である。だからよほど慎重に読まないと意味がとりにくい。しかし同時に、たとえば“compact”を「うちにこもった」と訳すなど、大いに工夫もこらされている。誤訳は、他の節でだが、若干見られる。第九節で“generous”（気前のよい）を「しとや

か」と訳し、第十篇で“accouche! Accouchez!”(産婦よ、うめ)を「助産婦! 産婆!」と訳しているのはその例だ。しかし全体的に誤訳の数は少く、少くとも泡鳴のよりも正確に近い訳だといってよい。夜久氏は「この訳詩は、ホイットマンの原詩の調子を訳者が完全に自分のものにしてゐるやうに思ふ」と述べておられるが、私はどうも原詩の調子と比べてこれはいささか舌足らずで訥々としすぎていると思う。しかしここに一種独特なリズムがあることは否定できない。とにかくこれは当時の他のホイットマン訳詩と比べて遜色のない出来であった。そのことを指摘しえなかつたのは私の誤りであった。✓

次に亀井氏は川出の詩を駄詩であると評価したことについても次のように述べています。

〈川出の「ホイットマンの靈にさぐる祝詞」を「駄詩」と呼んだのもまた私の軽率であった。私にはホイットマンに関して一つの信念がある。ホイットマンは「人間」ある

いは「詩人」そのものなのであって、彼をそれ以上のものと見る立場にどうしても賛成できない。『白樺』や高村光太郎（「彼の詩は人間の作った詩ではなくて、自然の詩に外ならない」と彼は言っている）のホイットマン観に不満なものもそのためだ。それでも、そういう立場が論文の形で提示されれば理性的にうけとめることはできるのだが、賛美の詩などの形で提示されると妙ないらだちを覚えるのだ。それで川出のこの詩についても

ああ、壮大、固着した肉体と流動異様の神経と颯風倒死の内生活、  
愛のひと、ゆめみるひと、墓穴のひと、大胆なキリストの出現よ、

というような「最大級の言辞を並べた」言いまわしに、思わず顔をそむけたのだ。この感じは今も変わらない。しかし私は、口語自由詩のまだ幼稚であったこの時期に「詩的」表現をしようとすれば、どうしても誇張に走りやすかった事情に、もっと同情すべきであった。加えて、川出のこの詩にホイットマンの本質がよくもりこまれていることに、私はもっと注目すべきであった。

きみは過去と未来に生き、うみの苦と撫育ぶいくにやつれて、その高唱は号泣であった。

という彼の表象主義的生命主義に賛成なことは拙論中でも述べたが、更に、この詩にも  
られた「言語の愛慕者」としてのホイットマン及び「その詩のつづり各音のしめす靈の  
諸質」に対する川出の強い関心を、私はもつと積極的に評価すべきであった。前記訳詩  
で川出は“*I utter and utter*”という原文を「ぼくはくりかへし言挙するぞ」と訳して  
いた。「言挙」とか言葉の「靈」とかいう発想は、自分の詩を「祝詞」と呼んだ彼の発  
想と結びあわさっている。彼はホイットマンの詩に「言靈」的なものをつかんで、自分  
もそれを目ざしていた。岩野泡鳴の古神道的肉靈合致観によるホイットマン理解に通じ  
るものを、彼はよくホイットマンの表現そのものの中につかんでいたのである。▽

亀井氏はこのやうに二つの点について自己批判したあと、さらに川出麻須美とホイット  
マンとの関係について次のやうに述べてゐます。

△『天地四方 明治篇』を読んで私が再認識を迫られたのは、日本におけるホイットマ  
ン派の中に流れる日本精神の重要性である。高山樗牛、ヨネ・ノグチ、岩野泡鳴など

は、それぞれ異なる意味においてであるが、ホイットマンのナシヨナリズムや生命主義を「日本主義」と呼ぶものと結びつけた。川出麻須美も、「日本主義」という言葉こそ用いていないようだが、この伝統に属するのだ。彼は主として言葉そのものの持つ生命の探究ということで、ホイットマンを日本主義的なものと結びつけた。

川出が数あるホイットマンの詩の中で、回転する地球そのものの中に「真のことば」を見出すことを内容とした“*To the sayers of words*”を訳したのは、彼がホイットマンのうたう言語の自然的靈性の尊重に特に強く同感したからであろう。このホイットマンへの共感、彼の場合、古事記や万葉の「古代語」およびそれにもられた原初的生命主義への憧憬と完全に一致した。彼は『アカネ』創刊号で「わが古代文学を熱愛するのは生の為である」と言い、同じく第二号では「古代日本語」を論じて、「世界でもっとも力ある語は、古代日本語である。……古代日本語に力あるは、眞実即信仰の力でことばは人と合致して居たからである」と述べている。この信念は彼の自由詩そのものの中にも表現されている。たとえば日本武尊やまとたけるのみことをうたった「手紙」という詩は

祝詞を あげよ 死者 無力者に。

たたかひをのれ、よびおこせ 新生を！

といったすぐれた表現となっている。(注。亀井氏がここに引用されたのは「手紙」ではなく、「人よ！ 人よ！」の一節。引用の際のミスであらう)。「祝詞」とは古代日本語が持っていた如き「真実即信仰の力」をあらわす霊的な言葉に外ならない。彼がホイットマンに捧げた「祝詞」も、この態度に貫かれていることは言うまでもない。

川出麻須美の口語自由詩は、この言霊賛仰的生命主義のために、岩野泡鳴の野放途な散文性を持ちあわせていない。短い詩には思いきって人をくったような表現もあるが、概して古風で、根底は伝統的なリズムに支えられている。彼ははじめ、自ら言う如く「一刹那の感情」と「複雑なる感情」を綜合すべく連作短歌を試みたが、この分野こそ彼の本領であったのではなからうか。三井甲之は『アカネ』創刊号でこれを「人生の血を以て書かれ、生命を費して歌はれた」「深刻の歌」と評したが、仲間褒めとは決して言いきれないものがある。だが、川出自ら言う如く「断然現代語をもって自由に感想を発表」せんとして口語自由詩に移った時、その詩型の制約のなさには彼の本来の詩心とそぐわぬものがあつたのではなからうか。彼は大正の初期に再び連作短歌へ帰っていつ

たが、夜久氏によると、「自由詩を作つてみると、詩のリズムが身体にのりうつて来て、からだは躍り出すのであった。これではたまらんと思つて、自由詩を作るのを断念した」とその理由を語っていたという。これは自分の本領を自覚した人の言として私は聞きたいと思う。ともあれ岩野泡鳴に関する拙論で川出麻須美に言及しながら、この言霊合致的生命主義の意義——及び彼がそのモデルをホイットマンにも見出していたことの意義——を見逃していた点は私の欠点の最大のものであったのではないかと思う。▽

続いて今年の六月に『英語青年——ホイットマン生誕百五十年記念増刊号』といふのが出てゐるのですが、その中のホイットマンに関する文献目録では、川出麻須美の「ホイットマンの靈にさゝぐる祝詞」といふ詩とか、或は亀井俊介氏の「川出麻須美とホイットマン」といふ論文が非常に大きく取扱はれてをりまして、かういふホイットマンをめぐる問題から、川出麻須美の名前が知られ始めてをります。それに直接の関連はないのでせうが、最近、明治書院から出てをります『和歌文学講座』の第三編歌壇篇の中にも、少しですが川出麻須美の名前を引用したりしてをりまして、徐々に人々の注目の中に入つて来る

傾向にあります。

麻須美、明治四十四年の詩「手紙」には、深夜、熱田神宮に参拝し、「僕はおぼえず嗚咽してしまった。／日本武尊は誰も知らぬのだ。」と歌ひ、日本武尊の熊櫃の葉の辞世を引いて「この温いハートと／執着のおそろしい力とは／白鳥となって翔らずに居れると思ふか。」と激しく迫り、「尊は僕が書く。／尊は死んだといつても、／僕のあたまに生きとる。／僕はそれを産出するのだ。」（アカネ三巻二号）と強く結んでゐます。麻須美の一生は、白鳥の羽ばたきとなって尊の魂（古事記のいのちといつてもよい）を復活させ、再生させたものだと思ひます。その白鳥は「一面にもえたつ険悪なるうなばら」太平洋のなかにホイットマンの高唱号泣を聴きとめ、これに共鳴し、「世にあるもなきも同じぞ、たまきはるいのちは通ふ」、冥界のホイットマンとともに「渚に赤っぽい泡を走らせ」「おほまきの騒音をたて」た、それが麻須美のホイットマン讃歌であり、ホイットマン論であったと、私は思つて居ります。ホイットマンにささげる言葉が「祝詞のりと」と表現された意義はまことに深いと思ひます。



於アオイ・スポーツハウス)

(追記)

佐渡谷重信氏の『近代日本とホイットマン』(竹村出版、昭和四四)にも、「柳宗悦対川出麻須美・三井甲之論争」の項を設けて、「大正期におけるホイットマンは一つの論争から火蓋が切られた」といふ書き出しで、同論争が特書大筆され、「宗悦より遙かに麻須美の方がことばとしての芸術を深く理解していたようである」といふ判定を下してゐる。その他の諸章でも麻須美に論及し、麻須美がホイットマンにささげた詩などは全文引用掲載し、また麻須美が『アカネ』明治四十四年九月号に発表した論文「祝詞のりこととワルト・ホイットマン」も詳細に紹介してゐる。

同じく佐渡谷氏の名著『日本近代文学の成立——アメリカ文学受容の比較文学的研究』(明治書院、昭和五二)でも、麻須美のホイットマン論と訳詩を大きく取りあげた。麻須美の存在は、日本におけるホイットマン史上、不可欠のものとなつた観がある。

歌人・詩人であつた川出麻須美が、その作品について、歌壇・詩壇から正当な評価を受けぬさきに、思ひがけぬホイットマン研究者の間で高く評価されたといふことは、まこと

に興味深い事実である。

### 3 川出麻須美先生を憶ふ

—遺稿集刊行によせて—

私が川出麻須美といふ名を知ったのは昭和十五年、富山中学五年生の時であった。『国民同胞和歌集 明治篇』といふ仮綴の小冊子を手に入れ、これによつて始めて麻須美の名と作品を知つたのであつた。このささやかな歌集には麻須美の作が二十五聯二百五十首収められてゐた。

私は、中学、二・三年の頃から萬葉集に熱中し、子規の随筆・歌論に傾倒し、四年になつてからは古事記・延喜式祝詞の魅力にとりつかれてゐたが、そのやうな古代日本語の雄渾なしらが麻須美の歌の中に渦まいてゐるのを感じた。しかもそれは単なる復古調ではなく、たしかに明治の日本人として現実に生きぬいた力が悲痛な音調を伴つてうねつてゐた。古代と近代とがひとつにとけて波しぶきをあげてゐた。

私は、子規に傾倒してゐたため、子規門の左千夫・節等の歌集もかねてから愛読してゐ

だが、麻須美の歌を知ってからは影が薄くなった。細く澄んだ節の歌も太く濁った左千夫の歌も、それぞれ魅力があったが、そこに歌はれてゐるのはあくまでも個人の感情であつた。勿論、歌はすべて個人の感情の産物である。麻須美の歌も麻須美個人の情意を強く歌つてゐる。しかし個人の情意を歌ひながら、そこに日本民族のいのちが息づいてゐることを私は感じた。個の声の中に民族のいのちの潮騒しほさみをきいた。それは左千夫にも節にもないものであつた。

川出麻須美。それはどんな人か、まるきり知らなかつた。ただ麻須美といふ字配りから、私は古代の神の名に似た印象を受け、その名を口にするだけで神韻縹渺たるものを感じ、ひそかな畏敬とあこがれをいだいた。

当時、支那事変は泥沼の様相を呈し、日本の将来は暗澹としてゐた。やがて大東亜戦争がはじまつた。私は病を得て、病院のベッドで憂国の情悶々たる日を送つてゐたが、その時、常に私を力づけてくれたのは麻須美の歌であつた。「いめのごと見やる眼に海原のうねりやまずもちからにみちて」「いにしへは語るにしのびずまさかをしつよく語らばこころ和まむ」「息どほる胸をしづめて幼子のむかしにかへりいまはいねてな」「羽根をれてつ

ちにおつとも生けるまは光れほたるこあめのまにまに」といふやうな歌をくりへしくりかへし読み味はった。

昭和十七年六月の何日だったか、私は病床でただならぬ夢を見て目ざめた。ラジオで大発表があって、号泣慟哭してゐる夢であった。目がさめても涙がせぐりあげた。その日、大本営発表があつて、ミッドウエーの海戦が報道された。発表は事実を糊塗してあつたが、私はただちにこれが容易ならぬ事態であることを夢に結びつけて直感した。以来、私は大本営発表の裏を感知できた。そしてこの時の夢は実に三年二カ月後の無条件降伏の予知でもあつた。麻須美の作品にうちこんでみると、何となく物事を予知できる神秘的な能力が備はつてくるやうに感じたのであつた。

退院後、私は能登の輪島へ海を見に行つた。何よりも荒々しい外海が見たかつたのは、麻須美の歌の刺激によるものであらう。病いえ、私の東京での学生生活が始まつた昭和十九年一月、私は夜久さんのお宅で川出麻須美の大正期の詩十数篇・昭和期の歌数十首を見せてもらひ、書き写した。麻須美の明治期以外の作品に接したのはこの時であつた。散文詩「頭椎」・長詩「暗夜」両篇もこの時知つた。「頭椎」の荒々しく強い文を読み真向から

雨風に打たれる思ひであった。

昭和二十年の敗戦で私は徹底的に打ちひしがれた。喪家の犬のやうになつてゐた時、夜久さんから麻須美の歌「朝」「颱風」など十数首の刷り物を送られた。私はこれを読んで躍りあがった。新鮮な力のみなぎった歌を読んで私は生きる力をとりもどした。時に昭和二十一年五月十六日であった。その後、麻須美の詩歌（旧作）が続々雑誌『興風』に発表され、私を励ましつづけた。

明治期の麻須美の歌には、何物かを握りしめて放さぬ暗い力がある。それが私の「疾風怒濤」を力づけた。昭和期の歌には、結んだ拳を柔かに開いてくれるやうな、明るい力がある。それが私の「絶望落魄」に起死回生の力を与へたのであった。このやうに力ある文学はまことに稀中の稀である。

川出麻須美とはどういふ人か知りたく人事興信録か何かで調べ、私の母校富山中学の教師であったことを知って驚き喜んだ。中学へいって校友会誌を調べ、それが大正七・八年であったことを確めた。先生が七高退職後、故郷愛知県小坂井に起居されてゐることは夜久さんからうかがつて知った。地図で見ると、小坂井は私の住む富山からまっすぐ南に当

つてゐた。青々とした飛驒の山の向うなのだ。なつかしくてたまらなかつた。私は拙い歌を葉書に書いて二三度先生のもとに送った。

昭和二十二年八月十日、先生からお便りを載いた。かねがね「川出先生はめつたに手紙を書かれぬ方だ」といふ噂をきいてゐたので、夢かと喜び、手を洗ひ清め、おしいたぐいで開封した。お手紙には「度々御歌を頂きありがたく拝誦して居ります。御歌に触発されてこの頃富山を憶ふ歌を作りました」としたためられ三十六首の歌が記されてあつた。その第一首目が「星井町に我も住みにきわらはらの御講ふれゆきし夕べおもほゆ」であつた。先生は星井町に住まひされて居たのだ。星井町は私の住む町。私は本当に驚き喜んだ。もつとも私は、先生が富山中学教諭であつたことを知つた時「先生はどこに住んで居られたのだらう。星井町は住宅地で、地理的に富山中学教師の下宿が多い所だから、ひよつとしたら星井町あたりかもしれんぞ」と思つたのだ、その予感がみごとの中しつたのだ。星井町の中でも、私の家の筋向ひに旧家で蔵書家があつた。内心、何となく先生にふさはしいと思つてゐたが、その後先生におたづねしたら、井上といふ家で「御宅とすぐ近くであつたのではないでせうか」とのことであつた。私が思つて居た家の隣家であつた。

「裏に木立が茂って居て、黒つぐみが来ていゝ声でよく鳴きました」といふ。そのあたりは私の幼時の遊び場所でもあった。そこに先生は私のまだ生まれぬ大正七、八年の間お住まいになって居たのであった。

昭和二十三年、私は「鹿菅渡研究」をまとめ、これを『興風』誌に連載した。鹿菅渡とは先生の明治期のペンネームである。これに対して先生から「小生は大兄の忠実真剣な御研究を拝見して深く敬服感謝して居り、御引用になる詩歌・文の一節など忘れてゐるものもあり昔なつかしく拝読して居ります。只小生は在世中に而も全く思ひかけない大兄からかやうな過大な評価をして頂かうなど全く意外なことで、因縁の不可思議におどろいて居ります」といふお便りを下さった。私の解釈に誤りもあったが、これに対して「人生は結局修正し修正して行くことですからかまはないぢやないかと思ひます」といはれ、『興風』編集者に対しても「廣瀬さん大分過大な評価をして居られ、こそばゆいですが、それが又よいところでもあり、廣瀬さんの創作として大変面白く拝読してゐます」「如何なる研究も結局創作である、すぐれた創作になって始めてすぐれた研究である」と示された。

この年私は大学を中途退学のまま図書館に奉職した。翌二十四年の八月六日、私は小坂

井を訪ね、初めてあこがれの先生にお目にかかった。先生は当時、農耕と養鶏に没頭され「田畑一反余り、果樹二十数本、鶏三十羽」を経営されて居た。その夜おそくまで先生と膝つきあはせて語りあひ、そのままお宅に泊めていただいた。先生のお話は洪水のやうであつた。そのお話の一端――

「三井甲之君がアカネを編集し日本及日本人に選歌してゐたので、鹿菅渡の名で歌を投稿した。三井君は作者を知りたいと思つて懸命に探した。何でも本郷の下宿にゐるらしいといふので根気よく一軒一軒しらみつぶしに尋ねまはつたが、ペンネームを用ゐて居たため、つきとめることができなかつた。わかつてみると、すぐ目と鼻の先の所に住んでゐるといふわけでした。」

「私が詩歌で表現するところを三井君は論文で表現した。三井君は高く清く細く行くし、私は広く厚く平行的に行つた。二人は実によく補足しあつた」

「葦原醜男あしはらしんごといふ劇詩の原稿を三井君のところへ送つた。これは中断してはいかん、必ず全部一度に発表してくれと言つておいたのに、三井君はこれをちよん切つて雑誌に載せた。私はこれでなかなかカンが強い方なので、三井君に違約を責め、あの原稿は返



せ、今後君に原稿は一切送らぬといった。心の中では、すこしひどすぎたと思つたが、一度言ひ出したら無理に押切つてしまふ性格なので、とうとう引かなかつた。その日某氏が、今日の三井君の様子はへんだつたよ、フラフラとよろめくやうにして歩いていったよ、と告げた。私にはそのわけがわかつてゐた。その後、三井君の雑誌にあまり発表せなくなつてしまつたのです。」

「私の隣家に角煙巖まづといふ漢詩人が住んでゐた。私よりすこし年上で幼少から遊び友達だつた。私はこの人の感化を受けて生長した。この人は社会主義者で、行幸があるなどといふ時には、警官が私の家に泊りこんで警戒してゐるといふ程でした。この人は幸徳秋水に漢詩を教へたといふことです。この人の考へは、詩は世間へ発表し世間的地位を求めらるやうになると必ず墮落する、詩は世間を相手とすべきものでない、といふのでした。私もこの人の感化で作品をあまり世間に出さうとしないのでせう」「私が『日本及日本人』に「神主のむすこ」といふ自伝的小説を発表した時、角氏が私に、神主のむすこを読んだぞ、傑作だぞ、と大きな声で叫ぶやうに言つたことをよく覚えてゐます。」

「先生が富山中学の教壇で自作のヒバリノフトコロ、陣笠小笠といふ詩を読みあげられ

たことが、当時の教へ子たちの間で今も語り草になってゐるさうですね」といふと、先生は朗々とその詩「海の舞踏」全篇をたちどころに暗誦され、当時のことを回想されたが、そのお声が今も私の耳にあざやかである。翌朝、先生に小坂井駅まで送っていただいたお別れしたが、この小坂井の一夜は私にとって終生忘れられぬ思ひ出である。

その後、夜久さんと協力して先生の詩歌集を編み、夜久さんの尽力で昭和篇・明治篇の二冊に分けて刊行に漕ぎつけた。書名は先生が『天地四方』とつけられた。先生の詩歌は日本文学の珠玉であるが、世間には殆ど知られてゐない。短歌史の類で川出麻須美の名を載せてゐるのは斎藤茂吉の『明治大正短歌史』と米田利昭の「明治百年短歌史」ぐらいで、それも列挙人名中に出てくるだけである。しかし後世必ず光を増し、日本文学の至宝となるであらう。このすぐれた作品を拾ひ集めて次代へ伝えることに私は大きな責務を感じたのである。

昭和三十七年、明治書院から刊行された『和歌文学大辞典』には「川出麻須美」が独立項目としてとりあげられ、執筆は私に依頼された。僅か数行の割当であつたが、このやうな辞典に先生の名が載つたことはうれしかった。

(なほ、先生歿後の昭和四十三年、東大助教亀井俊介氏が『大正文学の比較文学的研究』の中で「川出麻須美・柳宗悦のホイットマン論争」をとりあげた。外部でこれだけ大きく先生を扱ったのは初めてであった。私はこれを夜久さんに報じた。夜久さんはこれについての意見を亀井氏に書き送られた。亀井氏は夜久さんから送られた資料を見てあらためて「川出麻須美とホイットマン」を発表された。つづいて品川力氏の「文献に見る日本のホイットマン研究の歩み」、佐渡谷重信氏の『近代日本とホイットマン』等で川出先生の業績が大きくとりあげられた。先生の業績は歌壇・詩壇からはまだ正当な評価を受けてゐないのに、思ひもかけぬホイットマン研究者の間で高く評価されたことは興味深い事実である。)

昭和三十一年、先生は佐渡行を計画されたが、奥様の病気のため中止された。「離れ小島の佐渡、流人の佐渡、魚津で見たつもりになった佐渡、それに『人生と表現』時代、郁文館の教へ子の佐渡旅行の土産話に『佐渡で先生の作品を猛烈に愛読して居る人を見つけた』と語ったことが、さびしげな佐渡に一点のあたたかさを加へたことなどが重なって、更に途中富山であなたや旧教へ子に逢へるといふ希望が加はり、八重をる白波の様になっ

て、私を動かしたのでした。今後いつ佐渡行の再挙をはかるか、事は家内の健康にかかって居りますから、只今のところ分りません」と便りされたが、遂に再挙は成らなかつた。三十六年、奥様はなくなられた。

その頃から先生の御健康にも暗い影がさしはじめた。昭和四十二年六月四日、緑濃い小坂井の岡で、夜久さんと並んで先生の御葬儀に参列したが、先生の富山再訪が成らなかつたことは本当にとりかへしのつかぬことであつたとつくづく思ったことであつた。「富山に行くことがあつたら、変つた町などどうでもいい。もう一度雪の連峰が見たい。望遠鏡でもっとひき寄せて見たい。あなたの見取図で一々くらべて見たいと思ひます」といふ御念願は永遠にむなしくなつてしまつた。

先生は昭和二十三年一月廿一日付の手紙で「滝と降る富山の雪は廿四年もゐた南国の夢をさますかの如く頭の中にふりかゝるので、この隼人の国と越の国は今の世相では大へんにとほいところになりました。私は今明らかに翁となつて、しかし若かつた時と同様、この両端を抱いて生きて居るのです」と述べられた。先生はホイットマンに傾倒されたが大正頃はロシアに憧れ、ロシア行きを決意してロシア語を勉強された。富山中学生の

巨軀をながめて「ロシアを思ひき」と歌はれたのはそのためであらう。アメリカとロシア、南国と北国、古代と近代、男性と女性、いつもその両端をいだいて生きつづけ、その結び目に力ある三十一音の短詩をふきこまれたのが、わが師川出麻須美先生であった。「世にあるもなきも同じぞたまきはる命はかよふ万代までに」、先生のいのちは先生の詩歌に宿って、今も現しく私に歌ひかけ語りかけ働きかけ、作用しつづけてゐるのである。

〔『国民同胞』一二七号 昭和四七〕

#### 4 三井甲之と斎藤茂吉

斎藤茂吉はその著『柿本人麿』（昭和九）の中で、三井甲之の論文「柿本人麿の生活と作歌」（アカネ一ノ四、明治四一）を紹介し、「三井氏一流の鋭敏な批評を以てしてゐる」と評して居る。

一般に、茂吉と甲之とは不倶戴天の論敵の如く考へられ、また事実その通りで、尾山篤二郎は『明治歌壇史』（昭和四）の中で「茂吉は武者ぶるひして甲之の歌を難じた」と書い

て居る。茂吉は「僕は三井と喧嘩で、このあついのに額に青筋たてて……」（書簡 大正六）といひ、「僕は何時でもよい甲之と鉄拳を闘はす」（書簡 明治四二）と宣言し、實際、甲之の家へなぐりこみをかけたとか、かけようとしたとかいふ物騒な逸話さへ伝へられてゐる位である。二人の論戦は近代歌壇論争史の数頁を飾り、茂吉全集の各巻に精彩を添へて居る。歌壇の檜舞台における両者の論戦が、遠い昔語りになつた昭和十五・六年にも、なほ甲之の歌評を見つけた茂吉は烈火の如く怒り、その憤激を手帳にぶちまけて居るのである。

そのやうな激憎の間柄であつたが、しかし茂吉は心の隅のどこかに甲之に敬服するところがあつたのであらう。多数の人麻呂文献解説中、茂吉が「氏一流の鋭敏な批評」などと紹介したのは、他にあまり見当らぬのである。

茂吉の『短歌私鈔』（大正五）に対して甲之は「歌に関する著書で学術的見地から研究されたものは稀有であるから、斎藤茂吉氏の『短歌私鈔』の如きはこの点からよい著書のうちに数ふべきものである。氏の詩人的素質は序文の書きやうにも現はれて居る」と讃め、これにつづけて「氏の歌も批評も此の詩人的素質にもとづいて微妙に過ぎて主観的冥

想に陥りやすいところに弱点を有する」(『日本及日本人』大正五年七月一日号 『和歌維新』収録)と批評して居るが、その『短歌私鈔』を見ると、「予は古事記に八尺入日命といふのある処から思ひついて『八尺入日』と詠んでゐる。三井甲之氏も『八尺の入日』と使つて居る。」と、仲よく甲之を引合ひに出して居る。(その実例は茂吉の『赤光』中の「小旗ぐも大旗雲のなびかひに今し八尺の日は入らむとす」「あぶらなす真夏のうみに落つる日の八尺の紅のゆらゆらに見ゆ」の二首、『三井甲之歌集』中の「磯に打つ波におどろきかへり見る山に傾ぶく八尺の入日』の一首であらう。)

土屋文明は『折り折りの人(一)』(昭和四一)中の「三井甲之」の項で「齋藤茂吉などもこのころまで学校の講義のあいた時間があると、甲之の所へ行つて話したりしたらしい。アララギの人間では一番後まで甲之に接したのはおれだと茂吉が話したことがある」と書いて居る。二人とも、所信は断乎として貫き、あのやうに激しく喧嘩はしながら、お互ひに認める点はあつたのであらう。

アララギは喧嘩に強いといふ定評があるが、そのアララギの喧嘩大将が茂吉で、彼の論争ときたら、雷のやうな威力で相手を叩き伏せ、「訂正するだけの男らしさが君にある

か」「余計なことを言はずに左の件について明答が出来るならしたまへ」と迫り、「そんな女々しい回避的な逃口上は、防禦力として何の役にも立たぬと思へ」ときめつけ、「こんな屁間なことはあるものか」「この語を持って帰りたいまへ」（いづれも『童馬漫語』）などと、どこか愛嬌のある罵声を縦横に放つて居る。まことに痛烈な（共鳴する側からは痛快胸のすくやうな）文である。茂吉の面目が躍如として居る。

これに対して甲之の姿を彷彿させるのは、川出麻須美の「三井君と私」（『新公論』四号、昭和二八）である。その中で、明治四一—四二年ごろ学生時代の甲之に初めて逢った時の思ひ出が次のやうに書かれてゐる。

「三井君は羽織袴だった。黒々とした髪に色白く、霞んだ様なやさしい目付の人だった。一枚の半紙に毛筆で何か書いてあるのを両手に開いて高く掲げ持ち、からだを右に傾けて、殆どその紙から目を放すことなく話された。如何にも恥かしさうに低い声で、非常に主観的な述べ方であった。終わった時、多くの人はよく分らなかつたといふ表情をして居た。話のうちに晶子から明星派の歌風を非難して『感覺的できれいなうっとりさせる様な歌はつまらんと思ひます』と云ふ言葉があつたが、芳賀先生（注、芳賀矢一）はそれを捉



へ『ぼくはきれいでうっとりさせる様なのがよいと思ふが』と笑ひながら云はれ、それに対して文章とは反対に、かすかなぼそぼそとした物の云ひ振りに先生始め多数の人々には一向理解出来なかつたかに見えた。私は三井君の気品と敏感と情熱に打たれ、その近くにあいて居た椅子に移り話かけた。私は興奮して声高になり、次第に椅子を近づけて顔と顔と接せん許りになった。(以下略)

茂吉の大上段にふりかぶつた名演技は、やんやと世間のカッサイを浴びたが、甲之は多くの人に理解されなかつた。清濁合せて落下する豪快な大瀑布は多くの人から讚嘆されるが、岩陰に湧き出づる清冽な泉に気付く人は少ない。しかしひとたびこの清水で渴を医やした少数の人は、終生忘れえぬ感銘を持つであらう。甲之にはそのやうな不思議な魅力がある。そして茂吉もまた実は甲之の清水の味を知って居たのである。

茂吉の処女歌集『赤光』(大正二)を見てゆくと、時々甲之の影響を思はせる作品が目につく。世上の茂吉信者たちは「何をばかな。大茂吉が甲之なんかの影響を受けるもんか」といふであらう。実作品を示さう。

死に近き母に添寝のしんしんと遠田のかはづ天に聞ゆる

これは大正二年の連作「死にたまふ母」の中の一首で茂吉の代表作ともいふべき歌。「遠田のかはづ天に聞ゆる」の句は、母親の死と一つになって恐しい力で迫ってくる。ところが甲之の作に

道おほふ細竹しめの葉そよぎ風起り遠田の蛙天に聞ゆも

といふのがある。明治三八年「故里にて山に木を伐りに行きて作れる歌」の中の一首である。茂吉の作には沈痛重厚のひびきがあるが、甲之の歌は未明の山道を登ってゆく時の作で、清爽の感がみなぎって居る。茂吉の遠蛙はしんしんと迫ってくるが、甲之の場合は、夜明けも近づいて蛙の声はむしろ天に遠ざかってゆく感じである。茂吉は天をテンと読ませて居るが、甲之の方は多分アメであらう。細竹はシヌ（またはシノ）と読ませるつもりであらう。一首全体の調子に応じて結句「聞ゆる」は重々しく、「聞ゆも」は爽やかに結

ばれて居る。しかしとにかくこの「遠田の蛙天に聞ゆ」といふ驚嘆すべき表現が、決して茂吉の独創でなく、甲之のものだったのである。甲之の作はアシビに発表され、当時、左千夫をして「小生を驚かしたるは三井甲之君・胡桃沢勘内君くるみざねに候。その製作の手腕は偏に先進を押し申候。如此無造作に進歩するものにやと実に呆申候」(『アシビ』二巻一号「消息」)と感嘆させた時期のもので、これを茂吉が知らなかつたわけはなく、無意識のうちにもせよ、このすぐれた表現から学び取つたのであらう。

あかときあかときの妻戸を押せばとりよろふ竹群がへに星輝けり(甲之 明治38)

しもの夜のさ夜のくだちに戸を押すや竹群が奥あけに朱の月みゆ(茂吉 明治40)

底浅き汀に見ゆる石の間に砂ゆるがして水の湧く見ゆ(甲之 明治38)

かがまりて見つつかなしもしみじみと水湧き居れば砂うごくかな(茂吉 明治42)

ここにも同様な影響のあとがうかがはれる。勿論、歌風は相違し、甲之の歌はよどみなく一直線によみくだされて居るが、茂吉の歌はどこかでひねってある。「妻戸をおせば」

からは、そのまま戸外の情景につながってゆくが、「戸を押すや」には場面の転換がある。「砂ゆるがして水の湧く見ゆ」はまさに目に見ゆるままであるが、茂吉は「水湧きをれば——砂うごく」と因果関係に分析し、「しみじみと」とか「かがまりて見る」とかいふ間延びしたものを加へて居る。茂吉には力強く迫る作品もあるが、この歌の如き、けだるいやうな、悲しみに浸ったやうな、時にはおどけたやうな気分の作も少なくない。その独特の気分を愛する人は、愛する人の自由であるが。

甲之は、源実朝の歌を論じて「湧き出づる泉の外の空気に触れたばかりのやうに新鮮の微妙の歌は、心の底から深くこもって居った命が湧いて来たのである」「心の底からやむなき衝動によって発せられたる声は悲しき声である。強き思ひは悲しき思ひである」（『源実朝の歌』（『アカネ』三ノ四 明治四四）と述べて居る。そこに甲之の歌の理解の一端が示されて居る。甲之は詩集『消なば消ぬかに』（明治四〇）の序で「空漠なる技巧を弄して消閑の具たらしめむとする」ことを排し、「和歌入門」（『アカネ』四号 明治四一）の中で「歌は自然に心に浮び、眼に映ずるままを詠すべきで、趣向などいふ自覚的の作歌法はいかぬ」「美しいことを歌はうとするより先づ真実を歌はうとする方がよい。優美とか神秘

とかいふことを心懸くると自然実地の感情を捨て、つまらぬ空想に耽って、微細な感情を誇張するやうになる」と説いて居る。

「遠田の蛙天に聞ゆも」「砂ゆるがして水の湧く見ゆ」と歌った時期は、甲之の「自然の鑑賞と技巧の錬磨の時代」（改造社版『現代短歌全集』三井甲之集後記 甲之自記 昭和六）であって、いまだ甲之の真面目は發揮されて居ないのであるが、たちどまって冥想せず、技巧に溺れず、見たまま感じたままを、まっすぐ詠みくだす態度は終生一貫して居る。人あるいはこれを幼稚といふであらう。しかし、まっすぐに詠みくだしたとき、甲之の心の中に清新なそよ風が起こったのである。自然随順はおのづから人生随順・祖国随順となつて、古神道の神ながらと、親鸞の他力易行道と、ゲーテの人生肯定とを、甲之は内心に渾融して味はったのである。甲之はこのさはやかな風を、広く日本人の心から心へ吹きわたらせかけたのであらう。ひとたび、さはやかな風に乗托することを知った者にとつて、芸術的技巧をこらすことなんか、つまらぬことに見えて来たのであらう。甲之はかうして歌壇といふものから遠ざかるに至つたのである。

甲之の縁で歌に志し、後に茂吉と並んでアララギの重鎮となつた土屋文明は「甲之のい

いところは、何といつても、その豊かな抒情的詩人的天分であつたのではないかと思はれる。その稀なる天分が、当時としては稀なる好境遇による教養によって十分に發揮される機会のなかつたといふことは、私のやうに初めて歌を作ることを彼によって導かれたものの一人としては、惜しんでも惜しみきれないやうに感ぜられるのである」(土屋文明著『伊藤左千夫』 昭和三七)と甲之に對する強い愛惜の情を述べて居る。

茂吉はかう書いて居る。「三井甲之君を訪へる折り、詩歌特に短歌の如き抒情詩的のものを作らむとならば、長く少女ごろの様な心持で居らねばならぬと話されし事ありき。さもありませんか」(『アララギ』明治四二年一月号、『童牛漫語』収録)。「さもありませんか」と茂吉は甲之に相槌を打つて居るのである。論敵となつて相別れ相戦ひ、歌に對する態度も全く違つていつた二人であるが、初期における甲之の影響を考へずして茂吉を論ずることはできないであらう。近代短歌史上における甲之の位置と意義は、あらためて見直されなければならないのである。

(『国民同胞』六六号 昭和四二)

(追記) 茂吉は「明治大正短歌史概観」の中で「甲之は可憐な新体詩も作つたが『帝国文学』あたりの批評は無理解であり、いまだ新詩社風尊敬のなごりが漂つてゐたので甲之の

ものには殆ど同情がなかった」と書き、甲之の「可憐な詩」にむしろ好意的だ。その甲之の詩集『消<sup>サ</sup>なば消<sup>サ</sup>ぬかに』（明治四〇）から私の愛誦する短詩「蟬」を引用しておく。

「蟬なく」とあ<sup>（き）</sup>がいへば

「昨日より」と汝<sup>（な）</sup>がいらへ。

わづか二行の短詩ながら、伊東靜雄の「初蟬」十八行よりも遙かに清新でみづみづしい。

いま一つ『消<sup>サ</sup>なば消<sup>サ</sup>ぬかに』から引用しておく。三節から成る十五行の詩「藻伏束鮒」。

藻に伏す魚よ。／ともしき光／寒き水。／な行き、氷は／汝<sup>（な）</sup>が身刺さむ。

藻に伏す魚よ。／底ひの波の／なごり波。／あああざやけし／動くぞいのち。

いづちよ光／ただ一筋に／し<sup>（き）</sup>が光／張る光／藻<sup>（モ）</sup>伏束鮒<sup>（フシツカフナ）</sup>。

藻伏束鮒は藻の間に潜む小さな鮒。冬川にかすかに動く、そのささやかないのちに目を注いだのである。「藻伏束鮒」も「消なば消ぬかに」も萬葉語。甲之は萬葉の古語に己が生命を吹き込んで活用したのである。

更に一篇、「後の月」。

何地イッチより来し／われは知らず。／月窓を照らし／木影夢の如し。／俯ウツシしさりし汝ナが姿、／待つ間マもたぬし／心そぞろに。／衣キヌの音なひ／近づくチカくけはひ／月の光も揺るかと思ほゆ。

これは『アカネ』一ノ十一（明治四一）に発表され、のち若干手を加へて詩集『日本の歡喜』に収録。茂吉が可憐と評した甲之作詩の一端である。



## 第四章

「しきしまのみち」とわが人生



## 1 天地のおのづからなる力

私は幼少のころから自然の美しさに感動することが多かった。小学生のときも立山の美しさにしばしば我を忘れて見とれた。中学二年のころからは国文学に親しみ、和歌を愛好したが、それも自然の美しさと深くかかはりあつてゐた。

道ばたには夏草が茂り、田川にはフナが泳ぎ、林にはセミが鳴く。その中で私は育つた。この豊かな自然こそ人間の住み、安らぐ環境であつた。鳥獣虫魚がほろび、自然が失はれたら、人間もやがて滅びてしまふであらう。この自然にとけこみ、自然とともに呼吸することが、私の幼少からの生きがひであつた。

この自然と調和した日本の伝統文化を私はこよなく愛した。美しい自然によつてはぐくまれた文化、その文化伝統によつてつちかはれた自然。自然と文化とはたがひに因となり果となつてゐる。それは別個のものではなく、私にとって一体である。私の生は、この日本のいのちとともに脈打ち、日本のいのちとともに息づいてゐる。

一特攻隊員は「七八たび生れ變りて守らばやこの美しき大和島根を」の一首を残して花と散ったが、死に臨むいまはの心にひたすら念じつづけたのは美しき大和島根の永続であった。私もまたこの常若とこわかのいのちの護持を少年時代から念願しつづけた。私は現在、図書館の仕事に力をそそぎ、地方史の研究に情熱を傾けてゐるが、その気持ちは、日本の伝統を守り伝えたいといふ念願と深いところでつながつてゐる。

日本文化の原点ともいふべき神社は深々とした森にしづまり、社そのものが自然にとけこんでゐる。社頭に立つと、私は個々の社を超えて、「天地にみなぎるいのち」をひたひたと実感する。私は社寺に個人的な祈願はしない。神仏に頼らない。理論もいらない、教義もいらない、御利益ごりやくもいらない。「神ながら言挙げせぬ国」である。清浄簡素な力強さ、自然と調和したなつかしさ、ただそれだけでいい。

私は中学三年のとき、正岡子規の歌論に啓発されて萬葉集を熱読し、さらに古事記・風土記の神話伝承に深く感動した。なによりも古代日本語の力強さに打たれ、その微妙なシラベに酔うたのであった。これらの古典の一節を朗誦することが今も私の毎朝の日課となつてゐる。その言霊ことだまが私を力づけ、私の生を支へてゐる。

私にとって言葉は真偽判別の目安である。内容がどんなにりっぱさうでも、それを表現する言葉が力弱く、落ち着きがなく、虚飾に満ちたものには近づかない。真心がリズムを打って伝はってくるものだけを信じてゆく。

中学四年のとき、私は重い腎臓病をわづらひ、生死の間をさま迷うた。医師もサジを投げ、家族は皆泣いてゐたといふ。その最悪の症状に突然原因不明の転機がおとづれた。今まで出なかつた尿が急にせきを切つたやうに出はじめ、私は死地を脱した。

いかに全力を尽くしても、人力には限界がある。「天地のおのづからなる力」に催されてはじめて人間のはかない努力も生かされてくる。私は瀕死の重病によって「天地を照りとほす光」を感じとり、「不可称、不可説、不可思議の他力」を知つたのであつた。

死地は脱したが、尿中の濃い蛋白はどうしても消えなかつた。私は熟慮の末、断食療治に踏み切つた。周囲の反対をおしきつて自宅で断食を強行した。かうして私の難病は完全に治癒した。「天地のおのづからなる力」に帰依し随順しつつ、しかも人間として思慮の限りを尽くし、不屈の意志をもって努力すべきことを私は体得した。私は治病体験によつて、生きてゆく姿勢を学びとつたのであつた。

私は病氣のため、立山連峰は下界から遠望するだけであったが、重病後十二年目に八郎坂の急坂をよちて立山に登り、自信を回復した。山岳は最も雄大で最も奥深い自然である。汗水垂らし難行苦行して頂上にたどりついたときの感激はたとへやうもない。しかし交通機関を利用して安々と登った山には、まるっきりこの感激がない。人間の努力のかぎりを尽くし、その努力あってはじめて「天地のおのづからなる力」にふれ、大歓喜に到達する点、登山はまさに私の人生観そのものである。

登山中、悪天候に遭遇すれば、息をひそめて大自然の力に従はねばならない。自然に対し、いささかも傲慢であってはならない。誠実に謙虚に、努力に努力を重ねてゆく。それが登山である。登山において私が味はふのは「自然の妙」であり、同時に「人生の妙」である。

現代社会では、文明なくしては一日も生きえない。しかしその中でできるかぎり生活を自然に近づけ、自然とともに汗みどろの努力を重ねたい。古典のシラベに力づけられつつ、仕事に全力をうちこみ、仕事の中で充実感を味はひ、最後には、山頂から青空にとけ入るごとく、悠久の日本のいのちにとけ入りたいと思ふのである。

「天地のおのづからなる力」の付記

これは、富山新聞が昭和五十二年、県下十数名の人々に寄稿をもとめ、「風雪の構図——体験的人生論」と題して連載した時、私の書いたものである。

この文中にも記した中学四年の時の瀕死の重病を切り抜けた体験が大きな力となって、四十四年後の昭和五十六年、癌に冒された時の私の心構へを決定したと、しみじみ思ふのである。

なほ、文中、「最悪の症状に突然原因不明の転機がおとづれ、死地を脱した」とだけ記したが、実はこの時、天皇陛下（つまり昭和天皇）の白馬に召された御姿を夢に拝し、その日から奇跡的に、全く奇跡的に病状が好転したのであった。更にその後、数ヵ月も立たなかつた足が初めて立ち、一二歩あるくことが出来たのは奇くしも昭和十三年四月二十九日、天長節の日であった。

（平成二年五月二十四日追記）

## 2 神社と地域社会

立山登拝は越中男子一生の大事であった。この古くからの慣習は明治以後も県民生活の中に脈々と息づき、男女ともに立山に登り、その汗みどろの苦難登高は進取敢為の県民性を鍛へあげた。

未明、星をいただいで室堂むろどう（山小屋）を出発し、凍りついた雪溪を踏み、暗黒の岩角をよぢ、頂上にたどりつく。そこは海拔一万尺、天に近い清浄な岩頂、富山県最高所に立つ神社の社頭である。太鼓の音はとうとうと七十二峰八千八谷にこだまして響き、雲海のかなたからはさんさんとして火の玉のやうな太陽が昇ってくる。すべて清爽、すべて荘嚴、そしてすべていきいきとした力強さに満ちてゐる。越中人はかうして神人合一の感激を味はひ、その活力を下界の生活、地域社会の営みの中で生かして来たのであった。

立山登拝の際は、まづ氏神のやしろにまうでてから出発し、無事下山すればまた氏神に報告する。集落といふ集落には必ず神社が鎮座し、人々はその氏子として平和に暮らして



来た。これら村々町々の神社こそ地縁・血縁につながる人たちの心の結び目であった。

戦時には郷土出征軍人の武運を祈り、時代の相、社会の相を反映して神社も揺れ動いたが、地域社会の人々の心の安らぐ場所、村びと町びとの共同祈願の場所といふ根本性格はいささかも変はることなく、氏神さまとか鎮守さんといふ平和そのもののやうななつかしい言葉が深々とそこに息づいてゐた。初まうで、春祭、夏越しの祭、秋祭……と年ごとにくりかへす祭礼は、村の生活・町の生活にリズムをかなで、人々の心に美しい季節感を養はせ、人生を自然にとけこませた。

神社信仰の基底には、自然の威力、自然の美、自然の恩恵に対する素朴な感動がある。人の命をつながせていただく食物穀物に対する感謝がある。さらに国土郷土を拓き、地域社会に尽くした遠い祖先、近い祖先に対する敬慕が加はり、それらが時代とともに揺れながら一つに融合してゐる。人々は、個々の祭神名を超えて、自然と人生の根源を尊び、あめつちの恵みに融けこむのである。

深々と茂った鎮守の森は、町の中にも太古の自然のおもかげをとどめ、野鳥が巣くひ、自然保護のオアシスともなつてゐる。境内は日ごろ森閑として、かしは手打つ人の心を洗

ひ清める静寂な聖地である。

それが祭の日には、多勢の人がおしかけて共同の興奮が境内にうづまく。五穀豊穡のたのぼりが風にはためき、境内も狭しと露店が並び、その駄菓子・安おもちゃに子どもたちは胸ときめかせ、そこで味はったたのしくもなつかしい思ひ出が、故郷のイメージとなつて一生を支へてゆく。曳山をくり出し、獅子舞を舞ひ、「尊さに皆おしあひぬ」（泊船集）と芭蕉が歌つたやうな祭礼のにぎはひの中で、人々は知らず知らずのうちに地域社会にかけこみ、地域住民の感覚を養つてゆく。

祭の日の社頭は、個々の利己的祈願でなく、個を超えた地域共同体の祈願の場であつた。十七条憲法の巻頭に「和」が強調され、日本の古い国号は「大和」と表記されたが、個々の願ひを包摂しながらも、それを超えた共同の祈願に人々を結集させ、地域社会の「和」を実現して来たのが鎮守の祭であつた。

戦後、都会化が進み、核家族化が進み、個人的願望が色濃く反映するやうになつたが、なほそれを超えて地域公共的な興奮が神社の祭礼にはうづ巻いてゐる。日ごろは我執我欲の強い人も、鎮守の祭には、地域社会の煮えたとつ活力に浸つて、われを捨てわれを忘れ

る。「物みな偕和に鳴りひびく」(「ゲーテ『ファウスト』甲之訳)それが神社の祭礼である。

富山県民の進取の気性は、明治から大正にかけて北海道へ大量の開拓移民を送り出したが、その北海道開拓地に持ち伝えられたのは郷土富山県の獅子舞であった。曳山をくり出し、獅子舞を舞ふにぎはひは、まさに「生ける和」の姿であり、平和の喜びそのものである。

(『北日本新聞』昭和五八・五・九)

### 3 史学の底清水

ある病にきく有効成分は何か、それを徹底的に究明し分析してその正体をつきとめ、これを抽出し、さらに進んで化学的に合成する。これが近代的西洋的医薬である。この医薬は時として恐ろしい程の効力を発揮するが、まかりまちがへば恐るべき副作用を伴ひ、人間そのものをも滅ぼしかねないのである。

有効成分の化学構造式などつきとめず、多年の伝承的経験を基盤に全草を陰干しにして

煎じて飲む、これが民間薬のゆき方である。効果は緩慢かもしれぬが、人間を蝕ばまず、長年月の服用にたへるのである。

我々は近代的医薬の恩恵なくしては生きられさうもないが、しかしまたその濫用を慎しみ、民間薬・和漢薬による総合的自然治癒力の助養を心がけるのである。両者巧みに使ひこなすのが、東西文明の接点に立つ日本人といふ恵まれた私どもの知恵であらう。

我々学に志す者は、目ざす一点をふりしぼって研究し、これを整然たる論文にまとめあげようと全力を打ち込む。論理的にいささかも矛盾せず、従来諸説を的確に批判し、論証鋭く、序論から本論へ、本論から結論へと寸分の隙もなく構成しようと努力するのである。

しかし、私は時として思ふことがある。西洋医薬的ともいふべき、このやうな論文のみが学術に貢献し人間に寄与するのであらうかと。分析し抽出し合成してゆくうちに何か見失ふものがある、かへって真実を失うことがないのであらうかと。麗々しく構成された論文が、薬品の副作用のごとく、人生に害毒を流すことがないであらうかと。

柳田民俗学の出発点といはれる『後狩詞記』とか『遠野物語』は、いはゆる学術論文の

形を成しては居ない。形だけを見れば、聞き書の寄せ集めである。随筆調の作品である。その後の柳田翁の著作も随筆的なものが多い。しかしながら、それらの著作の新鮮な不思議な力は、潑刺として居る。史学と民俗学とはもちろん同じではないが、私は民俗学の、全草煮つめてくゆらすやうな行き方に深く心引かるのである。新村出博士にも、たのしい随筆的著作が多い。その美しい随筆の中に、学問的眞実の切り口が宝石のごとくきらめいて居る。私はその魅力を忘れることができないのである。

私が大和路を訪れ、神の山三輪山に登ったとき、天をつく木が凄い音をたてて咆哮した。風もないのに金属のきしむやうな音を発した。全く今まで経験したことのない恐ろしい物音であった。大物主の恐るべき靈威に迫はれるやうな思ひで私はいそぎ山を下った。また崇神天皇陵にまうでたとき、日本にこんな大きな蛇が居るのかと思ふ程の大きな青大将が出て来て、柵のうちから私に相對した。身のすくむ思であった。また伊勢では、神宮司庁の庭で白蛇に出くはした。ふつう蛇は無気味なものだが、私は生れてはじめてすこしも無気味でない、神々しい気高いといふやうな気持でこのふしぎな蛇を見た。蛇は静かに庁の床下へ入っていった。いささか神秘的な例ばかりあげたが、喜怒哀樂・畏怖・憧憬・

悔恨、さまざまな思ひが史跡めぐりにまとひついてくる。

しかし、論文を書くとき、こんなことはかりそめにも書かない。そんなことはなかったかのやうに切り捨ててゆく。それはそれでいいのかもしれない。しかしながら、我々が全力をあげて歴史に迫らうとすると、必ず遭遇するさまざまな出来事。その出来事に遭遇した刹那、我々は歴史の脈搏にちかに触れて居るのではなからうか。さまざまな出来事をふくむ体験の総体こそが真の史学ではなからうか。

もろもろの体験は目に見えぬ力となつて研究者の内部にとけこみ、論文の字面には現れずとも、その行間に息づいて居る、そのやうな姿こそ理想であらう。史料探訪の旅で、蕎麦を食べて息づいたといふやうな、はかない出来事も、道ばたで小犬が尾を振って居たといふやうな、何でもない出来事も、すべてが集まってその人の史学を目に見えぬ所で養ひはぐくんでゐる。分析し抽出し合成してゆく論文のはしばしにも、おのれの全体験のいぶきをあますところなく吹きこむやうにしたい。歴史とまともにもぶつかつたときの、閃めくものを、みづみづしい力を、全力こめて書きとどめたいと私は切に思ふのである。「理論は灰色である。人生の黄金樹は緑である。」(ゲート)。

(『富山史壇』六五号 昭和五一)

## 4 古典読誦

### ①本を読む声

昔は小学校の前を通ると、本を読む声が朗々とひびいて来たものであった。鶏犬の声は人里の指標、朗読の声は学校があることを示す指標であった。

ところが昨今は、学校の側を通っても、本を読む声など全く聞かれなくなった。防音装置のためだけではなく、教育のしかたがまるきり変ったためだといふ。

なるほど知的理解や読みの速度といふ点では黙読がすぐれてゐるかもしれない。また多勢の人が別々の書物を読む図書館などでは黙読でなくてはならない。しかし一つの教科書を同時に使ふ学校の教室での声読の意義は見直す必要があるのではなからうか。私のやうな教育畑の部外者には、そのやうに思はれてならないのである。

昔の教室では、まづ先生が模範的な声読をされ、次に一人づつ指名されて一節づつ読み、そのあとで教室全員声をそろへて朗読した。その声読のリズムの中で、国語は生き生

きと活動し、児童の血となり肉となった。まさに言霊ことだまであつた。情意的な文はいふに及ばず、知的な文でも、声を出して読めば、理解のしかたがただちに読み方の巧拙に反映してくる。くぎり方、息のつぎ方、声の強め方、声の落し方、国語のいのちは、風の如く、波の如く児童の魂をゆさぶり、教室にみなぎつた。

聖徳太子は「声は以て意を伝へ、書は以て声を伝ふ」(勝鬘經義疏)といはれた。声こそは人の心を伝へる微妙音であり、書物は時間を超え、空間を超えて、その声を伝へる楽器である。著者の声を復唱し、著者の声を味得することによって、著者の魂の神髄にふれることができるのだと思ふ。

私は毎朝、神前に正座して最も尊敬する二三の古典を一節づつ声をあげて読誦してゐる。それが私の一日における「天地のはじめ」である。その日の活力の源である。

『富山県小学校教育研究会会報』一九三三号 昭和五四



## ② 声以伝意、書以伝声

—好きな言葉—

「正像末和讃」などを讀むと、親鸞その人の心がリズムを打って迫り、深く感動する。ところが「帖外和讃」となると、教義を七五調にしただけで、心に響くものがない。干かたびた言語の羅列である。(多分、親鸞の直作でなく、後人の仮託であらう)。

私は多年、読書に心がけ、古典に親しんできたが、私の常に求めたのは、著者の「声」がひたひたと聞こえてくる書物であった。心の支へ、人生の支へとなるのは、単なる「教義」でなく、そこに深く息づく何物かである。

掲出の語は聖徳太子の『勝鬘經義疏』中の句である。勝鬘經では、仏書を読むことを「仏の音声おんしやうを聞く」と表現されてゐる。それに対する太子の注がこの句である。この句の順序を逆にして「書は以って声を伝へ、声は以って意を伝ふ」とした方が自然で理解しやすいが、どこか安易である。やはり原典のままの語こそが、經典に体当たりして苦渋しつつ、その注釈に心魂を砕かれた太子の精神の結晶である。私は事あるごとにこの謹嚴簡素

な語を口ずさむのである。

本居宣長も、古語を明らめ『古事記』の言葉から上代の音声を取り、上代の心意に迫らうとした。太子・宣長、所依の經典を異にするが、そこに息づく精神は同じである。

私は入浴して陶然としてくると、萬葉の長歌を朗唱する。人麻呂の「声」が、憶良の「声」が、家持の「声」が、湯ぶねにあふれ、狭い浴室にこだまする。黙読では気づかなかった「声」が、朗読によってよみがへってくる。この意味で、現在の国語教育から「朗読」が失はれたことを、私は教育の根本的欠陥として残念に思ふ。

古代と後代とは音韻も変化してゐる。積尊の語と日本語は同じではない。しかし、時代を超え、言語の相違を超えて、「声」を伝へ「声」を聞き「感応相称」するのが真の読書である。人生を支へる指針となる読書である。

(『北日本新聞』昭和五九・一・一五)

### ③ 青春読書記、萬葉集

私が中学一、二年のころ富山の自然は実に美しかった。学校の近くの古い農家の垣根には桜が咲き、田川の水は草むらの中にすずしい音をたててみた。私は自然を愛し、自然美

を 典雅な言葉で歌ひあげた古風な和歌を愛誦した。人間くさく、バタくさい近代詩歌はどうしても好きになれなかった。古今集によって創造された日本美の原型ともいふべきものが私をひきつけてやまなかつたのだ。

その私を雷のごとく打ち倒したのは正岡子規であった。「貫之は下手な歌よみにて古今集はくだらぬ集にこれあり候」、偶然手にした子規の歌論に私は目を見張って驚いた。私から古今調のつきものを落とし、萬葉集に目を見開かせたのは実に子規であった。子規の短歌革新といふ文学史上の重大事件を、私は自分自身の内的事件としてうけとめるといふ、かけがへのない貴重な体験をしたのであった。

萬葉ときいただけで胸がドキドキするほど私は萬葉集、とりわけ人麻呂の雄大で重厚な調べにとりつかれた。中学三年の時、校友会誌に発表したエッセー「柿本人麿の歌」は、私の文章が活字になった最初のものであった。

同じ上代文学として私は古事記に手をのぼし、古代叙事詩の壮大な力、日本神話のみづみづしい生命を知った。外国文学はほとんど読まなかったが、ファウストだけが例外であった。子規・萬葉・古事記、そしてファウスト、それは私の中学時代の火やうな熱読書で

あった。私の青春を養ひ、現在に至るまで私をささへて来た最大の力であった。

〔富山新聞〕昭和四六・五・二四

#### ④ 心の一冊、古事記

私が萬葉集を読みはじめたのは中学二年のころであったが、本当の萬葉のよさはわからなかった。その私の目を大きく開かせてくれたのは正岡子規であった。中学三年のとき学校図書室から借り出した子規の歌論が雷のやうに私を打ち、その稲光は萬葉集の巨大な姿を暗黒の中に照らし出してくれた。私は萬葉集に熱中し萬葉集のとりこになった。私の萬葉は当世の大家とは無関係で、清新の気迫に満ちた明治の子規によって開眼されたといふことを、私は今も誇りに思ひ、幸福だったと思つてゐる。

私は萬葉集の中でも柿本人麻呂の大波のうねりにも似た強い調べに共鳴し感動した。その感動を拙い一文にまとめて校友会誌に発表したのが、私の文が活字になった最初のものであった。

人麻呂の長歌には神話的伝承がおごそかに力強く歌ひこめられてゐた。私はさらに古事

記・日本書紀に手を伸ばした。漢語の虚飾で語調のごつごつした書紀はなじみにくかったが、古事記から受けた感動は大きかった。

小学校の教科書で断片的に習った神話とはまるきり違った、どろどろとした力がうづをまき、煮えくりかへって迫って来た。

例へば、教科書の「天岩屋物語」は全く平板でキレイゴトに終はってゐたが、古事記の天岩屋の段には、まっ暗闇の中にたちこめてくる妖気、騒然たる悪神のうごめきがまざまざと感知された。その暗黒をつき破って常世の長鳴鳥が朗々と鳴く。オケを踏みとどろかせて舞ふ天のウズメ。高天原をゆすつてドッと笑ふ八百万の神たち。笑ひに誘はれてまぶしい一条の光がほとばしる。日の神の出座！ 天も地も照り輝き、よろこびに揺れかへる。本当に大きな笑ひ声が私の体をゆさぶって響いてくるやうであった。鶏声が聞こえるやうであった。

この古事記を「強き和文」と激賞したのはやはり子規。また古事記の調べを現代に移して歌ったのは川出麻須美であった。叙事詩のやうな古事記の文は三十余年後の現在も私を揺さぶりつづけてゐる。古事記こそ私の生きる力の源であった。萬葉集と相表裏し、子規

と麻須美を左右に据ゑて、古事記は今も私の魂の中で火の玉となって真つ赤に燃えつづけ  
てゐる。

〔北日本新聞〕昭和五〇・七・七

### ⑤ 書物の魂

私が図書館に勤めた頃、書庫に入ってみてまづ感動したのは、中学生のころ閲覧室で読  
んだ本が昔のまま健在なことであつた。宗不早の『柿本人麿歌集』、冠松次郎の『黒部』  
『劔岳』など、私の若き日の魂を養つた本が、戦災にも焼けず、もとのままの姿であつた  
ことは本当になつかしかった。会津八一の「昔わがあした夕べに読みつぎし書なほありて  
書庫はかなしも」の感懐そのままであつた。（注。図書館蔵書の約七割は疎開されて戦災  
を免れてゐた）。

書籍は単なる物体でなく「生ける書格」。著者の人格から分れ出た別個の人格的なもの  
であることを私はひしひしと感じた。宣長は神の分霊について「一つの火を取りて燭と薪  
とに着くれば、燭にも薪にも移りて燃え、本の火もまた減らず滅えず」（『鈴屋答問録』、  
要約）と比喩巧みに説いてゐるが、書籍にもまた著者の人格の火が分火されて燃えてゐ

る。古典ともなればその後の国民の感応の火が燃え加はってゐる。読書とはその火の粉をまともに浴びることである。

図書館では「資料」とか「情報」といふ語をよく使ふ。私も必要に迫られてよく使ふ。しかし「資料」とは要するに材料である。人格的な深みのある語ではない。生きた人間がその人格にふさはしく化粧し衣裳をまとうやうに、生きた書籍もまたその書籍にふさはしい用紙・活字・装幀をまとう。しかし「資料」であれば、装幀なんかどうでもいい、コピーでも十分だといふことになる。

かつて東京の某図書館司書が私の館に見え、山田孝雄博士の『奈良朝文法史』を見て感激してゐた。「この本が貴館にないのですか」とたづねると「あるにはあるが、改装製本されてゐるため今初めて本当の姿を見た」とのことであつた。書物にはその書物にふさはしい姿が不可欠なのだ。

これからの図書館にはますます「資料・情報」の語が重要とならう。私もこの語を使ふであらう。使はざるを得ないであらう。しかし「資料」の語を使ひ、資料として活用しつつも「書籍・書物・図書・典籍」に対する深い愛敬の念を失ひたくないと思ふ。書魂を祭

り、書魂にかしづき、蔵書何十万の書魂が火となって生き生きと燃え、末代に至るまでその書益書恩を蒙らしめるやう、心を尽し力を尽したいと思ふのである。

『富山県図書館協会報』七七号 昭和五三



## あとがき

本書は前著『萬葉集 その漲るいのち』を承け、主に萬葉以後の和歌について書いた、いはば前著の続篇である。

『萬葉集 その漲るいのち』の原稿は昭和六十三年夏ほぼ脱稿、八月二十八日大伴家持卿の命日の日付でその「まへがき」を認め、更に念査推敲を加へ、全原稿を担当者小柳陽太郎さんのもとへ送ったのは、正岡子規居士命日にあたる九月十九日であった。

その九月十九日、昭和天皇は御発熱、つづいて翌二十日御吐血のニュースが日本全土を震撼させた。以後百日有余、日夜テレビは陛下御重病の御容態を刻々とつぶさに伝へ、暗雲は重く垂れこめ、私はその下で歯をくひしばり涙を噛みながら校正作業に取り組んだ。

六十四年一月七日、万民の祈りも空しく、陛下崩御の報に天地も暗黒に打ち沈み、私は終日呆然とテレビの前に坐しつづけた。一月二十四日矢も楯もたまらず上京して、蜿蜒つづく人々にまじって皇居を目ざし、人ごみかきわけて近々と御影を拝し、嗚咽慟哭した。

昭和天皇の御重病と崩御こそはまことに終生忘れえぬ大事であった。

前著は、このやうな状況下、平成元年三月刊行されたのであった。

前著には第九章「大伴家持をめぐって」の次に「萬葉調の復活と継承」の章を用意してゐたが、ページ数が予定をはるかに超えたため、これを割愛した。本書に収めた実朝・良寛・篤好・甲之・茂吉の諸篇及び「連作短歌論」は前著の最終章に収録を予定してゐたものである。実朝や良寛については従来もおびただしい論考・評論が世に出てゐるが、越中の五十嵐篤好の歌について論じたものは、私が地もとの短歌雑誌や『富山県史、近世編』で紹介した以外には殆ど無いであらう。「知られざる萬葉調歌人」と題したのはそのためである。

三井甲之を齋藤茂吉との対比において積極的に評価したものとしては、米田正昭氏の論文「抒情的ナシヨナリズムの成立——三井甲之（一）——」（『文学』二八——一、昭和三五）がある他、あまりないであらう。私が本稿を発表したのは昭和四十二年『国民同胞』誌上においてであつたから、二十三年も前のことになるが、今年（平成二年五月）刊行された本林

勝夫氏著『斎藤茂吉の研究——その生と表現』には、「茂吉と三井甲之」の章があつて十九ページにわたつて詳しく論じてあり、驚いた。私の引用対比したのと同じ作品が四組も取り上げられてある他、私の気付かなかつた両者の文や歌も多々引いて論証されてをり、なかなか読みごたへのある卓論である。氏のこの論文の初出は昭和五十六年の『山梨英和短大國文學論集』の由。甲之の出生地山梨県で發表されたのである。

本書には、上記萬葉調諸歌人の他、上杉謙信等の歌を引き、武人詠歌の伝統とその意義を論じ、また明治天皇・昭和天皇の御製に関する幾つかの論考を集めて、天皇御製歌の意義を論じた。

明治天皇の山に関する御製については、日本山岳会の機関誌『山岳』六二号（昭和四三）にかなり長大な「山と明治天皇」（引用御製一二〇余首）を發表したことがあつて、これを本書に収めるつもりであつたが、ページ数が膨大となつたため、『國民同胞』發表の短文「明治天皇御製と山」（引用御製三六首）に変更した。

川出麻須美には多年傾倒し、これについて書いた拙文も少くないが、本書にはその一端

を収めた。夜久正雄さんが本書序文（「はしがき」に代へて）で言及して下さった「鹿菖しかずがら渡研究」はあまりにも長大なため最初から収録範囲外とした。また「蛩と少女―川出麻須美作品評釈」（昭和五十六年、私の癌闘病中の執筆、『国民同胞』二三八号所収）も割愛したが、これについては寶邊正久さんその他の方から削除を惜しむ声があった。

上杉謙信についても川出麻須美についても、正面切つての論文を用意したのであるが、小柳さんの御意向に従ひ、若い学生たちにも読み易く分かり易くといふ趣旨から、これを見送り、富山大学信和会での講義の筆録の方を採用した。この部分だけ文体が「です、ます」体になってゐて、他の文の文体と違つてゐるのはそのためである。この他にも、子規に関する文など、種々の事情を考慮して幾篇か収録をとり止めた。

巻頭には「夏草と敷島の道」「暁の鶏声と日本の古伝承」の二篇を据ゑ、日本文化の「底荷」――底つ力ともいふべき和歌の不思議な働きをすこしでも解明しようとするが、これを冒頭に置いたのは、小柳さんの御意見によつて、導入部的な意味をこめての処置である。（なほ「和歌や俳句は文学といふ舟の底荷」といふのは歌人上田三四二氏の語で、俳人飯田龍太氏がこれに賛意を表してゐる。その語をここに利用させていただ

た)。

最後に「しきしまのみちとわが人生」の章を設け、地もとの新聞・会報等に発表した数篇の短文を収め、和歌によって培はれて来た私の人生観の一端を、半ば自叙伝的に披瀝し、また私の古典に対する研究姿勢を明らかにした。

私の和歌研究は富山中学校在学時代から独力で独自に始めたものであるが、五年生の頃、『国民同朋和歌集 明治篇』によって川出麻須美先生の歌をも知り、やがて昭和十七年頃から夜久正雄さんに導かれてこれに心魂打ち込んだ。

昭和十八年、国学院大学予科在学中の私が初めて夜久さんのお宅(当時麻布広尾町)をおたづねした時、あいにく夜久さんは御不在であった。翌々日、夜久さんからお葉書が届いたが、それには「留守のまに君きましけむなつかしき名刺の机の上にあり」「留守にせしことぞくやしきいま一足早くかへりなばあひけむものを」一行あけて「空晴れて風さむからずあしたより君来ますかと待ちにけるかな」等の短歌が認められてあった。なつかしい思ひ出である。

昭和二十一年、戦災後の東京は下宿もなく難渋した。夜久さんが「私の家に来い」と仰つしゃつて下さり、夜久さんのお宅に御厄介になつた。朝な朝な明治天皇御製を拝誦された夜久さんの朗々たるお声が今も耳もとに響いてくる。また夜久さんはホイットマンの詩を英文のまま朗読されたが、Pioneers! O Pioneers! と繰り返された躍動するやうなリフレーンが鮮やかに耳底に残っている。川出麻須美先生が、昭和二十四年、私に向かつて大正時代の自作長詩「海の舞踏」を暗誦されたお声とともに、忘れえぬ言霊ことばたまの幸さいきはひであつた。私の研究を冥々裡に導いて来た幸魂さいきたま奇魂くしみたまであつた。

その夜久さんから、このたびの拙著に対して身にあまる序文をいただいた。あらためて甚深の謝意を表するものである。また小著を本叢書の一冊とすることに御配慮いただいた国民文化研究会理事長の小田村寅二郎さん、編集・校正その他こまごまとした万端のことにつき、前著にひきつづきお世話いただいた同副理事長の小柳陽太郎さん、同常務理事・事務局長の長内俊平さん、ならびに割付をはじめ奥村印刷との連絡一切を多忙な中をお世話くださった講談社の部長をしてをられる当会理事の磯貝保博さんその他の方々に対し、心から御礼申上げるものである。

炎天をとよもして樹間に蟬の声満ち、そぞろ四十五年前の夏を想はしめる。かの大戦における無数の同胞戦死者・戦災死者を深く思ひ、更に当時の敵国異国の犠牲者に思ひを致し、「さきに生ぜんものはのちをみちびき、のちに生ぜんものはさきをとぶらひ、連続無窮にして、ねがはくは休止せざらしめんと欲す」(親鸞『教行信證』源覚延書本)の語を噛みしめながら、日の本のまことの道の開明護持を念じて、この拙い一書を世に出さむとするものである。

平成二年八月二日

富山戦災、祖母戦災殉難の記念の日 廣瀬 誠





# 著者略歴

大正十一年、富山市にて出生。  
富山県立富山中学校卒、国学院大学中退。  
富山県立図書館に三十余年勤務(司書のち館長)。  
現職、富山女子短期大学教授(図書館学)。  
▲著書「越中奥山の地名」昭和32、「立山信仰」昭和44、「立山と白山」昭和46、「立山黒部奥山の歴史と伝承」昭和59、「歌集 坂の沼琴」昭和58「萬葉集その漲るいのち」平1、「図書館と郷土資料」平2 ▲共編「川出麻須美遺稿集 天地四方」昭和47 ▲解説校注「越中安政大地震見聞録」昭和51、「越の下草」昭和55、「越中遊覧志」昭和58、「越中立山古記録」平1 ▲共同執筆、「和歌文学大辞典」昭和37、「世界山岳百科辞典」昭和46、「富山県大百科辞典」昭和50、「角川 日本地名大辞典」富山県、昭和54、「富山県史 古代」昭和51、「富山市史」昭和62、「富山県歴史の道調査報告書」昭和53、56、「式内社調査報告 北陸道」昭和60、「高瀬重雄古稀記念日本海地域の歴史と文化」昭和53、「川口久雄古稀記念 古典の変容と新生」昭和59、「白山立山と北陸修験道」昭和52、「修験道の伝承文化」昭和56、「新編日本思想の系譜」昭和46、「越中の万葉」昭和46、「大伴家持と越中万葉の世界」昭和59、その他

## 和歌と日本文化

国文研叢書 No.32

平成三年一月二十八日 発行

頒価 八〇〇円

著者 廣瀬 誠ひろせ まこと

発行所 社団法人 国民文化研究会

理事長 小田村寅二郎

〒104 東京都中央区銀座七一〇一八  
(柳瀬ビル)

TEL(〇三)三五七二一五二六(代)

FAX(〇三)三五七二一五二七

振替 東京 七一六〇五〇七番

印刷所 奥村印刷株式会社

東京都千代田区神田神保町二フ四四  
(石坂ビル)

(既刊) 国文叢書 (新書判)

|        |             |                         |                   |       |      |
|--------|-------------|-------------------------|-------------------|-------|------|
| No. 1  | 久正雄一著       | 古事記のいのち(改訂版)            | (原)昭和41年・(改)昭和48年 | 316頁  |      |
| No. 2  | 夜久雄一著       | 日本精神史鈔                  | 親鸞と実朝の系譜          | 昭和41年 | 279頁 |
| No. 3  | 高木高一郎著      | 弁証法批判の歴史                | 昭和42年             | 241頁  |      |
| No. 4  | 小田村寅二郎編     | 日本思想の系譜                 | 文献資料集・上巻(古代・中世)   | 昭和42年 | 309頁 |
| No. 5  | 小田村寅二郎編     | 日本思想の系譜                 | 文献資料集・中巻その1(近世I)  | 昭和43年 | 317頁 |
| No. 6  | 小田村寅二郎編     | 日本思想の系譜                 | 文献資料集・中巻その2(近世II) | 昭和43年 | 409頁 |
| No. 7  | 小田村寅二郎編     | 日本思想の系譜                 | 文献資料集・下巻その1(近代I)  | 昭和44年 | 403頁 |
| No. 8  | 小田村寅二郎編     | 日本思想の系譜                 | 文献資料集・下巻その2(近代II) | 昭和44年 | 381頁 |
| No. 9  | 小川井修二治著     | 歴史と人生觀                  | マルクス主義の超克         | 昭和43年 | 283頁 |
| No. 10 | 小田村寅二郎著     | 欧米名著邦訳(明治)集             | 文献資料集             | 昭和45年 | 483頁 |
| No. 11 | 桑原晩一著       | 日本精神史鈔                  | 花山院とその系譜          | 昭和45年 | 310頁 |
| No. 12 | 夜久正雄・山田輝彦共著 | 短歌のすずめ                  | 創作と鑑賞             | 昭和46年 | 309頁 |
| No. 13 | 夜久正雄・山田輝彦共著 | 短歌のすずめ                  | (続)短歌のすずめ         | 昭和46年 | 316頁 |
| No. 14 | 桑原晩一編       | ヨロシの戦—7世紀—              | マルクス主義批判論集        | 昭和48年 | 338頁 |
| No. 15 | 桑原晩一著       | 国史の地熱—聖徳太子と構氏の精神        | 昭和49年             | 324頁  |      |
| No. 16 | 桑原晩一著       | 日本における                  | マルクス主義批判論集        | 昭和49年 | 293頁 |
| No. 17 | 桑原晩一著       | 明治天皇御集研究(復刊)            | 昭和52年             | 354頁  |      |
| No. 18 | 三井甲之著       | いのち さきぎて—               | 戦中学徒・遺詠遺文抄        | 昭和53年 | 450頁 |
| No. 19 | 国民文化研究会編    | 続いのち さきぎて—              | 戦中学徒・遺詠遺文抄        | 昭和54年 | 421頁 |
| No. 20 | 国民文化研究会編    | 続いのち さきぎて—              | 戦中学徒・遺詠遺文抄        | 昭和55年 | 420頁 |
| No. 21 | 加納祐五・三浦貞成共編 | 戦後教育の中で                 | 「とっちゃん」先生の国語教室    | 昭和56年 | 172頁 |
| No. 22 | 桑原晩一著       | 戦後教育の中で                 | 「とっちゃん」先生の国語教室    | 昭和56年 | 298頁 |
| No. 23 | 小柳陽輝太郎著     | 明治の精神—近代文学小論            | 昭57年              | 335頁  |      |
| No. 24 | 小山松久著       | 「しきしまの道」研究              | 昭和59年             | 320頁  |      |
| No. 25 | 松久正雄著       | 「しきしまの道」研究              | 昭和59年             | 320頁  |      |
| No. 26 | 国民文化研究会編    | 戦後世代からの発言               | 昭61年              | 350頁  |      |
| No. 27 | 国民文化研究会編    | 戦後世代からの発言               | 昭61年              | 357頁  |      |
| No. 28 | 国民文化研究会編    | 戦後世代からの発言               | 昭62年              | 279頁  |      |
| No. 29 | 国民文化研究会編    | 戦後世代からの発言               | 昭63年              | 328頁  |      |
| No. 30 | 廣瀬誠著        | Belief that と Belief in | 平成元年              | 276頁  |      |
| No. 31 | 加納祐五著       | Belief that と Belief in | 平成元年              | 276頁  |      |







